

京都市内遺跡発掘調査報告

令和6年度

2025年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

京都市内遺跡発掘調査報告

令和6年度

2025年3月

京 都 市 文 化 市 民 局



1. 調査区全景（北東から）



2. 調査区南壁及び見通しオルソ写真 (1 : 80)



3. 土塁盛土断面（南西から）



1. 1区全景（東から）



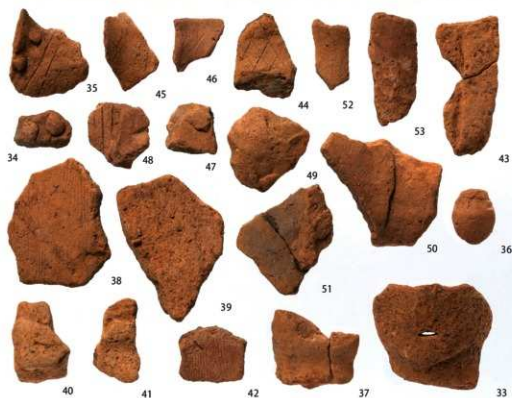
2. 2区石敷道構（北東から）



1. 山田桜谷1号墳から桂川及び京都市街を望む（南西から）



2. 前方部墓石と円形埴輪列（南から）



3. 形象埴輪集合



4. 人物埴輪

例 言

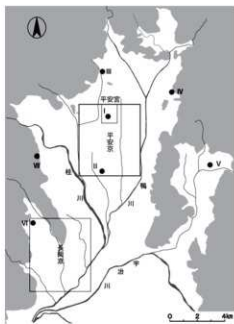
- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した、令和6年度の京都市内発掘調査報告書である。本書では令和5年度・令和6年度に実施した発掘調査成果を報告する。
- 2 調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体となり、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に支援業務を委託した。
- 3 調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。
 - I 平安宮豊楽院跡、鳳瑞遺跡（市受付番号 23K509）
京都市中京区聚楽廻西町186-9、198
2024年7月22日～8月30日 29㎡ 熊井亮介
 - II 史跡西寺跡、西寺跡（42次）、平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡（市受付番号 5N050）
京都市南区唐橋西寺町10-1ほか
2023年12月5日～12月22日 50㎡ 熊谷舞子
 - III 御土居跡（市受付番号 24S028）
京都市北区鷹峯旧土居町4-39
2024年6月3日～6月21日 26㎡ 西森正晃
 - IV 北白川廃寺、上終町遺跡（市受付番号 23S533）
京都市左京区北白川東瀬ノ内町10-1
2024年4月8日～5月20日 119㎡ 新田和央
 - V 山科本願寺南殿跡（市受付番号 23S518）
京都市山科区音羽伊勢宿町32-53
2024年4月3日～4月25日 30㎡ 八軒かほり
 - VI 石見城跡、大原野石見遺跡、長岡京右京一条四坊十五町跡（右京第1283次）
（市受付番号 23A002）
京都市西京区大原野石見町319、324-1、335、336-1
2023年11月6日～12月15日 212㎡ 黒須亜希子
 - VII 山田桜谷古墳群（市受付番号 23A007）
京都市西京区山田桜谷町
2024年2月1日～3月15日 95㎡ 清水早織
- 4 本書の本文執筆は、各調査担当者が行った。本文中の表現については、執筆者の意向を尊重し、あえて統一していない。
- 5 本書に使用した写真の撮影は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、遺構・遺物の一部は調査担当者が行った。
- 6 本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準

じた。

- 7 本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系 平面直角座標系VIによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。なお、調査における測量基準点の設置は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。
- 8 本書で使用した地図は、本市都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）「聚楽廻」「中河原」「梅小路」「原谷」「鷹峯」「田中」「安祥寺」「山科」「松尾」「上桂」「山田」「桂」「石見」「寺戸」「粟生」を調整したものである。
- 9 本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、平尾政幸『土師器再考』『洛史』研究紀要第12号（公財）京都市埋蔵文化財研究所2019年 に準拠する（下表参照）。

(西暦)	750	840	930	1020	1110	1170	1260	1350	1410	1500	1590	1680	1740	1800	1860
期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
段階	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
(世紀)	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19			
奈良時代	平安時代					鎌倉時代	室町時代	徳川時代	江戸時代						

- 10 本書の作成及び編集は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課で行った。
- 11 本書掲載の挿図、写真、出土遺物に関するデータは、京都市で保管している。



調査位置略図

- I 平安宮豊楽院跡、鳳翔遺跡
- II 史跡西寺跡、西寺跡（42次）、平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡
- III 御土居跡
- IV 北白川興寺、上終町遺跡
- V 山科本願寺南殿跡
- VI 石見城跡、大原野石見遺跡、長岡京右京一条四坊十五町跡（右京第1283次）
- VII 山田桜谷古墳群

目 次

巻 頭 図 版

例 言

目 次

I 平安宮豊楽院跡、鳳瑞遺跡

1. 調査の経緯と経過	1
2. 遺跡の環境	3
3. 調査成果	5
4. まとめ	10

II 史跡西寺跡、西寺跡（42次）、平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡

1. 調査の経緯と経過	13
2. 遺跡の環境	14
3. 調査成果	18
4. まとめ	25

III 御土居跡

1. 調査の経緯と経過	27
2. 遺跡の環境	28
3. 調査成果	30
4. まとめ	36

IV 北白川廃寺、上終町遺跡

1. 調査の経緯と経過	40
2. 遺跡の環境	41
3. 調査成果	44
4. まとめ	64

V 山科本願寺南殿跡

1. 調査の経緯と経過	68
2. 遺跡の環境	68
3. 調査成果	71
4. まとめ	76

VI 石見城跡、大原野石見遺跡、長岡京右京一条四坊十五町跡（右京第1283次）

1. 調査の経緯と経過	78
2. 遺跡の環境	81

3. 調査成果	84
4. まとめ	96
VII 山田桜谷古墳群	
1. 調査の経緯と経過	100
2. 遺跡の環境	103
3. 調査成果	104
4. まとめ	119
 図 版 報告書抄録 奥 付	

図 版 目 次

巻頭図版 1	御土居跡
	1. 調査区全景（北東から）
巻頭図版 2	御土居跡
	2. 調査区南壁及び見通しオルソ写真（1：80）
巻頭図版 3	御土居跡
	3. 土塁盛土断面（南西から）
巻頭図版 4	石見城跡、大原野石見遺跡、長岡京右京一条四坊十五町跡（右京第1283次）
	1. 1区全景（東から）
	2. 2区石敷遺構（北東から）
巻頭図版 5	山田桜谷古墳群
	1. 山田桜谷1号墳から桂川及び京都市街を望む（南西から）
	2. 前方部葺石と円形埴輪列（南から）
巻頭図版 6	山田桜谷古墳群
	3. 形象埴輪集合
	4. 人物埴輪
 図 版 1	史跡西寺跡、西寺跡（42次）、平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡 遺構
	1. 1区全景 溝1検出・断割り状況（東から）
	2. 1区 溝1瓦集中部検出状況（東から）

- 図 版 2 史跡西寺跡、西寺跡（42次）、平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡 遺構
3. 1区北西壁（南東から）
 4. 2区全景 溝13検出・断割り状況（東から）
- 図 版 3 御土居跡 遺構
1. 土塁盛土及び堀1（西から）
- 図 版 4 御土居跡 遺構
2. 堀1上層完掘状況（西から）
 3. 堀1下層完掘状況（西から）
- 図 版 5 御土居跡 遺構
4. 堤断面（北東から）
 5. 土塁盛土裾部断面（北東から）
 6. 土塁盛土（北西から）
- 図 版 6 北白川廃寺、上終町遺跡 遺構
1. 調査区全景 SD2・SB48掘削状況（南から）
 2. 調査区全景 全遺構掘削状況（南から）
- 図 版 7 北白川廃寺、上終町遺跡 遺構
3. SD2完掘状況（北西から）
 4. SB48（南から）
 5. SD3検出状況（南西から）
 6. SD3瓦出土状況（南西から）
- 図 版 8 北白川廃寺、上終町遺跡 遺物
1. 土器類
- 図 版 9 北白川廃寺、上終町遺跡 遺物
2. 軒瓦類
- 図 版 10 北白川廃寺、上終町遺跡 遺物
3. 丸瓦
- 図 版 11 北白川廃寺、上終町遺跡 遺物
4. 平瓦
- 図 版 12 北白川廃寺、上終町遺跡 遺物
5. 平瓦
- 図 版 13 山科本願寺南殿跡 遺構
1. 第2面全景（北から）
 2. 第1面全景（北から）
 3. 第2面SD35完掘（南から）
 4. 第2面SK24検出状況（東から）

5. 第2面SX37検出状況(東から)

図版14 石見城跡、大原野石見遺跡、長岡京右京一条四坊十五町跡(右京第1283次) 遺構

1. 2区第1面全景(西から)

2. 2区第2面全景(西から)

図版15 石見城跡、大原野石見遺跡、長岡京右京一条四坊十五町跡(右京第1283次) 遺構

3. 3区全景(南西から)

4. 5区西壁断面溝501(東から)

図版16 山田桜谷古墳群 遺構

1. 3区全景(東から)

2. 3区葺石検出状況(東から)

図版17 山田桜谷古墳群 遺構

3. 3区埴輪列西半部全景(南から)

4. 3区円形埴輪列西半部全景(北東から)

5. 3区土坑1掘削状況(北東から)

図版18 山田桜谷古墳群 遺構

6. 3区傾斜変換点A検出状況(東から)

7. 4区全景(南西から)

8. 4区石検出状況(北から)

図版19 山田桜谷古墳群 遺物

1. 灰釉陶器椀

2. 緑釉陶器椀

3. 円筒埴輪口縁部

4. 円筒埴輪底部

5. 円筒埴輪胴部

6. 円筒埴輪胴部

図版20 山田桜谷古墳群 遺物

7. 形象埴輪

挿 図 目 次

I 平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	重機掘削作業 (南東から)	2
図 3	人力掘削作業 (南西から)	2
図 4	埋め戻し作業 (南西から)	2
図 5	埋め戻し完了風景 (北から)	2
図 6	平安京及び豊楽院における調査位置模式図	2
図 7	周辺調査事例 (1 : 1,500)	4
図 8	調査区配置図及び豊楽殿復原図 (1 : 400)	5
図 9	調査区平面断面図 (1 : 60)	7
図 10	落込み 1 出土遺物実測図 (1 : 4)	8
図 11	土坑 2 出土遺物実測図 (1 : 4)	8
図 12	土坑 3 出土遺物実測図 (1 : 4)	9
図 13	『改正京町絵図細見大成』	11
図 14	重ね合わせ図 (1 : 5,000)	11

II 史跡西寺跡、西寺跡 (42 次)、平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	13
図 2	1 区調査前全景 (南東から)	13
図 3	2 区調査前全景 (南西から)	13
図 4	関連調査位置図 (1 : 2,500)	15
図 5	調査区配置及び周辺調査位置図 (1 : 600)	17
図 6	1 区平面断面図 (1 : 50)	19
図 7	2 区平面断面図 (1 : 80)	20
図 8	2 区ビット平面及びエレベーション図 (1 : 80)	21
図 9	弥生土器実測図 (1 : 4)	22
図 10	古墳時代土器実測図 (1 : 4)	22
図 11	平安時代土器実測図 (1 : 4)	23
図 12	出土瓦実測図及び拓影 (1 : 4)	24
図 13	西築地内溝及び西大宮大路東側溝検出位置図 (1 : 800)	25

III 御土居跡

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	27
図 2	盛土露出状況 (北西から)	28

図3	調査予定地（北東から）	28
図4	調査前状況（西から）	28
図5	作業風景（西から）	28
図6	埋め戻し状況（北東から）	28
図7	埋め戻し完了状況（西から）	28
図8	調査区配置図（1：500）	29
図9	『京都惣曲輪御土居絵図』（部分）	29
図10	調査地平面測量図（1：100）	31
図11	南壁断面図及び見通し図（1：100）	32
図12	調査区平面図（1：100）	33
図13	東壁断面図（1：50）	34
図14	北壁断面図（1：50）	35
図15	遺物実測図（1：4）	36
図16	御土居断面模式図（1：300）	37

IV 北白川廃寺、上終町遺跡

図1	調査区配置図（1：400）	40
図2	調査前全景（南から）	40
図3	作業風景（南から）	40
図4	調査地と周辺調査位置図（1：2,500）	42
図5	断割部柱状図（1：50）	44
図6	調査区断面図（1：80）	44
図7	遺構検出平面図（1：100）	45
図8	遺構完掘平面図（1：100）	46
図9	SB48 平面断面図（1：80）	47
図10	SA46・SA47・SK37・SK38 平面断面図（1：50）	48
図11	SD1・SD2・SD3・SD44 アゼ断面図（1：60）	49
図12	SD3 瓦出土状況平面図（1：30）	50
図13	出土土器実測図（1：2、1：4）	53
図14	出土軒丸瓦実測図及び拓影（1：4）	54
図15	出土軒平瓦実測図及び拓影（1：4）	55
図16	出土丸瓦実測図及び拓影1（1：6）	56
図17	出土丸瓦実測図及び拓影2（1：6）	57
図18	出土平瓦実測図及び拓影1（1：6）	58
図19	出土平瓦実測図及び拓影2（1：6）	59
図20	出土平瓦実測図及び拓影3（1：6）	60

図21 出土平瓦実測図及び拓影4 (1:6)	61
図22 出土平瓦実測図及び拓影5 (1:6)	62
図23 出土平瓦実測図及び拓影6 (1:6)	63

V 山科本願寺南殿跡

図1 調査位置図 (1:10,000)	68
図2 調査前風景 (南西から)	69
図3 作業風景 (南から)	69
図4 調査区配置図 (1:400)	69
図5 『御在世山水御亭図』	70
図6 周辺調査位置図 (1:2,500)	70
図7 調査区断面図 (1:50)	72
図8 調査区平面図 (1:100)	74
図9 第2面SK24・SX37・SX38・SP25 平面断面図 (1:40)	75
図10 平成18年度調査との位置関係 (1:500)	76
図11 山科本願寺南殿跡復元図 (1:2,500)	77

VI 石見城跡、大原野石見遺跡、長岡京右京一条四坊十五町跡 (右京第1283次)

図1 調査位置図 (1:5,000)	78
図2 調査区配置図 (1:400)	80
図3 遺構面検出作業状況 (西から)	80
図4 発掘体験実施状況 (南西から)	80
図5 既往の調査位置図 (1:5,000)	82
図6 基本層序模式図	84
図7 1区東壁断面図 (1:50)	85
図8 2区東壁断面図 (1:50)	86
図9 3区東壁断面図 (1:50)	87
図10 4区・5区西壁断面図 (1:50)	88
図11 1区平面図・南壁断面図 (1:100)	90
図12 2区第1面平面図 (1:100)・遺構断面図 (1:50)	92
図13 2区第2面平面図・南壁断面図 (1:100)	93
図14 出土遺物実測図1 (1:2・1:4)	94
図15 出土遺物実測図2 (1:4)	95
図16 石見城跡遺跡復元図 (1:1,250)	96

VII 山田桜谷古墳群

図1 調査位置図 (1:10,000)	100
図2 作業状況 (南西から)	101

図3	葺石・埴輪列養生風景（南東から）	101
図4	3区埋め戻し完了状況（南東から）	101
図5	4区埋め戻し完了状況（西から）	101
図6	調査区配置図（1：400）	102
図7	3区平面図（1：100）	106
図8	3区北壁断面図（1：80）	107
図9	石組遺構・土坑平面図（1：50）	108
図10	葺石平面図（上）・立面図（下）（1：50）	109
図11	円筒埴輪列平面図（1：50）	110
図12	4区平面図（1：80）	112
図13	4区南壁断面図（1：60）	113
図14	出土遺物実測図（土器・石製品・金属類）（1：4）	115
図15	出土埴輪実測図（円筒埴輪口縁部・胴部）（1：4）	116
図16	出土埴輪実測図（円筒埴輪底部）（1：4）	117
図17	出土埴輪実測図（器材埴輪・形象埴輪）（1：4）	118
図18	山田桜谷1号埴現状復原図（1：400）	120

表 目 次

I 平安宮豊楽院跡、鳳瑞遺跡

表1	周辺調査事例一覧	4
表2	遺構概要表	5
表3	遺物概要表	8

II 史跡西寺跡、西寺跡（42次）、平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡

表1	関連調査一覧	16
表2	遺構概要表	18
表3	遺物概要表	22

III 御土居跡

表1	遺構概要表	33
表2	遺物概要表	36

IV 北白川廃寺、上終町遺跡

表1	近隣調査事例一覧	43
表2	遺構概要表	45
表3	遺物概要表	51

表 4	出土瓦破片数一覧	65
V	山科本願寺南殿跡	
表 1	周辺調査一覧	71
表 2	遺構概要表	73
表 3	遺物概要表	76
VI	石見城跡、大原野石見遺跡、長岡京右京一条四坊十五町跡（右京第 1283 次）	
表 1	周辺調査一覧	83
表 2	遺構概要表	89
表 3	遺物概要表	95
表 4	出土遺物一覧（土器・陶磁器）	98・99
表 5	出土遺物一覧（石製品・金属製品）	99
VII	山田桜谷古墳群	
表 1	関連調査一覧	104
表 2	遺構概要表	104
表 3	遺物概要表	114

I 平安宮豊楽院跡、鳳瑞遺跡

1. 調査の経緯と経過（図1～5）

本件は個人住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は旧丸太町通と七本松通の交差点から東へ50mほどの場所に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地「平安宮跡」及び「鳳瑞遺跡」に該当する。

本調査地は平安宮の中では豊楽院に含まれる。豊楽院は天皇の宴遊や外国からの使節をもてなす国家的な饗宴、そして元日や大嘗祭の節会などが行われた場所であり、平安時代の天皇の権威を象徴する施設である。東側隣接地では、1988(昭和63)年に発掘調査が実施され、地表面から40cmほどの深さで豊楽殿の基壇や壺掘地業などを良好な形で確認している。その重要性から、1990(平成2)年には国の史跡となり現在も地中に遺跡が保存されている。また、その後も旧丸太町通を挟んだ北側で複数回の発掘調査により清暑堂に関わる遺構が確認され、これについても同様に史跡に追加指定されている。

本調査地は、昭和63年の調査地の西側隣接地にあたり、敷地の南半部には豊楽殿から西へのびる回廊が想定されていた。ここで個人住宅の建設が計画され、令和6年1月22日に文化財保護法第93条第1項に基づく届出がなされた。これに対して京都市文化財保護課は、当該地が豊楽院を復元するうえで重要な場所であることから、同法第93条第2項に基づき発掘調査を指導した。その後、協議を重ね、土地所有者の協力のもと発掘調査を実施した。

調査期間は令和6年7月22日～8月30日である。計画建物の南側に、回廊基壇の確認を目的として調査区を1箇所設けた。調査面積は約29㎡である。なお、調査地の規模や掘削深度などなどの理由により、安全管理が困難であったことから、現地説明会は実施していない。

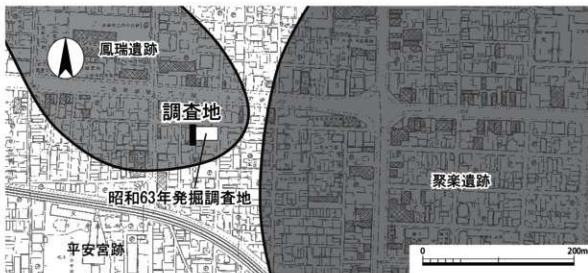


図1 調査位置図（1：5,000）



図2 重機掘削作業（南東から）



図3 人力掘削作業（南西から）



図4 埋め戻し作業（南西から）



図5 埋め戻し完了風景（北から）

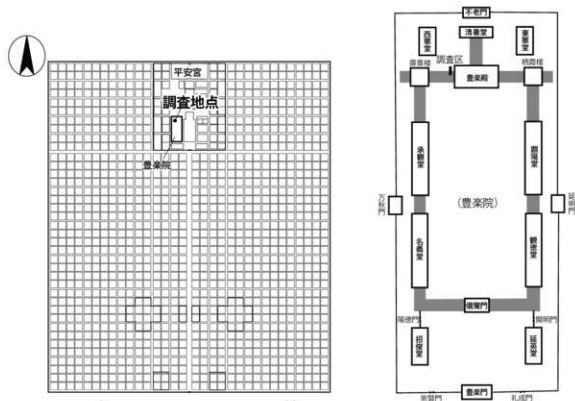


図6 平安京及び豊楽院における調査位置模式図

2. 遺跡の環境 (図6・7)

京都盆地は、河川によって形成された扇状地である。このうち、平安宮域は盆地北西部の丘陵からのびる低位段丘上に立地しており、調査地の標高は42.8m前後である。この安定した立地もあり周辺では弥生時代以降、人の活動痕跡が確認できる。

本調査地は、古墳時代～奈良時代の集落として周知されている鳳瑞遺跡にも該当する。周辺の調査⑪（調査番号は図7に対応、以下同）では豊楽殿の基壇下で弥生時代末期と思われる竪穴建物、調査⑫では古墳時代後期の土坑をそれぞれ確認している。こうした古墳時代以前の遺構の分布を見る限り、千本丸太町の交差点を中心とした範囲に当該期の集落の存在が想定できる（聚楽遺跡）。

また、前述のように本調査地は平安宮の中で豊楽院に該当する。豊楽院は東西約170m、南北約400mの範囲を築地塙で囲み、その中に主殿である豊楽殿を中心に複数の建物が配置されていたとされ、本調査地は豊楽殿から西側にのびる回廊の推定地にあたる（図6・7）。東側の調査⑪・⑬やその北側の調査⑫などでは、豊楽殿や清暑堂の基壇や礎石根固めを確認している。これらの調査成果から、豊楽殿の規模や基壇構築方法などが判明している。特に規模の点において、豊楽殿と平城宮第二次大極殿の規模が近似する点は注目される¹⁾。また、清暑堂と北廊が、豊楽殿の完成以降の同時期に造営されたことなども明らかになった。平安宮内での施設の変遷を考古学的に確認した点は造営の実態を考えるうえで非常に大きな成果といえる。

文献によると、豊楽院はその機能が次第に内裏に移行するに伴って荒廃し、1063（康平6）年に焼亡して以降、再建の記録はない²⁾。その後は平安宮自体の形骸化が進み、鎌倉時代後半には大半の官衙施設が廃絶したものと考えられる³⁾。内裏についても室町時代は里内裏であった土御門東洞院殿に固定される。

1587（天正15）年には平安宮域の北東部に聚楽第が造営されるが、豊臣秀次の失脚により破却され、周辺の村の耕作地となったようである⁴⁾。

江戸時代には、二条城や京都所司代が造営され、本調査地付近には所司代に伴う与力屋敷（組屋敷）が作られた。調査⑭では、柵を伴う江戸時代の南北溝を確認しており、これは京都所司代の与力屋敷（組屋敷）に関わる区画施設と考えられる。

明治時代以降、この付近は宅地や耕作地となっていたことが都市計画図からわかる。ただし、本調査地の東側隣地境界付近にはかつて水路が存在していた。この水路の成立時期については不明だが、1892年（明治25）の都市計画図（複製図）では水路を境に東側では宅地、西側には水田が広がっており、土地利用の在り方が大きく変わる。また、付近の調査事例をみると、水路より東側では浅い深度で平安宮に関わる遺構が確認されているのに対して、西側では比較的広い範囲で厚い近現代の盛土等を確認するのみで、平安宮に関わる遺構は確認できていない（調査⑧～⑩・⑮・⑯・⑳）。これらの成果や土地利用の違いから、明治時代には水路の西側については一段低くなっていたと推定される。大正時代以降は、水路より西側も宅地として開発され現在に至る。



図7 周辺調査事例(1:1,500)

表1 周辺調査事例一覧

番号	調査年	調査成果
①	昭和3	多量の瓦とともに基壇外装に用いられた凝灰岩を検出。後に不老門南東隅及び清善堂北縁と判明。
②	昭和44	暗渠の可能性のある凝灰岩片を多量に含む溝状遺構を検出。北側に基壇を有する建物の存在を推定。
③	昭和48	厚い焼土層と多量の瓦片等が出土。地山直上で凝灰岩片を多量に含む整地層を面的に確認。
④	昭和51	版築と礎石礎土付け穴を検出。後に豊楽殿の基壇と礎石下根固めの遺構地帯と判明。
⑤	昭和52	11箇所の瓦溜めを検出。平安時代前期から後期の瓦が多量に出土。
⑥	昭和54	凝灰岩片を含む平安時代の整地層を検出。
⑦	昭和55	調査区北東隅において版築の盛土を約50cm分確認。
⑧	昭和59	CL-1.5mまで近現代盛土のみ。
⑨	昭和62	CL-1.6mまで近現代盛土のみ。
⑩	昭和63	CL-1.8mまで近現代盛土のみ。
⑪	昭和63	豊楽殿基壇北西縁と北面西階段・中央階段、礎石根固めの遺構地帯を確認。また、豊楽殿と清善堂を繋ぐ北廊が検出され、北廊が豊楽殿の創建以降に付けられたことが判明。加えて豊楽殿の中軸線も明らかになった。
⑫	昭和63	清善堂の基壇盛土及び礎石根固め痕を検出。
⑬	平成10	東華堂跡東辺部で瓦葺盛土坑を3基検出。
⑭	平成15	CL-1.7mまで近現代盛土。その直下に江戸時代後半の遺物を含む湿状堆積。-2mで地山を確認。
⑮	平成16	CL-0.85mまで盛土。※ボーリング成果によるとCL-2.7mまで盛土で、以下地山となる。
⑯	平成18	清善堂基壇南縁と南面西階段及び豊楽殿北廊の基壇盛土を確認。階段の幅から身舎桁行7間の柱間14尺であること、清善堂南面中央には階段は無く、北廊と清善堂が同時期に造営されていること、北廊は創建以降、2度わたる拡張が行われていることが明らかになった。
⑰	平成27	豊楽殿の基壇盛土と礎石根固めを検出。さらに、根固め下層の遺構地帯を4基検出。基壇の構築過程が明らかとなった。また、豊楽殿の建物規模がほぼ確定し、平城宮第二次大極殿SB9150とほぼ同じ規模を持つことが判明。
⑱	平成29	清善堂の延石抜き取り痕を確認。清善堂の西縁が確定され、基壇の東西幅が復元された。
㉑	令和元	豊楽殿に関わる可能性のある整地層と、廃絶後の整地層を確認。
㉒	令和6	CL-1.5mで割附土と思われるシルト層、-1.95～-2.11mで暗灰黄色砂礫の地山を確認。

【上記報告書】①佐藤雄次「平安宮豊楽殿の遺物」『古代学』第6巻第4号(財)古代学協会1958。室崎孝治「平安宮の復元について」第11回京都市考古資料館文化財調査報告1987。②近藤昌一ほか「平安宮豊楽殿基壇地帯(豊楽殿中廊)の調査」『平安宮豊楽殿研究紀要』第3輯1971。③寺島孝一「平安宮豊楽殿調査報告」『古代文化』第26巻第4号1974。④「平安宮豊楽殿跡緊急発掘調査報告」『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告1976-1京都市文化観光局文化財保護課1977。⑤船山茂「平安宮豊楽殿跡出土の軒瓦」『古代文化』第29巻第11号1977。⑥「付録1-10豊楽殿跡」『平安宮1』(財)京都市埋蔵文化財研究所1995。⑦「平安宮豊楽殿跡」『平安宮跡発掘調査報告』昭和55年度「平安宮豊楽殿跡調査センター」1981。⑧「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告』昭和59年度「京都市文化観光局」1984。⑨「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告』昭和62年度「京都市文化観光局」1988。⑩「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告』昭和63年度「京都市文化観光局」1989。⑪「平安宮豊楽殿(1)」『平安宮跡発掘調査報告』昭和63年度「京都市文化観光局」1989。⑫「平安宮豊楽殿(2)」『平安宮跡発掘調査報告』昭和63年度「京都市文化観光局」1989。⑬「平安宮豊楽殿東華堂跡」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成10年度「京都市文化市民局」1999。⑭「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成16年度「京都市文化市民局」2005。⑮「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成16年度「京都市文化市民局」2005。⑯「平安宮豊楽殿跡・基壇遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成19年度「京都市文化市民局」2008年。⑰「平安宮豊楽殿跡・基壇遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告』平成27年度「京都市文化市民局」2015。⑱「平安宮豊楽殿跡・基壇遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-2』(公財)京都市埋蔵文化財研究所2017。㉑「平安宮豊楽殿跡・基壇遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告』令和元年度「京都市文化市民局」2020。㉒「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告』令和6年度「京都市文化市民局」2025。

3. 調査成果

(1) 調査区の位置と基本層序 (図8)

これまで周辺では多くの調査が実施されている。その成果に基づき、建物の計画範囲内のうち豊楽殿から西に向かってのびる回廊基壇の推定位置に調査区を1箇所設けた。なお、調査区の掘削深度が想定よりも深くなったことから、調査区内に犬走を設け段掘りを行い中央部のみ掘り下げた。

層序は、既存建物の解体に伴う攪乱がGL-0.8mまで及んでおり、その下には1.1m以上の厚さで近代盛土層が存在する。GL-2.1mで近代の旧耕作土層と考えられる褐灰色シルト層が約20cmの厚さで確認できる。層中にはガラス片や銅製の針金などが確認でき、上面は土壌化のためやや褐色をおびる。この褐灰色シルト層の直下、GL-2.3mで江戸時代の遺構面となる。本調査で検出した遺構は全てこの面から掘り込まれている。そして、江戸時代の土層を除去するとGL-2.5m(標高40.3m)で地山の明黄褐色シルトおよび同色の砂礫層となる。

調査ではGL-2.3m前後まで重機で掘削し、以下は人力で掘削を行った。調査の結果、江戸時代以降の遺構を4基確認した。

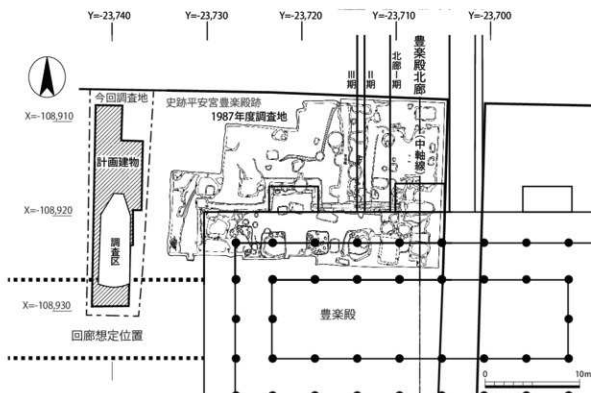


図8 調査区配置図及び豊楽殿復原図 (1:400)

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	土坑3・4	
江戸時代～近代	落込み1・土坑2	

(2) 遺構 (図9・表2)

落込み1 調査地北端で確認した、北側に向かって下がる落込みである。東西0.75m以上、南北1.25m以上、深さ0.65m以上である。層序からみると本調査で最も新しい遺構である。落込み1は南側肩口を確認したのみで、かつ砂礫層からの出水が著しく完掘することは出来なかった。

埋土は大きく3層に分けられる。上層はふい黄褐色粘質土、中層は明褐色砂礫、下層は褐色粘土である。下層は比較的均質な湿地状の堆積で、上層はそれを埋めて整地するための人為的な盛土層と考えられる。下層から江戸時代後半の陶磁器などが出土した。

土坑2 土坑4を掘り込んで成立しており、北半部は落込み1に切られる。東西0.65m以上、南北0.4m以上、深さ0.17mである。埋土は褐色粘土で、その土質は落込み1下層に近似する。遺物は少ないが、江戸時代後半の遺物が出土した。

土坑3 調査区の南半で確認した。東西0.6m以上、南北2.7m以上、深さ0.35mの土坑と考えられる。埋土は上下2層に分けられ、上層は褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土である。この土は隣接地などで確認されている豊楽殿などの基壇盛土に近似し、地山由来の小さなシルトブロックを含む。平安時代の遺物や凝灰岩片に混じり江戸時代後半の陶磁器が出土した。

土坑の底面には凸凹が認められ、かつ地山がシルトから砂礫に変化する深度で掘削が止まっていることなどを踏まえると、いわゆる聚楽土の採取を目的とした土取穴と考えられる。

土坑4 調査区の中央で検出した。北側を落込み1と土坑2、南側を土坑3によって切られる。層序では本調査で最も古い。東西0.7m以上、東西1.3m以上、深さ0.4mである。

遺物は出土しなかった。ただし、埋土の様相は土坑3に近く、かつ同様に底面には凸凹が認められ、地山がシルトから砂礫に変化する深度で掘削が止まっていることから、土坑4についても土取穴の可能性が想定できる。

(3) 遺物 (図10～12・表3)

落込み1 1～8は落込み1の下層(図9-6層)から出土した。1～4は施釉陶器で、1～3は京・信楽系の陶器と思われる。1は皿の口縁部で、内面から口縁端部付近まで施釉する。内面などに煤が付着している事から灯明皿と考えられる。2は鍋の底部である。外面には煤や被熱痕が確認できる。3は椀で、内外面とも透明釉で施釉され、口縁端部のみ縁錆が施される。4は肥前陶器の鉢底部である。内面にのみ施釉され、刷毛目が確認できる。底部は太めの貼り付け高台である。

5・6は染付で、5は皿、6は椀である。6は見込みに「寿」を模した記号を配し、その外側に1重の圈線を巡らす。外面は高台の側面に2本の圈線を巡らす。

7・8は瓦で、7は平瓦、8は丸瓦である。ともに凹面には布目、凸面にはタタキの縄目が確認できる。8は凸面のうち丸瓦部のみ縁錆が施される。

土坑2 9は焼締陶器の掬鉢である。口縁部には帯状の粘土を貼り付け、その外面に凹線を二本

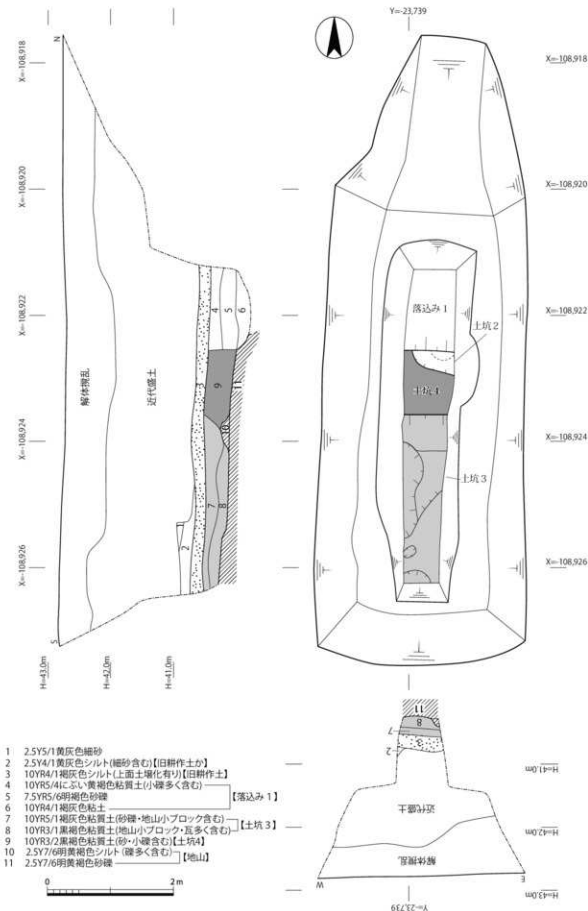


図9 調査区平・断面図(1:60)

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 総数(箱)	Aランク 箱数(点数)	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代	土師器・瓦・凝灰岩片など	3箱			
江戸時代	瓦・陶磁器		陶磁器8点・瓦類8点		
	合計	3箱	1箱(16点)	1箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、A・Bランク遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

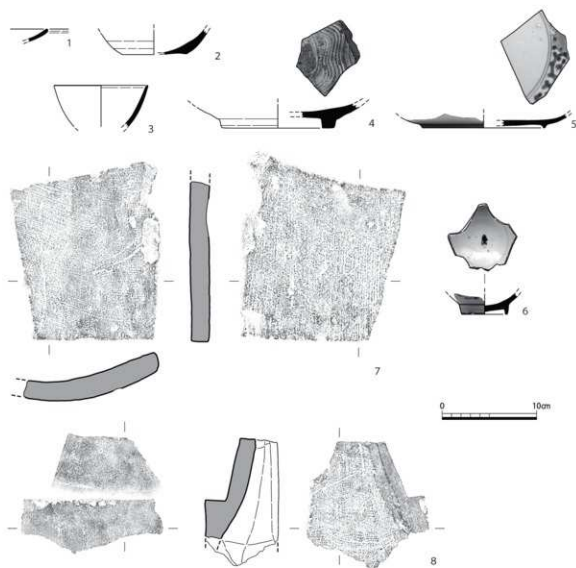


図10 落込み1出土遺物実測図(1:4)

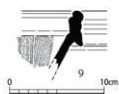


図11 土坑2出土遺物実測図(1:4)

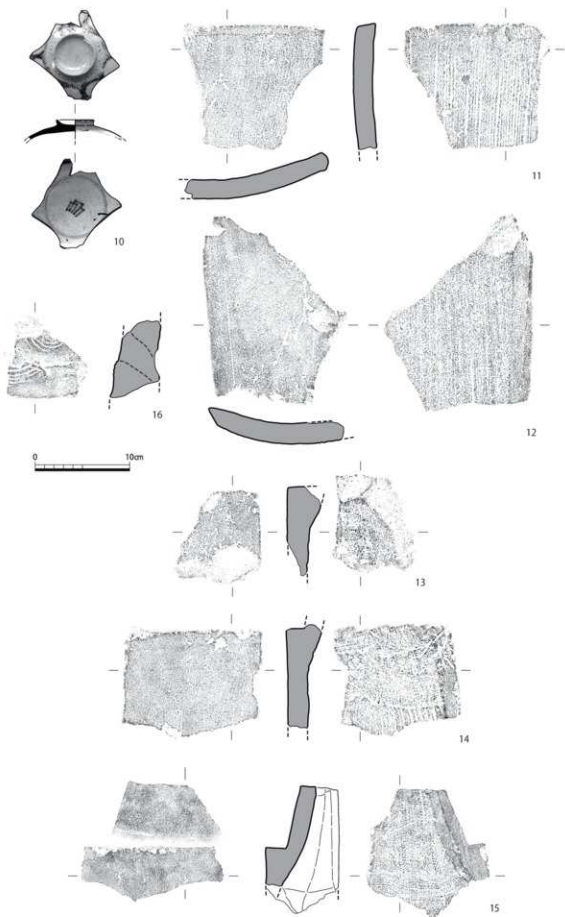


图12 土坑3出土遗物实测图(1:4)

巡らせており、下端は垂下する。口縁の端部は肥厚しており、内面の端部からやや下がった位置に凹線を一本巡らす。摺り目は3本/cmである。

土坑3 10は染付の蓋である。頂部中央に高台状のつまみが付き、その外側に連環状の文様を描く。内面には中央に記号を配し、その外側に二重の圈線を描く。

11～16は瓦である。11・12は平瓦で、凹面は布目、凸面はタタキの縄目が確認できる。13～15は丸瓦で、凹面は布目、凸面はタタキの縄目が確認できる。13のみ凸面に縁軸が確認できる。16は鴟尾、片面にのみタタキの同心円文が確認できる。小片のため部位の特定は難しいが、胴部の可能性がある。洛北産と思われる。

4. まとめ (図13・14)

本調査では、江戸時代以降の遺構を検出したのみで、豊楽院に関わる遺構は確認できなかった。東側隣接地の調査(調査①)で確認した遺構の標高は、豊楽殿の基壇盛土上面が43.2m、延石の据付掘方の底面の標高が41.8mであり、おおむねこの間の標高で平安時代の遺構が確認されている。

これに対して、本調査地における地表面の標高は42.8m前後、地山の検出高は標高40.25mである。加えて、豊楽殿の建物本体よりも回廊の方が構造的に簡易で重量も軽いと想定され、それに伴う工事の掘削深度も浅くなると考えられる。これらを踏まえると、本調査地では平安時代の遺構は既に削平された可能性が高い。また、江戸時代の土取穴と考えられる土坑3から平安時代の瓦や凝灰岩が出土しており、かつ土坑3・4の埋土が豊楽殿の基壇盛土等に近似していることはその傍証となろう。さらに、その埋土からの出土遺物は平安時代と江戸時代の2時期に限られる点から、平安時代の遺構の削平時期は江戸時代以降と推定できる。

周辺の調査事例を見ると、本調査地以西から七本松通の間では、厚い近代の盛土が確認されており、平安時代の遺構は確認されていない。本調査では、解体掘乱直下で近代盛土を確認し、かつ標高40.74mで近代の耕作土層を確認したことで、近代には本調査地と東隣接地の間に少なくとも約2.5mほどの段差があった事が明確となった。耕作地という土地の利用方法、そして付近で確認される厚い近代盛土の存在からは、本調査地のみが窪地の様になっていたとは考え難く、本調査地を含めた一定の範囲が低くなっていた蓋然性が高い。

本調査地以西一帯が低い理由については、京都所司代の与力屋敷の存在が関係すると思われる。1831年(天保2)に刊行された『改正京町絵図細見大成』(図13)⁹⁾は、刊行された京都図の中では最大で、かつ情報量とその正確さは特筆される。この図には丸太町通の南側、千本通と七本松通の間には「L」字形で与力屋敷の敷地が描かれている。

この「L」字形の区画は明治25年(1892)の都市計画図(仮製図)でも確認でき、その西限は本調査地の東側境界付近にあたり、それ以东は宅地、以西は耕作地となっている。

明治時代の都市計画図に表示された町境・土地区画を抽出して現在の都市計画図に重ね合わせ、『改正京町絵図細見大成』の与力屋敷(組屋敷)の範囲を復元したのが図14である。これによると、

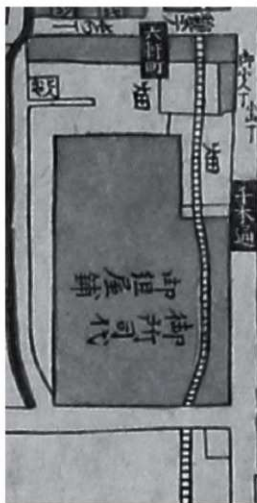


図13 『改正京町絵図細見大成』

※天保2年版、京都市歴史資料館蔵

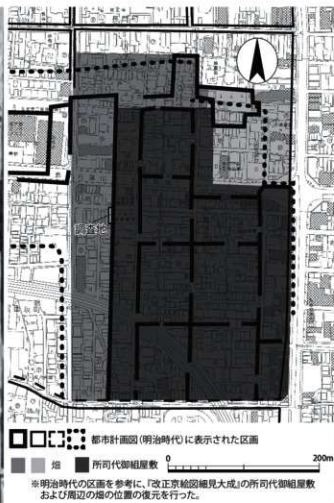


図14 重ね合わせ図 (1:5,000)

本調査地の東隣地境界を境に、東側が与力屋敷（組屋敷）、西側が畑であったことが分かる。本調査で確認した江戸時代の土取穴と考えられる土坑3・4は大型土坑であり、屋敷地よりも畑などの空間地で掘られたと考えたほうが妥当と思われる。

こうした土地利用の差異に起因して、東側隣接地との高低差が生じた可能性が高い。通常、京都所司代の諸施設は堀や溝で四周が遮蔽されていることが多い。堀川屋敷を参考にする、溝の規模は図中で明確に表記されていないが、建物などとの対比から幅1～2m程度と推定される⁹⁾。与力屋敷（組屋敷）が四周を溝で囲んでいたか否かは史料がなく不明だが、存在したとしても堀川屋敷と同様の規模と考えられる。

しかし、幅1～2mの溝が高さ2.5m以上の段差を形成した直接的な原因とは考えにくい。特に、本調査地から七本松通まで厚い近代盛土層が確認されていることを踏まえると、この一段低くなった範囲が東西40～50mにわたって広がっていた可能性が高い。こうした広範囲に及ぶ段差が生じた理由としては、本調査地でも確認した土取穴が最も有力と考えられる。

平安宮付近は、聚楽土といわれる良質な土が採取されることが古くから知られており、既往の調

査でも数多くの土取りの痕跡が確認されている。近年では、上京区革堂前之町で実施された調査で大規模な土取りが確認されている⁷⁾。

本成果のみで断定はできないが、本調査地から七本松通までは『改正京町絵図細見大成』で畑として表現されていることを踏まえると、この畑として利用されていた空閑地で江戸時代に大規模な土取りが実施され、その結果として本調査地で確認した段差が生じたものと考えておきたい。この段差は、大正時代に本調査地以西が宅地となる際に嵩上げされて解消される。本調査地の東境界付近を通る南北方向の水路は、与力屋敷の西端を限る溝を踏襲して成立したものと想定される。

本調査では平安時代の遺構を確認することは出来なかったものの、後世の土地利用に関する知見を得ることができた。こうした調査成果も積み上げ、さらに平安宮跡の遺存状況を詳細に把握し、今後の調査・保護・活用に繋げていきたい。

(熊井 亮介)

註

- 1) 西森正晃「IV 平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局、2016年。
- 2) 『百鍊抄』康平六年三月二十二日。
- 3) 上村和直「平安宮の衰微」『研究紀要 第10号』財京都市埋蔵文化財研究所、2007年。
- 4) 京都市『史料京都の歴史 第9巻(中京区)』1985年。
- 5) 京都市歴史資料館蔵。
- 6) 京都府立京都学・歴史館蔵。堀川屋敷については時期不明のものも含めて4枚の絵図が残されている。
- 7) 京都市が上京区革堂前之町で実施した調査では、東西約10.6 m以上、南北約20 m以上、深さ約3.5 mの連続した土坑状の土取り痕跡を確認している。報告書は近日刊行予定。

Ⅱ 史跡西寺跡、西寺跡（42次）、 平安京右京九条一坊十三町跡、唐橋遺跡

1. 調査の経緯と経過

本件は、史跡西寺跡における範囲確認調査である。調査地は南区唐橋西寺町10-1ほかにある。本市では、平成29～令和元年度に当時未指定であった西寺塔跡周辺の範囲確認調査を実施し、令和2年度に総括報告書を刊行した¹⁾（以下、「総括報告」という）。その成果を受けて、令和3年3月26日に史跡の追加指定がなされ、令和4年度には一部を公有化した。本調査は、公有地の仮整備を進めていくにあたり、整備に必要な情報を得ることを目的とした。調査区は、既往の調査で未確認だった西寺西薬地内溝の東肩を確認するために2箇所に設け、北側を1区、南側を2区とした。調査面積は50㎡である。

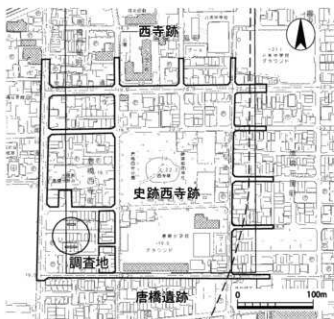


図1 調査位置図（1：5,000）

文化財保護法第125条に基づく史跡名勝天然記念物の現状変更許可申請書を令和5年10月19日付けで提出し、11月24日付け5文庁第3545号で文化庁長官の許可を得た。調査は12月5日に開始し、重機掘削後、人力で掘削等を行った。その結果、西寺西薬地内溝を検出した。調査後は土嚢などで遺構を養生した上で、重機で埋め戻しを行い、12月22日に終了した。



図2 1区調査前全景（南東から）



図3 2区調査前全景（南西から）

2. 遺跡の環境

(1) 歴史的環境

西寺は、延暦十三年（794）の平安京遷都に伴い、東寺とともに国家鎮護のために造営された官寺である。両寺は朱雀大路を挟んで、左右対称になるように伽藍を配置している。伽藍は、南から南大門・中門・金堂・講堂・僧房・食堂院が一直線に並ぶ。西寺では南西側、東寺では南東側に塔が位置する。僧房は講堂の北・東・西側に配する三面僧房である。

西寺の造営については「造西寺司」が担い、延暦十六年（797）四月に笠江人が造西寺次官、同年七月に藤原緒嗣が造西寺長官とあり²⁾、遷都直後から造営に着手したことがわかる。

西寺の堂舎については、天長三年（826）頃までに宝蔵や金堂、北院が既に建立されていたようである³⁾。また、承和三年（836）に造西寺勾当僧9人の僧位一階を上げたことは、伽藍造営に一定の目処がついたことへの対応と考えられる⁴⁾。一方、塔については造営がやや遅れたようである。嘉祥三年（850）に西寺刹柱に落雷があったとの記載があり、刹柱が塔の心柱を示すものと捉えられることから、塔の造営に着手していたことが窺えるものの⁵⁾、元慶六年（882）に塔の造営料が定められており⁶⁾、実際の完成は遅れたとも考えられる。

正暦元年（990）に「西寺焼亡」と記された火災⁷⁾は、西寺衰退への大きな契機となったと考えられるが、塔はこの焼亡を免れたようで、建久八年（1197）に文覚上人が修理したことが知られている⁸⁾。しかし、残された塔も天福元年（1233）に焼亡し、「もとより荒廃の寺なり、何をか為さんか」と記され、その状況が推察される⁹⁾。

(2) 周辺の調査（図4・5、表1）

西寺跡全体にかかる既往の調査事例は、「総括報告」にまとめられているため、ここでは塔跡周辺、西寺の寺域西限・東限に関連する主な調査について述べる。

37次調査では塔に伴う壺地業が確認された。9世紀中頃～後半以降に施工されたと考えられ、塔の造営料を定めた記事と符合する。また、34・37次調査では、塔跡の南西で鋳造関連遺構が確認された。9世紀後半以降に生産を開始したと考えられ、塔に関連した製品を生産していた可能性が考えられる。

34次調査では、西大宮大路の東側溝が検出された。東側溝は検出面で幅約2.5～2.9mと、延喜式の規程（4尺≒1.2m）の倍以上の規模を有しており、26次調査・試掘調査1でも同様であることから、少なくとも中仕切築地塀より南の区画では、規程より大きいことが判明した。

21次調査では、西築地基壇と内溝、34・37次調査では西寺西築地の内溝が確認されたが、西肩のみの検出に留まる。34・37次では、検出面で最大幅6.8m以上、深さ約0.4m、溝底には凹凸が認められた。出土遺物から遅くとも9世紀後半頃には埋められたと推測され、内溝埋土を掘り込んで鋳造関連遺構が成立することが確認された。

29次調査では、東築地の築地基底部と内溝が確認された。検出面での溝幅は約1.5m、深さは

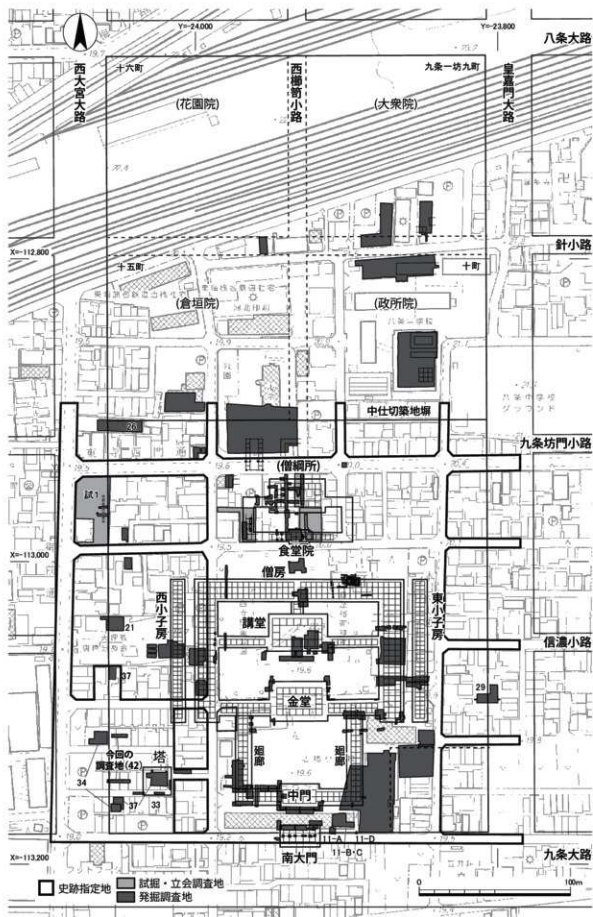


図4 関連調査位置図 (1:2,500)

0.35mである。内溝の西側では2基の落込みを検出し、内溝と落込みは10世紀末～11世紀代の遺物包含層によって一部削平されていた。落込みを内溝の一部と考え、西築地と同様に、幅の広い内溝が開削されていた可能性が指摘されている。

以上から、西寺を囲う築地の内溝については幅が広いことが推測される。

表1 関連調査一覧

調査回数	調査年	推定地	調査地	主要成果	文献
11-A・D	1977	南築地	唐橋西寺町	南築地内溝	1
11-B・C				柱穴群	
21	1981	西築地	唐橋西寺町	西築地基壇、西築地内溝	2
26	1990	中仕切築地塀 西築地	唐橋門脇町	中仕切築地塀溝、整地層 西築地内溝	未報告
試掘1	1997	西築地	唐橋西寺町	西大宮大路東側溝、西築地犬行	3
29	2013	東築地	唐橋花園町	東築地基底部、東築地内溝、落込み	4
33	2017	塔	唐橋西寺町	瓦溜り、落込み	5
34	2018	西築地	唐橋西寺町	西大宮大路、西築地内溝、鋳造関連遺構	6
37	2019	塔・西築地	唐橋西寺町	塔基地盤、西築地内溝、鋳造関連遺構	7
42	2023	西築地	唐橋西寺町	西築地内溝	本報告

文献

- 1 「平安京右京九条一坊、西寺跡2」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2011年
- 2 平尾政幸「西寺跡発掘調査 第20次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター、1981年・「平安京右京九条一坊、西寺跡4」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2011年
- 3 「史跡西寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成9年度』京都市文化市民局、1998年
- 4 東洋一「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局、2014年
- 5 鈴木久史「平安京右京九条一坊九町跡・西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成29年度』京都市文化市民局、2018年
- 6 鈴木久史「平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成30年度』京都市文化市民局、2019年
- 7 鈴木久史「西寺跡（37次）・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局、2020年

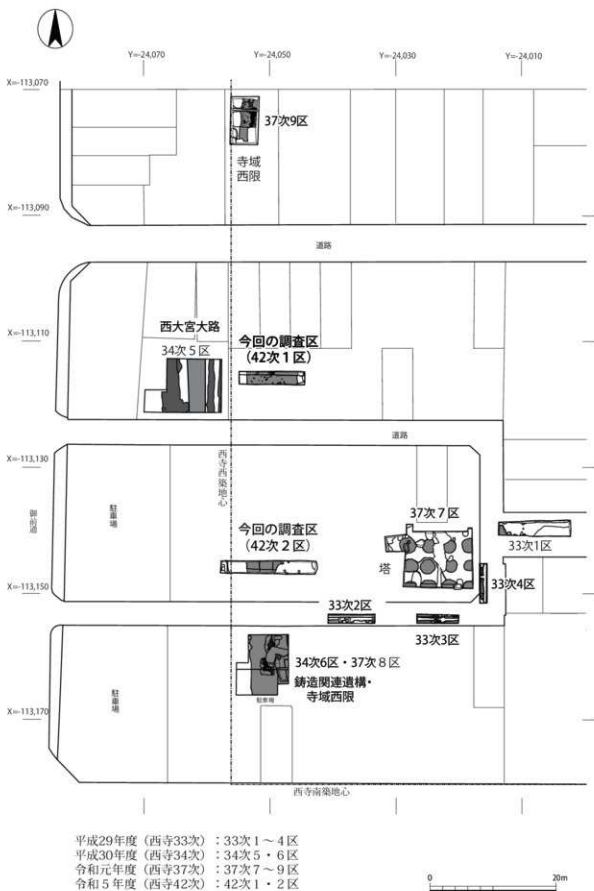


図5 調査区配置及び周辺調査位置図（1：600）

3. 調査成果

(1) 基本層序 (図6・7)

調査地の現況地表面は、1・2区ともに標高約18.7mで高低差はほとんどない。

1区の基本層序は、北壁において、表土以下、GL-0.1mで旧耕土、-0.55mで黄褐色泥砂、-0.6mで暗褐色泥砂、-0.65mで暗オリーブ褐色微砂混じりシルト、-1.1mで灰黄褐色砂礫の流れ堆積である。調査区西端では、GL-0.45mで暗褐色シルト、-0.95mで灰黄褐色砂礫の流れ堆積である。暗褐色シルト層(23層)は固く締まり、古墳時代の遺物が含まれる。暗オリーブ褐色微砂混じりシルト(21層)・暗褐色シルト層(23層)上面を遺構面として調査を行った。遺構面は、標高約18.1mである。

2区の基本層序は、北壁において、表土以下、旧耕土、GL-0.3mで暗灰黄色泥砂、-0.5mで暗オリーブ褐色砂礫の流れ堆積である。調査区西側では、GL-0.2mで暗灰黄色泥砂、-0.3mで黄褐色シルトである。黄褐色シルト(33層)・暗オリーブ褐色砂礫層(34層)上面を遺構面として調査を行った。遺構面は、標高約18.3～18.4mである。

(2) 遺構

1・2区ともに、西寺に関連する遺構を確認した。各遺構は地中保存のため、基本的に掘削は最小限に留めている。

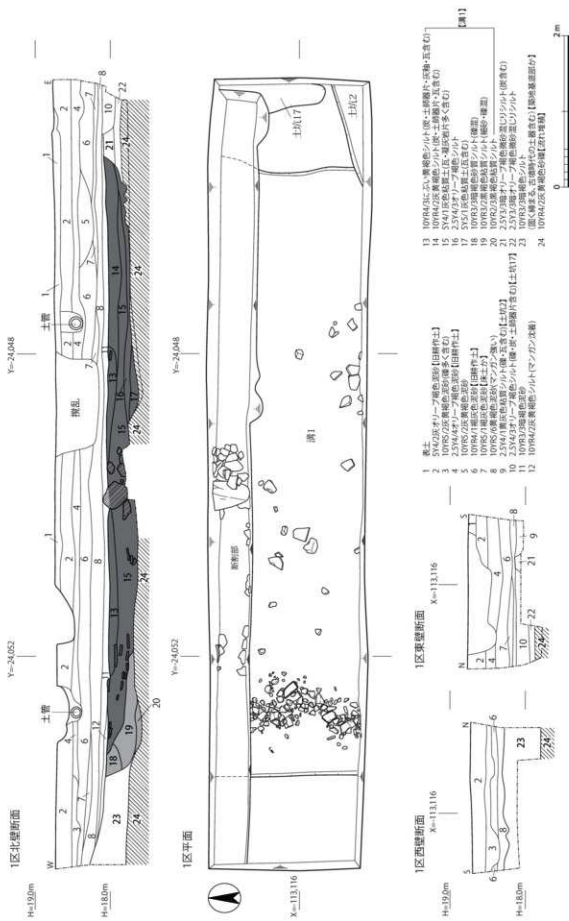
1) 1区 (図6・図版1)

溝1 中央部で確認した南北溝で、西築地内溝に該当する。幅8.15m、深さ約0.45mで、調査区外に続く。溝底には凹凸が認められ、溝底の標高は東側で約17.8m、西側で約17.6mである。埋没状況を見る限り、まず西肩付近の暗褐色砂質シルト(18層)～黒褐色粘質シルト(20層)が埋められ¹⁰⁾、その後、灰色粘質土(15層)を主体とする土で埋められたと考える。また、西肩から約0.5～1.5m付近に瓦が集中し、中央部では凝灰岩と土器が比較的まとまって出土した。凝灰岩は大きなもので長辺約35cm、短辺約25cmある。9世紀後半の土師器、施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑2・17 東端で土坑2基を検出した。土坑2は南東隅で検出し、東西1.3m以上、南北0.4m以上で調査区外に続く。溝1を掘り込んで成立する。埋土から土師器、須恵器、瓦が少量出土したが、土師器は細片ばかりで時期の絞り込みが難しい。土坑17は北東隅で検出し、東西0.4m以上、

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	溝1・13 ピット5～10、土坑2・4・11・17 築地基底部	西寺西築地内溝 西寺西築地基底部か



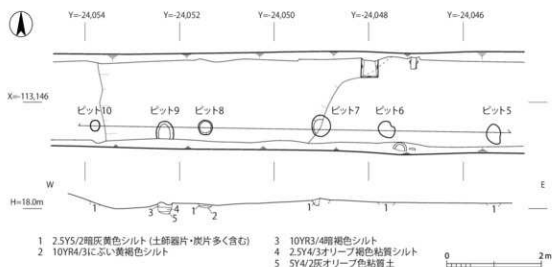


図8 2区ピット平面及びエレベーション図(1:80)

南北1.4m以上で調査区外に続く。遺物は出土していない。

築地基底部 西端で東西約1.1mにわたって確認した暗褐色シルト層(23層)は、西築地推定位置に該当する。土層は固く締まり、最も高い西端で標高が18.28mある。1区から西に3m離れた34次5区で確認された西築地犬行の検出面が18.5m、西大宮大路路面が18.4mであることから、削り出しの西築地基底部の可能性が考えられる¹¹⁾。

2) 2区(図7・8、図版2)

溝13 西寄りで検出した南北溝である。検出位置から西築地内溝と判断した。幅4.3~7.2m、深さ約0.35mで、調査区外に続く。埋土から9世紀後半の土師器や瓦が出土した。また、オリブ褐色シルト層(27層)から金属滓が1点出土した。34次6区・37次8区で検出された鋳造関連遺構との関連が想定される¹²⁾。溝底の標高は東側で約18.0m、西側で約17.9mである。

ピット5~10(図8) 中央~東寄りでピットを6基確認した。ピット5~8・10は概ね円形である。検出面で、5~7は直径0.4m、10は直径0.2mである。8は直径0.3m、深さ0.08m、埋土から土師器、瓦が少量出土したが、土師器は細片ばかりで時期の絞り込みが難しい。9は楕円形で、東西0.33m、南北0.36m以上、深さは0.23m、埋土から平安時代の土師器と丸瓦が出土した。ピット5・6間、7・8・10間の間隔は、約2.4m(8尺)で埋土も共通する。時期を確定できる遺物は確認できていないが、掘立柱塼等が存在した可能性が考えられる。

土坑4・11 東西端で各1基を検出した。検出面で、土坑4は東西0.56m以上、南北1.08m以上である。埋土から瓦と須恵器甕が出土した。土坑11は掘乱を利用した西端断削部の底で検出した楕円形の土坑である。検出面で、東西・南北ともに0.5m以上である。木の根や礫を多く含む。

築地基底部 西側で東西約4mにわたって確認した黄褐色シルト層(33層)は、西築地推定位置に該当する。土層は固く締まり、Y=24,056(西築地心付近)において標高18.42mである。西築地基底部の可能性が考えられる。

(3) 遺物

今回出土した遺物の大半は平安時代に属する。平安時代の土器、陶器類、瓦類のほか、下層の唐橋遺跡に伴う弥生～古墳時代の土器などコンテナ5箱分が出土した。

1) 土器類

弥生～古墳時代 (図9・10)

1は弥生土器の底部片である。底径は4cmで、内外面ともにユビオサエを施す。弥生時代後期のものと考えられる。2区溝13断割部下層出土。

2は土師器の甕である。厚さ3～4mmの薄い器壁と胴部最大径がやや下半部にくる形態の特徴をもち、外面調整は肩部まで斜め方向のヨコハケ、下半部がタテハケ、内面は摩滅のため不明瞭だが全面にケズリが入ることから、布留式の土師器甕と判断される。古墳時代前期のものと考えられる。1区23層出土。



図9 弥生土器実測図 (1:4)

平安時代 (図11)

溝1から比較的まとまって土器が出土した。溝1・13については、検出面での精査時と、断割部掘削時に分けて取り上げを行った。土器類は細片が多く、口径が復元できるものはほとんどない。

溝1検出時 3～8は土師器である。3～6は皿、7は高杯、8は甕の口縁部である。9は須恵器の壺で、内外面ともにヨコナデで調整し、底部は糸切りのままである。10・11は灰釉陶器碗の口縁部である。内外面ともに施釉し、口縁端部が外反する。これらの土器は2B期に属すると思われる、9世紀後半に位置付けられる。

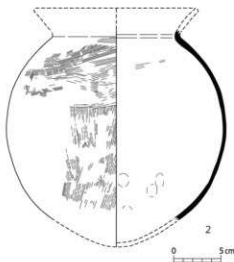


図10 古墳時代土器実測図 (1:4)

溝1断割部上層 12・13は土師器甕の口縁部である。14は須恵器の底部片である。高台は輪高台で、高さは4mmと低い。15～17は灰釉陶器である。15は底部片である。高台は輪高台である。16は口径16.4cm、底径7cm、器高4.7cmである。外面は無釉でヘラケズリを施し、内面体部のみ

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 総数 (箱)	Aランク 箱数 (点数)	Bランク 箱数	Cランク 箱数
弥生時代～古墳時代	弥生土器、土師器	4箱	弥生土器1点、土師器1点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、 灰釉陶器、瓦類、土製品、金属製品		土師器14点、須恵器3点、 緑釉陶器2点、灰釉陶器5点、 軒平瓦2点、丸瓦1点、平瓦2点		
	合計	4箱	1箱 (31点)、ほか3箱	0箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、A・Bランク遺物を抽出したため、出土時より1箱少なくなっている。

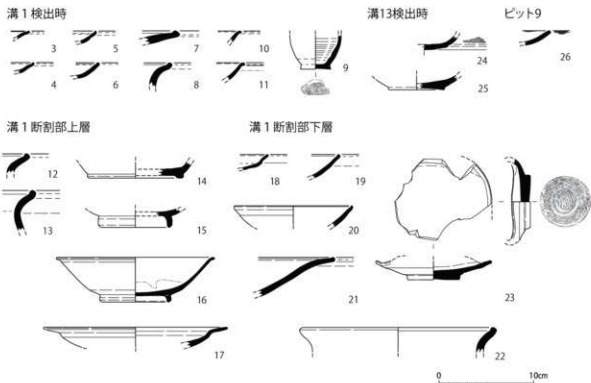


図11 平安時代土器実測図(1:4)

施釉する。高台は輪高台である。17は高杯である。13層出土。これらの土器は2B期に属すると考えられ、9世紀後半に位置付けられる。

溝1断割部下層 18～22は土師器である。18は皿、19・20は椀、21は高杯、22は甕の口縁部である。20は口径が12.4cmに復元でき、内外面に煤が付着する。23は緑釉陶器の耳皿で、内外面ともに施釉する。高台は糸切痕が残る平高台である。これらの土器は2B期に属すると考えられ、9世紀後半に位置付けられる。

溝13検出時 24は須恵器の高杯である。体部下端に櫛描きの波状文が入る。25は緑釉陶器の底部片で、蛇の目高台である。

ビット9 26は土師器皿である。口縁部に煤が付着しており、灯明皿に用いられたものと判断できる。ビット9の最上層(図8-3層)から出土した。

2) 瓦類(図12)

瓦類は、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土した。瓦1・2は軒平瓦である。瓦1は均整唐草文で、西寺所用瓦である。「総括報告」の瓦25と同范瓦である。頸部は曲線頸で、焼成は硬質である。牧野阪瓦窯産。平安時代前期に属する。2区重機掘削時出土。瓦2は軒平瓦の瓦当下端部片である。1区溝1西部の瓦集中部出土。瓦3は丸瓦である。凸面縄叩きの後に一部ナデを施し、そこへ「西寺」を陰刻する¹³⁾。瓦4・5は平瓦である。瓦4は、凹面から端面にかけて布目が連続し、凸面はナデにより布目が消える。「総括報告」の瓦61と同様の特徵を持つ¹⁴⁾。瓦5は狭～広端の長さが34cm

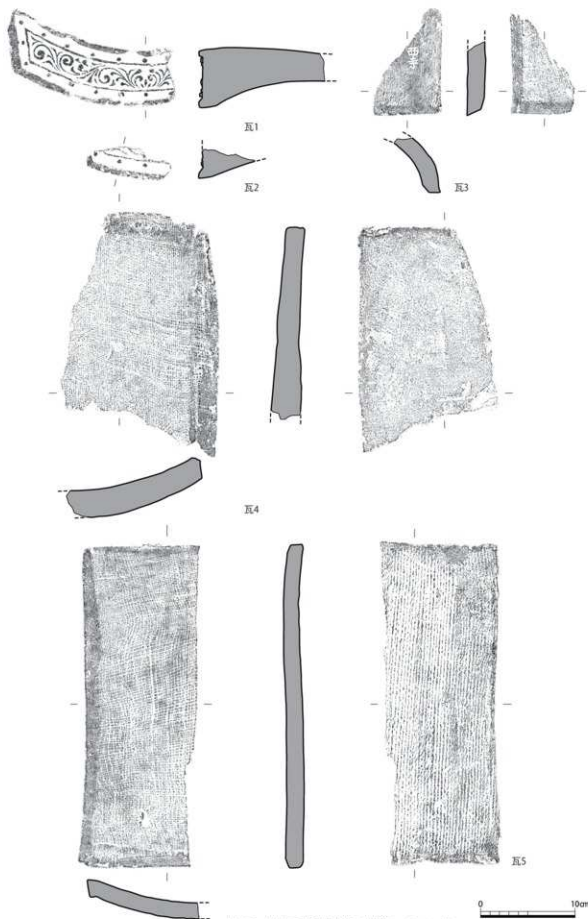


图12 出土瓦实测图及び拓影1（1：4）

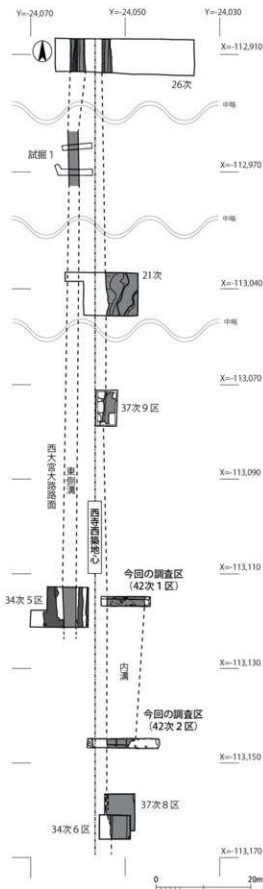


図13 西築地内溝及び西大宮大路東側溝検出位置図 (1:800)

である。凸面は縄叩き目が残る。半載されていることから甕斗瓦の可能性も考えられる。瓦3～5は溝1断削部上層出土。

3) その他

土製品、金属製品(鉄釘)各1点が出土した。土製品は長辺7cm、短辺5cm、厚さ3cmである。赤褐色を呈する面を持ち、破面にはスサが多く含まれる¹⁵⁾。溝13最上層出土。鉄釘は全長17.5cm、断面は方形で0.9cm角である。溝1検出時出土。

4. まとめ

本調査では内溝の幅に関する情報を得ることができた。最後に、周辺調査成果を踏まえた上で、成果をまとめておく。

今回の調査では、1・2区ともに西築地内溝を確認することができた。内溝は、1区で幅8.15m、2区で幅4.3～7.2mあることが判明した。深さはいずれも約0.4mである。

既に「総括報告」で内溝についてはまとめられており¹⁶⁾、出土遺物から遅くとも9世紀後半頃には埋められたこと、溝底には凹凸があり、北側から(21次、37次9区、34次6区・37次8区)南側に向かってわずかに低くなること、ただし、37次9区～34次6区・37次8区にかけての高低差はほとんどなく、排水機能は低かったことが指摘されている。

今回の調査でも、出土遺物が9世紀後半頃に位置付けられることから、遅くともその頃には埋められたことを追認した。溝の排水機能については、溝底の標高が2区よりも1区で低いという結果を得た。2区溝底の標高は、34次6区・37次8区とほぼ同様の高さとなる。また、溝1の埋土は灰色粘質土が主体であることから、滞水していたと考えられ、排

水機能は低かったと推測できる。なお、今回検出したような幅の広い内溝は、平安宮内や、皇嘉門大路等で確認されており、排水溝の開削と築地構築土の土取りを兼ねていた可能性が指摘されている¹⁷⁾。

内溝以外の遺構としては、2区で内溝埋土を掘り込んでピットが成立することから、内溝を埋めた後に築造関連遺構が成立する34・37次の調査成果と符合する。塔の造営開始に伴って、塔周辺の土地利用に変化が生じたことが推測される。

当該地周辺の今後の課題としては、塔基壇の規模の確定や、寺域の南西角にあたる西大宮大路と九条大路の接続部の状況把握等があげられる。

(熊谷 舞子)

註

- 1) 西森正晃・鈴木久史ほか『史跡 西寺跡発掘調査総括報告書』京都市文化市民局、2021年。
- 2) 『続日本後紀』承和十年七月廿三日条・『日本紀略』延暦十六年四月四日条。
- 3) 『性霊集』巻六・『日本紀略』天長三年三月十日条、『僧綱補任抄出』。
- 4) 『日本紀略』天長九年七月五日条。
- 5) 『続日本紀』延暦八年三月十六日条「廢造東大寺司」。
- 6) 『日本三代実録』元慶六年六月廿六日条。
- 7) 『日本紀略』正暦元年二月二日条。
- 8) 『東寺長者補任』巻二。
- 9) 『明月記』天福元年十二月二十五日条。
- 10) 18～20層は残存幅約1.7mで、当初の内溝の可能性も想定されるが、遺物が出土せず時期差等も指摘できないため根拠に乏しい。
- 11) 鈴木久史「平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡(34次)・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成30年度』京都市文化市民局、2019年。なお、29次調査で検出された東築地基底部は地山を削り出しており、西築地も同様に地山を削り出した基底部の可能性がある。
- 12) 註11・鈴木久史「西寺跡(37次)・平安京右京九条一坊十二・十三町跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告令和元年度』京都市文化市民局、2020年。
- 13) 平安博物館編『平安京古瓦図録』1977年。「図録篇」p.194、文字瓦714番。
- 14) 註1文献、p.74。
- 15) スサには葺や藁等が使われており、高温に接する面を含んだ炉壁や増塼、または窯壁などの破片の可能性はある。所見については、(公財)京都市埋蔵文化財研究所・関見史氏のご教示による。
- 16) 註1文献、p.91～92。
- 17) 西森正晃「長岡・平安宮の造営の実態」『都城制研究(11)―日本古代の都城を造る―』奈良女子大学古代学術研究センター、2017年、東洋一・柏田有香『平安京右京七条一坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-2、2016年。

Ⅲ 御土居跡

1. 調査の経緯と経過

調査地は、北区鷹峯旧土居町4-39に位置しており、豊臣秀吉が天正19年（1591）に築いた「御土居」跡に該当する（図1）。当地で建築計画の事前相談を受け、既存建物解体の際に現地を確認したところ、土塁盛土の可能性のある堆積が露出していることが明らかとなった（図2）。その後、令和6年4月11日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出されたため、計画に先立ち発掘調査を実施することとなった。

調査は令和6年6月3日から伐採作業を開始した。調査区は解体作業時に出来た凹みを利用して2×13mの計26㎡を設定した（図3・8）。道路境界に高さ約1.2mの石積みがあったため重機の搬入が出来ず（図4）、作業はすべて人力で行った。調査方針として、解体時に確認した堆積が土塁盛土かを判別するため、明確な地山まで掘削し、堆積状況の観察を行うこととした。掘削は4日から開始し、地表面から1.5m掘り下げたところ、固く締まった礫混じりのシルト層を確認し、これを地山として捉え調査を進めた。その結果、地表に露出する堆積は土塁盛土であることを確認するとともに、土塁外側（西側）に堀及び堤が存在することが判明した。確認した遺構群については、露出する土塁盛土と合わせ、精査、写真撮影、測量などの記録作業を行った（図10）。記録作業終了後、調査区内については、30cm毎にプレート転圧にて埋め戻しを実施、6月21日に全ての作業を終了した。

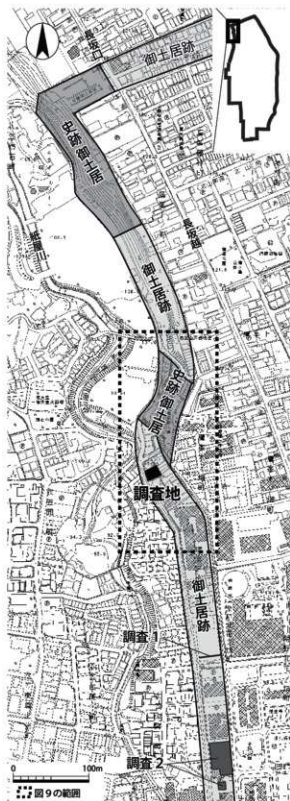


図1 調査位置図（1:5,000）



図2 盛土露出状況（北西から）



図3 調査予定地（北東から）



図4 調査前状況（西から）



図5 作業風景（西から）



図6 埋め戻し状況（北東から）



図7 埋め戻し完了状況（西から）

（図6・7）。

2. 遺跡の環境

（1）地理的環境

調査地周辺は京都盆地北縁にあたり、北部山地から延びる丘陵（鷹峯台地）上に位置している。丘陵の南縁は船岡山を限りとし、東縁を若狭川、西縁を紙屋川に限る南北約2km、東西約0.6kmの南北に長い舌状に広がっている¹⁾。調査地は、紙屋川が河岸段丘を形成する丘陵西縁に位置する

(図1)。調査地北側には紙屋川の攻撃斜面が認められ、段丘崖が露出する急傾斜地となっている。川は調査地北側の段丘崖から西に流れの向きを変え、やや遠ざかるものの、調査地は川に向かって下がる急傾斜地となっている。西側道路境界には石積みがあり(図4)、調査地最上面と西側道路(御前通)との比高は最大約7mを測り、御土居盛土が残ることが想定された。調査区上面の標高は107m前後である。



図8 調査区配置図(1:500)

(2) 歴史的環境

平安京遷都以前の状況については判然としない。斜面地に立地することから水はけが良く、水田耕作に不適であり、当該期の集落遺跡は確認されていない。周辺で土地利用が始まるのは平安京遷都以降となる。平安京の北郊に位置する当地は、「栗栖野」または洛北七野に数えられる「蓮台野」や「紫野」と称された天皇の遊獵地となる²⁾。平安時代中期以降は葬送の地として著名で、付近には皇族の葬地が数多く営まれたことが知られている³⁾。

また、調査地東側には丹波と洛中を結ぶ長坂越が通り、経済的にも軍事的にも重要な街道であったことから、鎌倉時代には関所が設けられ(「長坂口」、一帯はしばしば合戦の舞台として登場する交通の要衝であった。

御土居 天正19年(1591)、豊臣秀吉は京都の市街地を土塁と堀で囲む御土居を築造した。その範囲は東を鴨川、西を紙屋川が限り、南は東寺を取り込み、北は鷹峯に至る全長22.5kmの市街地を大きく囲む惣構であった。江戸時代の記録には、土塁基底部の幅が十～十五間半(18～28m)、犬走が三～四間半(5.6～8.1m)、高さが二～三間(3.6～5.4m)とあり⁴⁾、堀の幅が二～十間(3.6～18m)となる。当時、御土

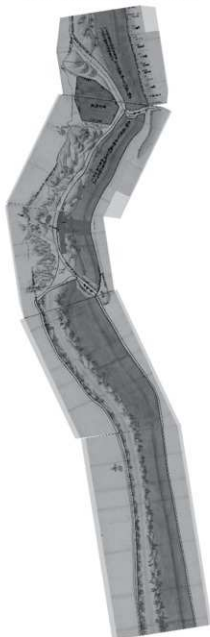


図9 『京都惣曲輪御土居絵図(部分)』
元禄15年(1702) 京都大学総合博物館蔵

居は「山城堤」（『兼見卿記』）^{95）}、「洛中惣構」（『滝川文書』）^{96）}、「大堀」（『北野社家日記』）^{97）}などと称され、その目的として、洛中で悪党が発生した際の取り締まり（『三藐院記』）^{98）}、堤（堤防）（『兼見卿記』など）と記されていることから、京都の防衛や治安維持、治水などを目的とした惣構と認識されていたことがわかる。

御土居は、江戸時代以降も引き続き公儀（幕府）の管理下におかれ維持が図られたが、東辺にあたる鴨川右岸沿いでは、寛文新堤の築造（寛文9年（1669））以降、堤防としての役割が薄まり、市街地化の進展に合わせ、取り壊しが進められた。また、堀の一部も洛中共同の塵芥捨場として利用されるなど埋め立てが進み、土塁に植えられた竹の管理に重点が置かれたため、「御土居」と称されるようになる。一方、北西隅付近にあたる調査地付近は、長坂越の街道沿いを除き市街地化が遅れたため、近代に至るまで良好に残っていた。昭和5年（1930）には、土塁が良好に残存していた北・西辺部を中心に8箇所（昭和40年に北野天満宮境内の1箇所が追加され、現在は9箇所）が「史蹟 御土居」に指定された。

調査地は、史跡指定地（御土居史跡公園）南側の切通を挟んだ南側にあたる。切通は、公儀から御土居の管理を委託されていた角倉家が元禄15年（1702）に作成した「京都惣曲輪御土居絵図」にも「中野道」として描かれており（図9）、江戸時代中頃には開削されていることがわかる。切通以南には土塁に沿って堀状の表記が認められ、調査地南側の発掘調査（図1・調査2）においても堀が確認されていることから、今回の調査においても関連する遺構が展開することが想定された。

（3）周辺調査

御土居北西隅付近に調査地周辺の調査事例は少なく、2箇所まで調査が実施されている（図1）。

調査1 佛教大学研究室棟建設に伴い1995年に実施された試掘調査である^{99）}。御土居跡を横断する東西方向の調査区が設定されたが、近代以降の大きな削平を受け、盛土の確認には至っていない。一方で地山の段丘礫層を確認するとともに、西側の紙屋川へと下がる傾斜変化点を利用して御土居が構築されたとの見解が示されている。

調査2 楽只市営住宅建設に伴い2016年に実施された発掘調査である^{100）}。土塁裾部の盛土、犬走り及び堀跡、土塁を横断する暗渠が確認されている。ここでは、段丘の傾斜変化に沿った盛土の構築方法が明らかとなり、地形に即して御土居が築造されたことを裏付ける結果となった。また、平安時代の墓跡や凝灰岩製の笠塔婆が出土し、葬送地であった地歴を示す成果が得られている。

3. 調査成果

（1）遺構（巻頭図版1～3、図10～14、図版3～5）

調査区内にて、土塁、堀、堤を確認したため、層序は東西で異なる（図11）。東半では表土直下

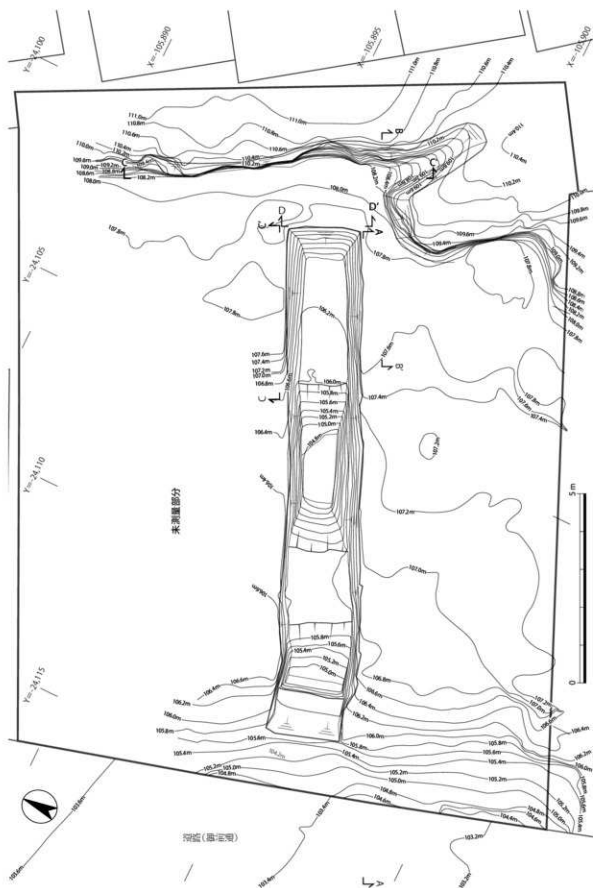


図10 調査地平面測量図(1:100)

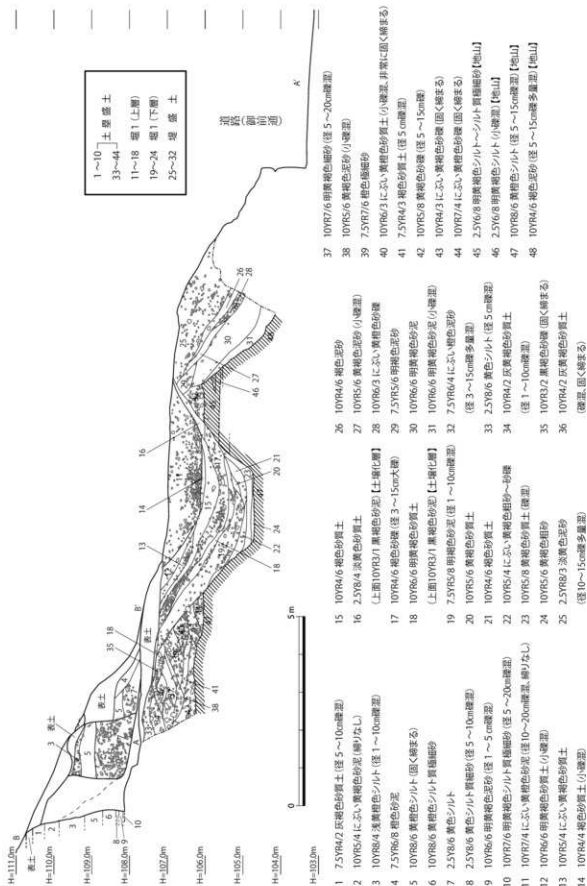


図 11 南壁断面図及び見通し図 (1 : 100)

GL-0.15 mで土塁盛土となり、-1.5 mで黄橙色シルト礫混じりの地山となる。西半ではGL-0.1mで堤盛土となり、-0.9mで明黄褐色シルトの地山となる。地山は紙屋川に向かって東から西に傾斜しており、上面の標高は東端で106.2 m、堤部分で106.0 mとなる。地山は堤西側で大きく落込み、調査区西端での標高は104.1 mである。

土塁 調査区東半にて地山を確認したことから（図11-47層）、調査地東半に露出する堆積（図2）も土塁盛土と判明したため、合わせて報告を行う。調査地内を含め確認できた土塁盛土は、南

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
安土桃山時代	御土居（土塁・堀1・堤・落込み2）	

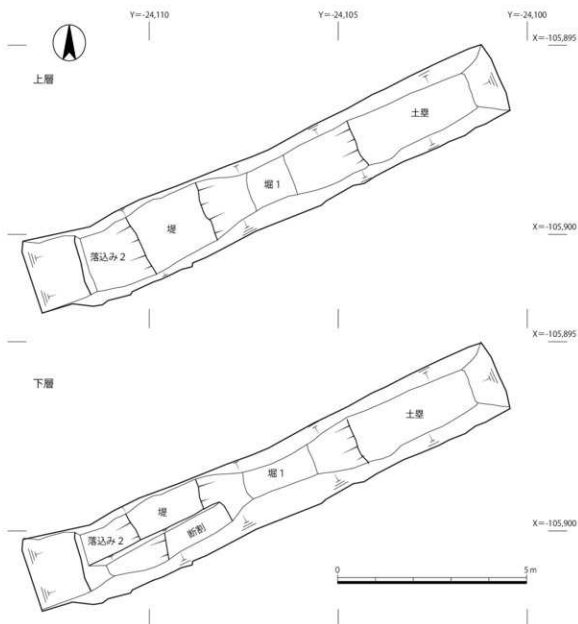


図12 調査区平面図（1：100）

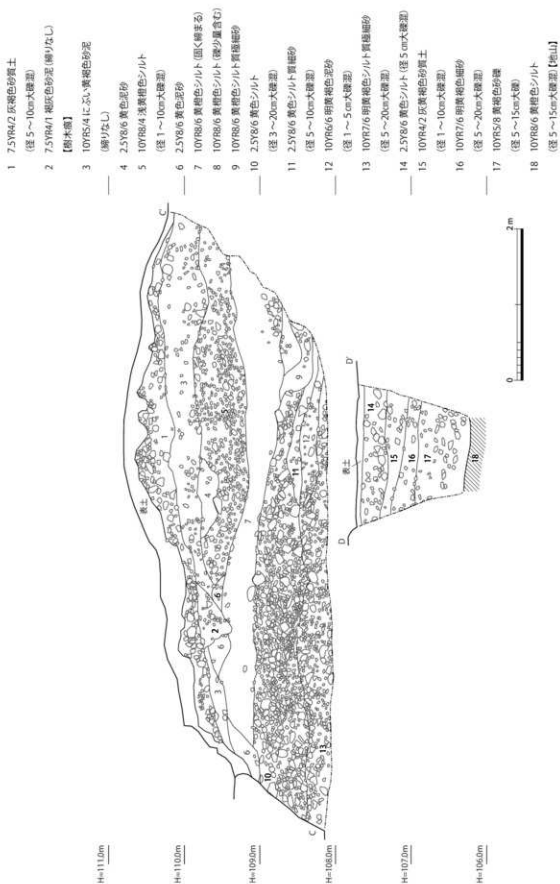


図13 東壁断面図 (1:50)

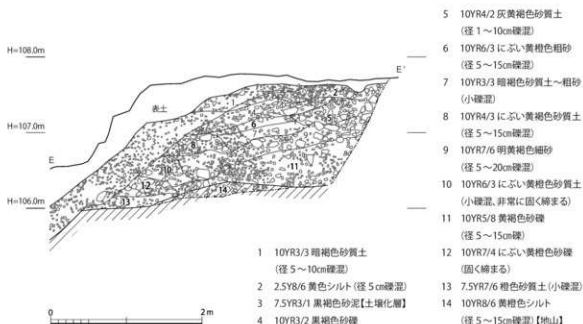


図 14 北壁断面図 (1:50)

北 13m、東西 8m、高さ最大 5m 分である (図 10)。調査地南端には幅 50cm で盛土が良好に残り (図 11-4 層、図版 5-2)、土塁裾部の旧状を保つ。主軸は北に対して西に 25 度振る。

土塁の構築方法は、始めに堀肩口の地山直上に固く締まった砂礫で基底部の幅約 1.3m、高さ約 0.5m の小山を築く (図 11-43・44 層、図 14-12・13 層)。小山裾部に向かって、東側から礫が混じる砂質土などを入れる (図 11-41・42 層、図 14-11 層)。次にその上面に一回り大きい基底部幅 0.8~2.5m、高さ 0.4~0.6m の砂礫主体の小山を築く (図 11-39・40 層、図 14-10 層)。さらに小山に向かって東側から礫混じりの細砂などを入れる (図 11-36~38 層、図 14-9 層)。

上記の通り、堀側に小山を設け、御土居内側から土を入れる工程を繰り返すことによって土塁を積み上げている。なお、盛土内に含まれる多量の礫は、地山に含まれるチャートと砂岩が主体となる。土塁盛土内からは、遺物は出土しなかった。

堀 1 土塁に沿った南北方向の堀で、御土居の外堀にあたる。南北方向にさらに続く。埋没状況から上下 2 層に分けて調査を行った。上層は断面形状が U 字状を呈し、幅 6.7m、深さ 1.7m を測る (図版 4-1)。埋土は砂質土と礫を主体としており、遺物は近代の陶磁器が少量出土した。下層は断面形状が逆台形の箱堀で、幅 7.3m、深さ 2.3m を測る (図版 4-2)。堆積状況から、土塁盛土が徐々に流れ込み、埋没したことを確信した。最下層には厚さ 0.1m で粗砂の堆積が認められる。下層から遺物は出土しなかった。

堤 堀 1 西側に築かれた堤である (図版 5-1)。明黄褐色シルトの地山上面に盛土を行い構築している。堤の幅 4.8m 以上、地山からの高さ 1.0m を確認した。堤の西端は調査区外となる。地山は西側で約 50 度の急傾斜で西に向かって落ち込む (落込み 2)。構築方法は、地山直上に幅 1.0m、高さ 0.6m の固く締まった礫混じりの泥砂で小山を築き、小山上面から斜面に土を入れる。堤盛土内から時期不明の土師器細片が出土した。

落込み2 堤西側の落込みである。堤直下から地山は約65度の急傾斜で落ち込む。紙屋川が形成した河岸段丘崖と考えられる。

(2) 遺物(図15)

出土した遺物は、土師器、陶器、磁器の4点のみである。土師器は堀1上層及び堤盛土から出土した極細片である。1は陶器の壺又は甕の底部である。貼り付け高台で底径6.8cmを測る。内外面全面施釉で、灰白色の釉薬が薄くかかる。内外面ともにユビオサエの痕跡が明瞭に残る。産地及び時期は不明。2は国産の染付碗である。外面に銅板転写で山水画を施す。近代に属するものである。1・2ともに堀1上層から出土した。

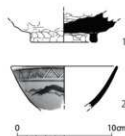


図15 遺物実測図(1:4)

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 総数(箱)	Aランク 箱数(点数)	Bランク 箱数	Cランク 箱数
近代	陶磁器・土師器		染付1点、陶器1点		
	合計	2箱	1箱(2点)	0箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、A・Bランク遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

4. まとめ

今回の調査にて、西側道路から一段高い調査地全体に御土居に関連する盛土が良好に残されていることが明らかとなり、土塁盛土、堀、堤を確認する成果が得られた。中でも御土居外堀に堤を作る状況が確認できたのは、今回が初めての事例となる。ここでは、周辺調査2(図1)の成果を踏まえ考察を行う。

(1) 土塁の構築方法について

調査で明らかとなった土塁構築方法については、下記の通りである。

- ①土塁西端(外堀東肩口)の地山上面に、固く締まった砂礫の小山を築く。
- ②小山を土留めとして、東側から礫混じりの砂質土を入れる。
- ③土塁西端の②の上に一回り大きい固く締まった砂礫の小山を築く。
- ④小山に向かって、東側から礫混じりの細砂などを入れる。
- ⑤以降、①～④の工程を繰り返し、高く積み上げる。

上記を踏まえると、堀側の裾部に砂礫で核となる小山を築き、小山を土留めとして東側の土塁側から堀側に向かって盛土を行い、土塁を構築していることが分かる。最初に核となる小山を築き、土を入れる工法は、御土居の他の地点や山科本願寺の土塁構築方法と共通するものである¹⁾。調査

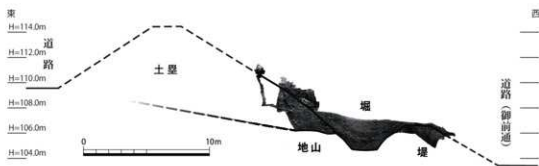


図16 御土居断面模式図（1：300）

2においても、シルト主体の盛土の場所では同様の工法を用いている。しかし、砂礫主体の盛土の場所では同工法の痕跡は明瞭ではなく、東西方向に等間隔（幅3.1～3.6m）の集石で区画し、これを一単位として土塁を構築していることが明らかとなっている。今回の調査でも砂礫を主体とする盛土であったため、調査地東壁にて土塁縦断の堆積状況の観察を行った。しかし、平面的な観察を行い得なかったため、集石の区画を単位とする構築方法を用いているかは判然としなかった。

なお、盛土内に含まれる砂礫は、地山にも含まれるチャートと砂岩を主体としており、土塁盛土は、周辺の土を用いて構築されていることがわかる。

（2）土塁の規模について

今回の調査で確認できた土塁の規模は、南北13m、東西8m、高さ最大5m分である。ここでは、調査地北側に残る史跡指定地（鷹峯3番地：御土居史跡公園）や調査2の成果から、調査地における当初の土塁規模について検討を加える（図16）。

調査地の南端には、幅約50cmであるが土塁本来の旧状を留める裾部が残ることを確認した（図11-4層）。堀1東肩の傾斜と土塁裾部の角度は、40～45度となる。土塁基底部の幅については、調査2において、調査地東側の南北道路境界が土塁東端を踏襲していることが指摘されており、調査地近辺でも同様と捉えれば、土塁幅は基底部で約22mに復元できる。土塁の高さについて参考となるのは、調査地北東約40mに所在する御土居史跡公園である。公園は土塁全体の旧状をよく留めており、現在の公園頂部の標高は南端で約116mで、頂部と公園東側平坦面との比高は約3mである。調査地東側道路の標高は110m前後であり、土塁裾部の傾斜が40～45度であることを踏まえると、調査地付近の土塁頂部の標高は114m程度に復元できよう。調査地内では、土塁と堀の間に犬走が存在しないため、堀と土塁の境界は明確ではないが、土塁頂部と地山上面との比高は約8m、堀東肩口からでも約7mに及ぶ。

（3）堀と堤について

御土居は、文献資料の記載及びこれまでの発掘調査成果から、鴨川（賀茂川）沿いの東辺などの河川沿いを除き、土塁には堀が伴うことが明らかになっている。一方、西辺の一条通以北は、紙屋

川が形成した段丘崖の急斜面を利用して構築されている。したがって、土塁沿いに紙屋川が流れている箇所が多く、これを外堀として利用している¹²⁾。一方、調査地近辺では、紙屋川は蛇行を繰り返して、土塁から本流が遠ざかる箇所が散見される。この状況は「寛永十四年（1637）洛中絵図」からも確認でき、御土居築造当初から同様であったと考えられる。現在、調査地すぐ北側には紙屋川の攻撃斜面である崖面が認められ、本流はそこから西に流れの向きを変え土塁際から遠ざかっている。そのため、この付近には堀を設けていたことが「京都惣輪御土居絵図」（以下、「絵図」という）から窺え、実際に調査2で堀の存在が確認されている。

今回の調査においても、幅7.3m、深さ2.3mの堀を確認した。埋土は砂質土と礫を主体としており、土塁裾部の盛土と類似すること、土塁側から流れ込む堆積状況から、徐々に埋没していったことがわかる。また、最下層には厚さ0.1mで粗砂堆積が認められ、一時期流水があったことを示している。「絵図」では、調査地北側の紙屋川の攻撃斜面の場所に切り通された「中野道」から堀が描かれているが、段丘下を流れる紙屋川とは高低差が著しく、本流から導水していたとは考えにくい。また、傾斜地のため常時滞水していた様子は認められず、調査地付近は空堀であったと想定される。なお、埋土からは最上層で近代の陶磁器が少量出土したのみであり、近代まで堀が凹みとして残っていたことがわかる。

また、今回の調査では、堀外側に堤が存在することが明らかとなった。先述した通り、御土居西辺の一条通以北は、紙屋川が形成した河岸段丘の傾斜変換点を利用して構築されており、御土居外側は斜面地となっている。同じ傾斜地で実施された調査2では、堀の西肩は調査区外となっていたため、堀全体の様相は不明であった。今回の調査で堀の両肩を確認することができ、堤を築くことで堀の機能を維持していることが判明した。

調査で確認した堤の西端は調査区外となるが、堤最上部から西に向かって土砂を流し込む状況が観察できたため、土留めとなる小山が堤西端に存在することは確実である。堤西端は、大きな地形変換地点となっている西側道路（御前通）との境界石積みがその位置を踏襲していると捉えられよう。したがって、堤の規模は基底部の幅約8m、高さ約3mに復元できる。

御土居の堀外側に堤が存在することは、今回の調査で初めて確認された。「絵図」では、調査地北側の切通である「中野道」以南「狼谷」の切通付近間は、紙屋川は土塁に沿わず、土塁沿いには堀が描かれている。中でも「中野道」から「下野道」に至るまでの堀外側には、堀西側に沿って樹木が繁茂する様子が表現されている。今回の調査で、堀外側に堤が確認できたことから、この表現は堤を示しているといえよう¹³⁾。したがって堤の存在は、御土居全体で普遍的なものではなく、河岸段丘際の傾斜地に築かれた御土居西辺北端の約300mに限られた特徴といえよう。斜面地であっても堀を設けることは、御土居が土塁だけではなく、堀を伴う必要があると認識されていたことを示している。

なお、調査地北側の切通である「中野道」については、元禄15年（1702）に描かれた「絵図」には存在するものの、御土居築造当初まで遡るかは定かではない。しかし、今回の調査による御土居の断面観察から、土塁、堀、堤は後世に付加、改変されたものではなく、一体的に築造された

ものであることは間違いないといえる。「中野道」は、「寛永十四年（1637）洛中絵図」には描かれておらず、元禄15年までに開削されたと考えられるが、土塁、堀、堤は一体のものとして、御土居築造当初から存在していたといえるだろう。

今回の調査では、土塁の構築を堀側から築いていくこと、堀外側に堤を設けるといった知見を得ることができた。御土居が、立地する地形や地質の特徴に合わせ、様々な構築方法を用いて築かれたことを改めて裏付ける成果となった。特に調査地が立地する御土居西辺北端部では、紙屋川の河岸段丘を最大限利用して構築されており、西側から望んだ御土居の姿は、崖面の上に聳え立つ威容を誇っていたといえるだろう。

（西森 正晃）

註

- 1) 植村善博「京都盆地北縁、鷹ヶ峯台地の地形特性と活構造」『文学部論集』第82号、佛教大学学会、1998年。
- 2) 内野、北野、平野、上野、紫野、蓮台野、ノ野の七野。『京都市の地名 日本歴史地名大系第27巻』平凡社 1979年。
- 3) 現在も近衛天皇や後冷泉天皇の火葬塚が残る。
- 4) 『京都御役所向大概覚書』
京都御土居敷長合 老萬貳百拾九間余
但 根敷拾間より拾五間半迄 馬踏参間より四間半迄 高貳間より参間迄
- 5) 『兼見卿記』天正十九年正月十八日条「山城堤」
- 6) 天正十九年四月二十五日付浅野長吉書状『滝川文書』「次洛中惣構御普請之儀、大略出来候由」
- 7) 『北野社家日記』天正十九年三月六日
「関白様外之大堀御らんし二たか橋へ御とをり也、各出申候、幣屋川大堀二成申候」
- 8) 『三鏡院記』「天正十九年壬正月ヨリ洛外二堀ヲホラセラル、竹ヲウヘラル、事モ一時也、二月二過半成就也、十ノ口アリト也、此事何タル興行ソト云ニ、惡徒出走ノ時ハヤ鐘ヲツカセ、ソレヲ相図二十門ヲタテ、其内ヲ被捲為ト也」
- 9) 門田誠一「土城としての御土居」『文学部論集』第83号、佛教大学学会、1999年。
- 10) 持田透ほか「御土居跡」京都市埋蔵文化財研究所調査報告2016-11、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、2017年。
- 11) 丸川義広「御土居の発掘調査」『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』日本史研究会、2001年。
御土居跡の発掘調査において土塁が確認された事例では、土塁盛土の構築手順は、最初に堀と反対側に核となる小山を築くことが大半である。今回の調査では、堀側に小山を構築していることが明らかとなった。これは、調査地が鷹ヶ峯台地の丘陵裾部であり、西に向かって下がる傾斜が存在したことが理由と考えられ、調査2においても同様の成果が得られている。丘陵部の立地に由来する特有のものであろう。
- 12) 7) より、御土居築造当時から、紙屋川が御土居の外堀と認識されていたことがわかる。
- 13) 9) では、樹木が繁茂する表現を「御土居の法面が紙屋川に向かっていく自然の傾斜面を書き表している」とされている。

Ⅳ 北白川廃寺、上終町遺跡

1. 調査の経緯と経過

調査地は左京区北白川東瀬ノ内町10-1に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である「北白川廃寺」及び「上終町遺跡」に該当する。当地において宅地造成工事が計画され、令和4年5月31日に文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。これに対し、当課が令和4年6月8日に試掘調査を実施したところ、寺域西を限る可能性のある溝跡など、北白川廃寺に関連する遺構・遺物が良好な状態で遺存することを確認した¹⁾。その後、宅地造成計画に替わり改めて個人住宅建設が計画され、令和6年2月2日に「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。令和4年度の試掘調査結果に鑑み、届出された計画では埋蔵文化財への影響を免れなかったため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

令和4年度の試掘調査により、遺跡の遺存が特に良好であり、かつ新規建物が計画された敷地北西部を中心に東西10m、南北11.5mの115㎡の調査区を設定した(図1)。調査区西端で検出した溝の幅を確認するため、西側を一部拡張した結果、最終的な調査面積は119㎡となった。調査は令和6年4月8日から開始し、同年5月20日に現地での作業をすべて完了した。令和6年4月29日には地元向けに説明会を開催し、50名の参加者を得た。現地での作業日は延べ29日間である。

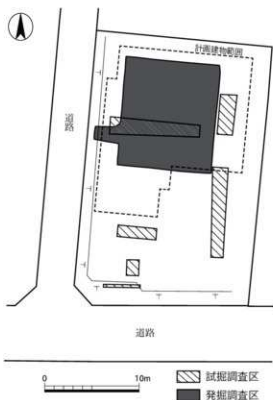


図1 調査区配置図(1:400)



図2 調査前全景(南から)



図3 作業風景(南から)

2. 遺跡の環境

(1) 立地と歴史的環境

左京区北白川は京都盆地北東部に当たり、東山三十六峰のひとつ瓜生山の西麓に位置する。東山三十六峰を構成する比叡山から大文字山の間には広く花崗岩が分布しており、瓜生山もここに含まれる。その花崗岩を白川が侵食し、川が山間から盆地に至って白川扇状地を形成した。白川の名は、花崗岩を母岩とする川砂が白く、川筋が白く見えることに由来する。その川砂は白川砂として、また花崗岩は白川石として、庭や建築部材として広く用いられてきた。

北白川を含む比叡山西南麓では縄文時代以来断続的に遺跡が形成されてきた。今回の調査地も範囲に含まれる上終町遺跡では縄文時代早期の竪穴建物や山型文土器、押型文土器が出土しており、西方の京都大学北部構内（北白川追分町縄文遺跡）や東方の小倉町別当町遺跡、北方の一乗寺向畑町遺跡など縄文時代を通して連続と遺跡が形成される。大正12年に濱田耕作が京都大学北部構内で石斧の破片を採集し試掘調査を実施²⁾、昭和9年には梅原未治らが小倉町遺跡（現在の小倉町別当町遺跡）や上終町遺跡で本格的な発掘調査を実施³⁾（このうち、上終町遺跡調査は図4・表1-10）するなど、近畿地方の縄文土器研究史上極めて重要な地域である。弥生時代にはやや標高の低い西側へと活動の場を移し、京都大学吉田南構内では弥生時代前期の水田跡が発掘調査で確認された。古墳時代には北白川一帯で前・中期の集落遺跡は見つかっていない。調査地の南東側に池田町古墳群が、北方に向畑古墳が、南西に北白川追分町古墳群といった後期の古墳が知られ、現北白川小学校周辺に飛鳥時代にも継続する集落が営まれる（小倉町別当町遺跡）。北白川小学校構内の発掘調査で同時期の竪穴建物や無文銀銭（後に京都市有形文化財に指定）を確認している（図4・表1-調査25）。平安京遷都以降は、平安京と近江を結ぶ志賀越道が今回調査地の南側を通ることから交通の要衝となった。それゆえ室町時代には足利将軍家が有事の際に用いた北白川山城（勝軍地藏山城）や中尾城などの山城が築かれた。

(2) 周辺の調査（図4・表1）

北白川廃寺及び上終町遺跡、小倉町別当町遺跡を対象とした主要な調査を図4・表1に示した。北白川廃寺は昭和9年、京都市の区画整理事業に伴って不時発見された。梅原未治らが発掘調査を実施し、瓦積基壇を検出している（図4・表1-調査12（以下、図・表省略））。この基壇は東西36m、南北23mという巨大なものであった。基壇は金堂に伴うものと推定されており、その一部は京都大学に移築復元された。後に基壇を取り囲む回廊基壇の一部が発見されている（調査13・14・17）。推定寺域の西側では、昭和50年に塔基壇を発見した（調査7・8）。4か所の調査によって、塔基壇が一辺13.8mの正方形であること、瓦積基壇から乱石積基壇へと改修したことが明らかとなった。これらの成果から、白川通を挟んで東側に金堂（東方基壇）、金堂を囲む回廊（西方基壇）、西側に塔という伽藍配置が復元されている⁴⁾。その他、廃寺と同時期の掘立柱建物・堀（調査4）や寺域内を区画する溝を検出しており（調査2・3）、その具体的な状況が徐々に明らかとなってきた。

ている。

北白川廃寺の南側に隣接する小倉町別当町遺跡は縄文・古墳時代の遺構も確認しているが、飛鳥時代以降の遺構・遺物が多く、北白川廃寺と同時期に盛期を迎えている。遺物には上述した無文銀銭のほか、瓦塔や唐三彩も含まれ、一般の集落遺跡とは異なる様相を示す(調査25)。

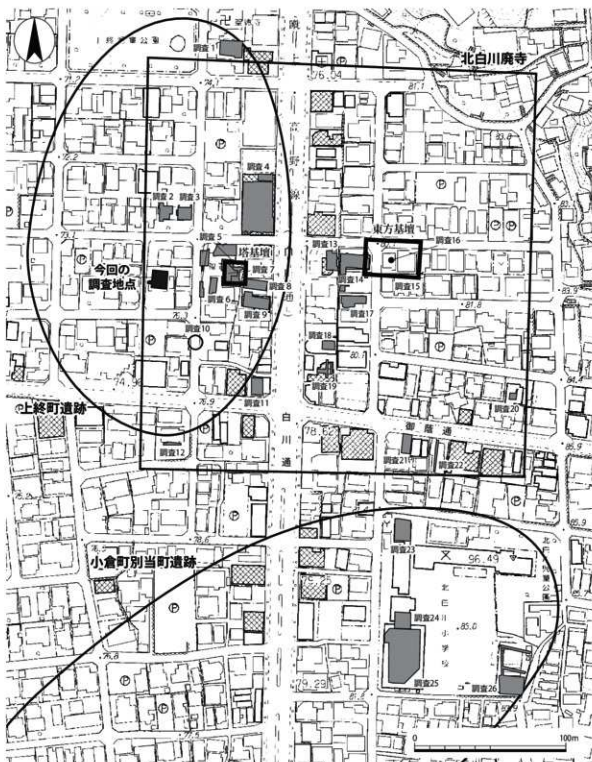


図4 調査地と周辺調査位置図(1:2,500)

表1 近隣調査事例一覧 (図4に対応)

番 号	所 在 地 (『北白川』を省略)	期 間	面積 (㎡)	調 査 内 容	文 献 (書名・発行機関・発行年)
1	東瀬ノ内町43	1981.8.5～ 1981.8.23	200	縄文：包含層／奈良：柱穴・溝・土坑／平安：溝／室町：溝・柱穴	『北白川廃寺跡発掘調査概報』昭和56年度 文観局・埋文研 1982
2	東瀬ノ内町25-2	2020.10.7～ 2020.11.5	85	奈良：溝・土坑	『京都市内遺跡発掘調査報告』令和2年度 文市局 2021
3	東瀬ノ内町25-1	2020.4.6～ 2020.4.22	78	飛鳥：溝	『京都市内遺跡発掘調査報告』令和2年度 文市局 2021
4	山田町1ほか	1990.12.3～ 1991.4.9	730	縄文早期：竪穴・集石・土坑／飛鳥：掘立柱建物／ 奈良～平安：東西掘立柱跡・溝・土坑・掘立柱建物	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概報』 埋文研 1994
5	東瀬ノ内町50-1	1995.5.10～ 1995.9.20	413	縄文：包含層／飛鳥：溝／白鳳～平安：土坑、塔 基壇（瓦積から石積へ改修）	『京都市内遺跡発掘調査概報』平成7年度 文市局 1996
6	東瀬ノ内町4	1974.10.1～ 1974.10.20	53	塔跡南西部	『北白川廃寺跡発掘調査報告』 調査班・文観局 1976
7	東瀬ノ内町4	1975.6.28～ 1975.7.16	150	塔跡基壇（1辺約14m）	『北白川廃寺跡発掘調査報告』 調査班・文観局 1976
8	東瀬ノ内町4	1975.3.25～ 1975.5.11	90	塔跡基壇の南東隅	『北白川廃寺跡発掘調査報告』 調査班・文観局 1976
9	東瀬ノ内町4	1991.7.1～ 1991.8.5	175	奈良～平安：瓦葺・溝・土坑・柱穴	『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概報』 埋文研 1997
10	東瀬ノ内町地内	1934.10.29～ 1934.10.31		縄文中期末の住跡を伴う建物	『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』 第十六冊 京都府 1935
11	堂ノ前町36	2008.2.1～ 2008.3.7	83	中世：谷状遺構	『京都市内遺跡発掘調査概報』平成20年度 文市局 2008
12	堂ノ前町25-2	2024.1.9・15	21	奈良～平安のピット・土坑	『京都市内遺跡発掘調査報告』令和6年度 文市局 2025
13	大覚町56	1990.7.16～ 1990.8.17	106	縄文：包含層／白鳳：小鍛冶遺構／白鳳～平安： 基壇状遺構・溝	『北野寺寺・北白川廃寺発掘調査概報』平 成2年度 文観局 1991
14	大覚町55、55-1	1980.6.3～ 1980.7.6	200	奈良前期（白鳳）：基壇（金堂・西面回廊）・溝・掘 立柱建物	『北白川廃寺跡発掘調査概報』昭和55年度 センター・埋文研 1981
15	大覚町地内	1934.11		金堂基壇（東西119尺（約36m）、南北75尺5寸 （約23m）の瓦積基壇）	『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』 第十九冊 京都府 1939
16	大覚町22	2024.7.9～23		金堂の基壇造土及び掘込地床	『京都市内遺跡詳細分布調査報告』令和6 年度 文市局 2025
17	大覚町55-1・2	2005.11.9～ 2005.12.8	108	飛鳥・奈良：西面・南面回廊跡・内溝・東西溝・ 瓦葺／平安：落込・溝	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成17年度 文市局 2006
18	大覚町61-1	1987.11.18～ 1987.11.24	48	弥生：土坑／平安：溝・櫓	『京都市内遺跡発掘調査概報』昭和62 年度 1988
19	大覚町62	1999.10.14	43	白鳳：溝／江戸：溝	『京都市内遺跡発掘調査概報』平成11年度 文市局 2000
20	上別当町18・ 大覚町47-3	1986.6.4～ 1986.6.5	50	白鳳：溝／平安：溝	『京都市内遺跡発掘調査概報』昭和61 年度 文観局・埋文研 1987
21	上別当町26-1	2006.6.19～ 2006.7.6	73	飛鳥：湿地状堆積（飛鳥に整地、底未確認）／近 代？：ピット	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成18年度 文市局 2007
22	上別当町29、25	1996.8.2	21	焼土を含む土坑	『京都市内遺跡発掘調査概報』平成8年度 文観局 1997
23	上別当町10 北白川小学校	1982.3.1～ 1982.4.17	150	縄文：包含層・河川／飛鳥：竪穴建物・柱穴・掘 立柱建物／江戸：溝・柱穴	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概報 （発掘調査編）』埋文研 1983
24	上別当町70 北白川小学校	1984.10.8～ 1984.10.20	100	飛鳥：竪穴建物・落込・溝	『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概 報』埋文研 1987
25	上別当町70 北白川小学校	1994.9.22～ 1994.12.28	700	飛鳥：竪穴建物・掘立柱建物・柱列・土坑・柱穴・ ピット／平安中期：溝／中～近世：溝・土坑など	『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概報』 埋文研 1996
26	上別当町70 北白川小学校	1994.11.21～ 1994.12.16	260	古墳：溝・包含層／飛鳥・奈良：土坑・柱穴／平 安中期～鎌倉：溝／室町後半：溝／江戸：暗渠	『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概報』 埋文研 1996

発行機関略称：埋文研→財団法人京都市埋蔵文化財研究所・センター→京都市埋蔵文化財調査センター・文観局→京都市文化観光局、
文市局→京都市文化市民局、調査班→北白川廃寺発掘調査班

3. 調査成果

(1) 基本層序 (図5・6)

調査地の現地表面は、東から西へと緩やかに傾斜しており、調査区東端の標高が約75.8mに対し、西端の標高は約75.6mである。敷地西端は西へと落ちる段差となっており、西側道路面は標高約75.2mとなる。調査区全体に厚さ0.5m程度の盛土があり、西半には盛土下層に近世以降に形成された耕作土層が堆積する(北壁2層)。層中には北白川廃寺に伴う瓦が含まれている。その下層及び東半の盛土下には北白川廃寺期の遺構面を形成する黄褐色系の微砂層となる。この層は花崗岩由来の白色粒を含んでおり、調査区内南東部では縄文土器片を含んでいた。縄文時代遺構面の有無を確認するため、縄文土器包含地点の北側で2箇所を断ち割って下層を確認したところ、標高74.65m程度で白色粒を含まない黒色シルトに変わり、74.5mで暗オリーブ褐色シルトに変わった。いずれの層上でも遺構は確認できず、断ち割った範囲内には遺物も含まないことから、縄文時代遺構面は展開していないと判断した。

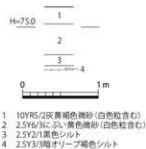


図5 断り部柱状図
(1:50)

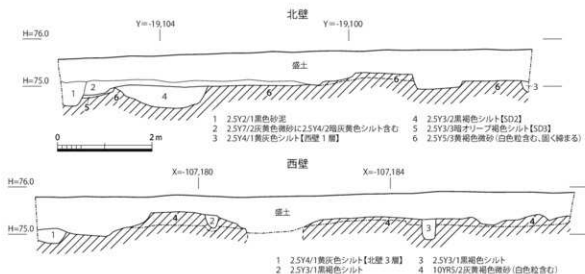


図6 調査区断面図 (1:80)

(2) 遺構 (図7・8・表2)

断り部分を除き、1面の遺構面を設定し、遺構の検出・掘削をおこなった。その結果、奈良時代から平安時代中期の遺構を検出した。これらは北白川廃寺に伴う遺構である可能性が高い。なお、遺構は検出順に番号を振ったが、掘削の結果、遺構としての認識を改めたものや、2つ以上の遺構がひとつの遺構にまとまったものがある。その場合でも、それ以降の遺構番号を繰り上げてはいないため、遺構番号の最大の数値と検出遺構数は一致しない。以下、主要な遺構についてその概要を報告する。

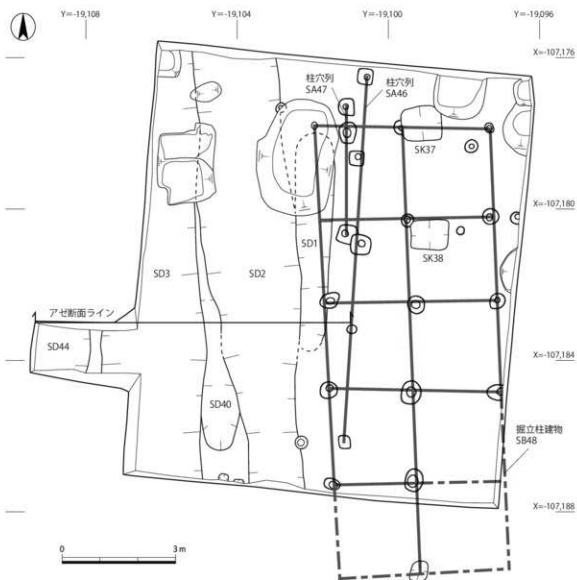


図7 遺構検出平面図(1:100)

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
飛鳥時代	SD1, SD2 下層	
奈良時代～平安時代	SA46, SA47, SB48, SA46, SD3, SD2 上層, SD44 SK37, SK38	

1) 建物・柱穴列

掘立柱建物SB48(図9) 調査区東半で検出した総柱の掘立柱建物である。SP4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・45から成り、北で西に約2度傾いている。規模は梁行5間以上、桁行2間以上で、柱間は梁行が2.4m弱(8尺)、桁行が2.1m強(7尺)程度である。SP45は調査区外に位置し、埋め戻し時に部分的に拡張して確認したものであり、検出にとどめている。

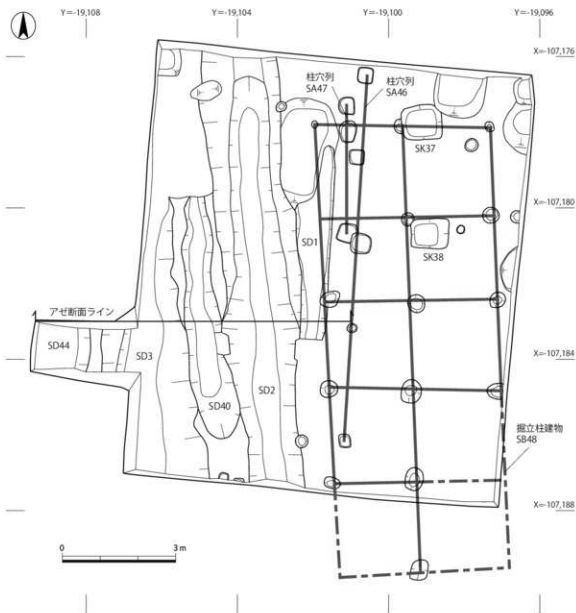


図8 遺構完掘平面図 (1:100)

東側調査区外にも拡張したが、解体建物の影響で遺構面が遺存しておらず、柱穴の有無は確認できなかった。したがって南北両側及び東側にはさらに建物が伸びる可能性がある。柱穴掘方は楕円形を呈するものが多い。遺構検出面は後世の掘削などの影響で凹凸があり、上部を削平されている柱穴も多いと思われ、各柱穴の検出レベル及び深さにはバラつきがあるが、底面レベルは74.6～75.0 m程度となる。南北方向中央列（G列）の柱穴底面がやや深い。削平の影響が大きいSP4を除き、いずれも柱痕を確認できた。埋土にはわずかに土器片を含むが、時期を絞り込むことはできなかった。後述する南北溝（SD2・3・44）は北白川廃寺の西を限るものと推定でき、それに近接したSB48も寺域の区画を意図した施設であろう。

柱穴列SA46・SA47（図10）ともにSB48と重複する位置で検出した南北方向の柱穴列である。柱穴列SA46の方位は正方位で、SP23・25・26から成るが、SP23とSP25は両者間の距離が約0.7

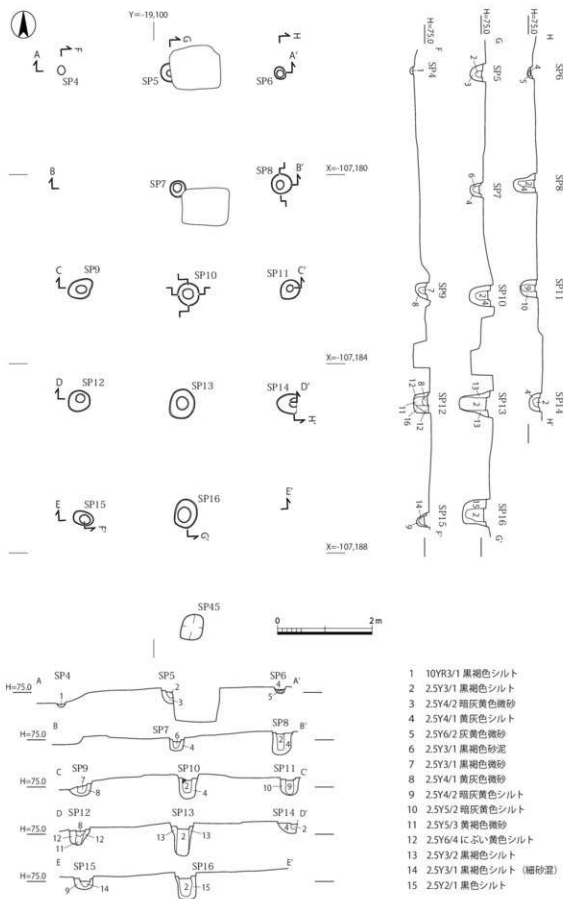


図9 SB48 平面断面図 (1:80)

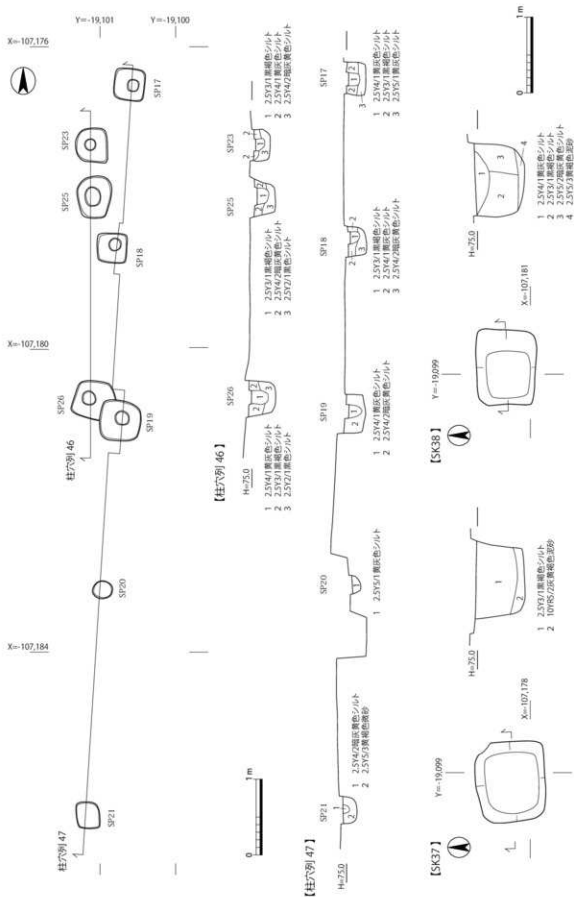


図10 SA46・SA47・SK37・SK38 平面断面図(1:50)

mと近接しており、それぞれが異なる構造物を構成する柱穴である可能性が高い。またSP23とSP26は両者間の距離が3.35mでやや広く、SP25とSP26がセットになると考えている。いずれも柱穴掘方は隅丸方形で、深さは10～16cmである。

柱穴列SA47は北で西に4度振れる。SP17・18・19・20・21から成り、柱間は2.1～2.25m程度である。ただしSP20とSP21の間は3.0mを測り、連続しない可能性もある。掘方は隅丸方形で、SP17・18・19は柱当たりを確認できる。SP17～19は深さ10～15cm、底部レベルは74.9mでほぼ一致する。SP20は試掘坑で上部を削平されており、深さは5cm、SP21は深さ9cmである。

2) 土坑

SK37 (図10) 調査区北東部で検出した南北0.9m、東西1.0mの平面方形の土坑である。検出面からの深度は0.7m、埋土は2層で、下部に灰黄褐色泥砂が堆積する。遺物は細片がわずかに出土した程度で、遺構の性格は不明である。

SK38 (図10) 調査区東部で検出した東西0.8m、南北1.0mの平面方形の土坑である。検出面からの深度は0.7mで、埋土は4層に分かれる。底部には黄褐色泥砂が堆積する。遺物は土師器の細片が1片出土したのみで、遺構の性格は不明である。

3) 溝

SD2 (図11) 調査区西側で検出した南北方向の溝である。北で西に4度傾く。幅は最大約2.5mだが、南側では狭まっており、1.3m程度となる。断面は上部で開く形状で、検出面からの深さは1.15mだが、北側で浅くなり、北壁部分では0.45mとなる。埋土は4層に分かれ、最下層(10層)は基盤層由来のにぶい黄色粗砂を主とし、溝が機能した際の堆積であろう。8層と9層の土質は似通っているが、上層(7・8層)出土遺物と下層(9・10層)出土遺物には時期差があり、下層からは7世紀中葉から後半、上層からは平安時代初頭を下限とする遺物が出土している。上層と下層に形状差があること、後述するSD3の時期比定も含わせ、7世紀後半に一旦埋まったのち、8世紀後半に掘り直された可能性もあろう。埋土には瓦片も含むが、SD3と比較すると少量である。また、上層と下層で大きな組成差は認めなかった。

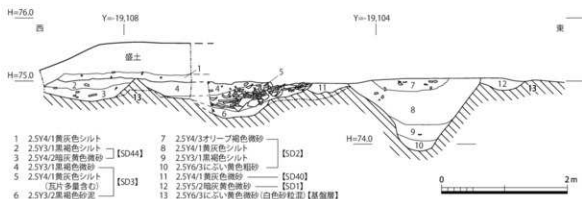


図11 SD1・SD2・SD3・SD44 アゼ断面図(1:60)

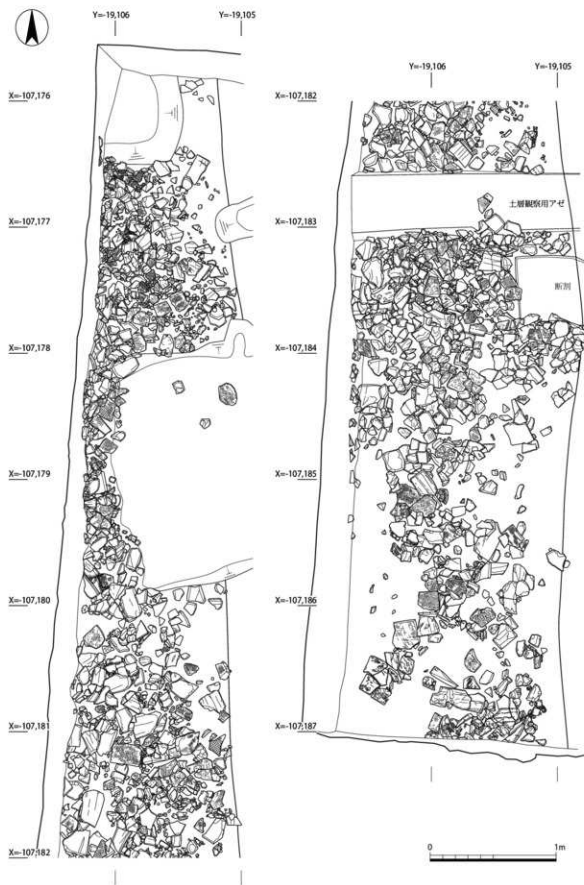


図12 SD3 瓦出土状況平面図 (1 : 30)

SD3 (図11・12) 調査区西端で検出した南北方向の溝である。北で西に1度傾く。西肩は調査区外となるため、拡張区で幅を確認したところ、約2.8mであった。SD2と比べて浅く、検出面からの深さは0.57m、断面は皿形を呈する。埋土は3層に分かれ、中層には多量の瓦が含まれる。瓦は東側から溝内へと堆積しており、東側(寺院内部側)に瓦を用いた施設があったことが推定できる。瓦のほかに、7世紀末から8世紀初頭ごろの須恵器杯蓋などが出土し、墨書されたものも含まれる。この時期はSD2上層と下層、それぞれから出土した遺物の時期の間に位置する。

SD44 (図11) 西側拡張区で検出した溝である。SD2・3と並行した南北方向のものであろう。部分的な検出・掘削にとどまったため、幅については不正確であるが、調査区西端ではわずかに立ち上がっており、1.5m程度と想定する。検出面からの深さは0.35mである。埋土は2層に分かれ、下層は砂質が強くなる。土師器、緑釉陶器など、平安時代前期の遺物が出土しており、この時期に埋没したものであろう。3本の南北溝では最も新しい。

SD40 SD2とSD3に挟まれた位置で検出した溝である。SD2・3に並行する。遺物は出土していないが、両溝に切られていることから、それよりも古い遺構である。埋土は単層で検出面からの深さは0.17mである。

SD1 (図11) 調査区中央部で検出した南北溝である。遺物は出土していないが、SD2に切られることから、これよりも古い遺構である。埋土は単層で、検出面からの深さは0.19mである。

(3) 遺物

今回の調査ではコンテナ90箱分の遺物が出土した(表3)。その大半はSD3から出土した瓦片である。以下、出土遺物の概略を記す。

1) 縄文土器

調査区南東部の北白川廃寺期遺構面を形成する堆積土に包含されていた。図化に耐えられる資料は少なく、2点を報告する。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 総数(箱)	Aランク 箱数(点数)	Bランク 箱数	Cランク 箱数
縄文時代	縄文土器		縄文土器2点		
飛鳥時代	土師器、須恵器、瓦		土師器2点、須恵器7点、 軒丸瓦10点、軒平瓦3点、 面戸瓦1点、道具瓦1点、 丸瓦3点、平瓦21点		
奈良時代～平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、 施釉陶器、瓦		土師器16点、須恵器11点、 黒色土器1点、灰釉陶器1点、 緑釉陶器2点		
	合計	103箱	11箱(81点)	2箱	90箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、A・Bランク遺物を抽出したため、出土時より13箱多くなっている。

1は深鉢の口縁部である。縁部に横位の文様を施す。茶褐色を呈し、胎土には角閃石を多く含む。2は深鉢の底部から立ち上がりにかけての破片である。粗い縄文が認められる。縄文時代後期前葉ごろの所産であろう。

2) 古代の土器・陶磁器

3はSP17から出土した土師器甕の口縁部片である。内面はハケメ調整で、口縁部が肥厚する。

4～22はSD2から出土した。4～11は下層、12～22は上層からの出土である。4は土師器碗である。口縁端部をわずかに外反させる。摩耗しているが、内面は平滑でミガキ調整された可能性が高い。5～8は須恵器杯蓋である。5は杯H蓋で、調整は外面上半は回転ヘラケズリ、下半及び内面は回転ナデである。6～8は杯G蓋で、いずれも口縁部内側にかえりを持ち、頂部まで遺存する7は宝珠形のつまみを有する。9・10は須恵器杯である。9・10は杯Gの口縁部片である。口縁部が緩やかに外反する。11は須恵器鉢の口縁部片で、内湾しながら立ち上がっており、口縁端部は肥厚する。

12～18は土師器である。12・13は口縁端部を肥厚させる皿Aである。14・15は皿Aで外面がヘラケズリ調整である。16は碗Aで口縁端部をわずかに外反させる。17・18は杯Aである。いずれも口縁端部を内側に肥厚させる。17は外面ヘラケズリ調整、18はヨコナデ及び無調整で、内面底部付近にハケメ状の圧痕が残る。19は須恵器鉢の口縁部である。「く」の字状に外側へと屈曲する。胎土は精良だが、やや軟質である。20は須恵器の底部から高台部にかけての破片である。内面底部の中央にのみ自然軸がかかっている。首の狭い長頸壺か。21は須恵器杯の底部片である。底部にヘラ切り痕がみえ、わずかに体部の立ち上がり部分が残る。22は須恵器杯Gである。体部から口縁部にかけて外反する。内面から外面体部にかけて回転ナデ調整を施し、底面は回転ヘラケズリ調整である。

SD2下層出土須恵器は杯蓋の特徴が木野墓窯出土資料⁵⁾に近く、同窯と同時期の7世紀中葉から後半に、上層出土資料は22などが皆越窯跡群出土資料⁶⁾に近く、土師器の形態も合わせて平安時代初期の8世紀末から9世紀初頭に位置付けられる。従って上層・下層の出土資料にはやや年代の開きがある。

23～28はSD3から出土した。23は土師器甕の口縁部である。「く」の字状に外側に屈曲し、端部はわずかに肥厚する。口縁部はヨコナデだが、体部の調整は不明である。24は須恵器杯G蓋である。外面には自然軸がかかる。25は須恵器杯蓋で、かえりがなく、口縁端部を下方に折り曲げる。26・27は須恵器杯の口縁部である。いずれもゆるやかに外反する。28は須恵器杯の底部で外面に「北」という墨書が残る。須恵器杯の口縁部の外反や杯蓋の特徴から、SD3出土資料は中の谷窯跡群出土資料⁷⁾に近く、7世紀末から8世紀初頭ごろの資料と判断する。

29～42はSD44から出土した。29～36は土師器である。29～32は皿Aで、端部が肥厚する。33・34は碗Aないし杯Aである。35・36は甕で、36は外面にハケメ及びユビオサエが残る。37は黒色土器A類碗である。内面は密に磨かれ、外面にも粗いミガキを施す。38・39は須恵器小壺

である。39の底部は回転糸切痕が残る。40は灰釉陶器碗の口縁部である。外反し、口縁端部のわずかに外側まで施釉される。41は緑釉陶器皿の口縁部である。京都産で須恵質を呈する。42は緑釉陶器碗の高台部である。高台は削り出しで成形する京都産で、焼成は軟質、胎土は淡い黄色を呈し、釉薬は薄い。SD44出土資料は、黒色土器碗や施釉陶器を含み、新しい様相を呈する遺物を若干含むものの、主体は平安時代前期の9世紀中葉から後半（2A～B段階）の資料群とみる。

3) 瓦類

43～52は軒丸瓦である。43はSD2上層から出土した素弁十葉蓮華文である。弁の先端中央に

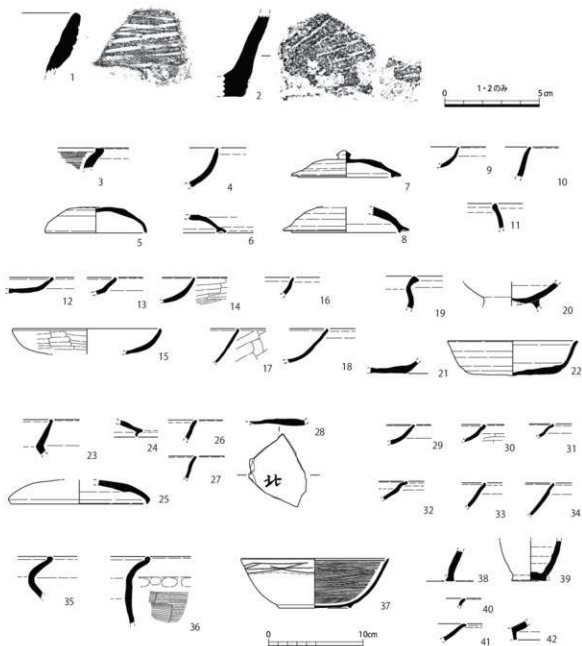


図13 出土土器実測図（1：2、1：4）

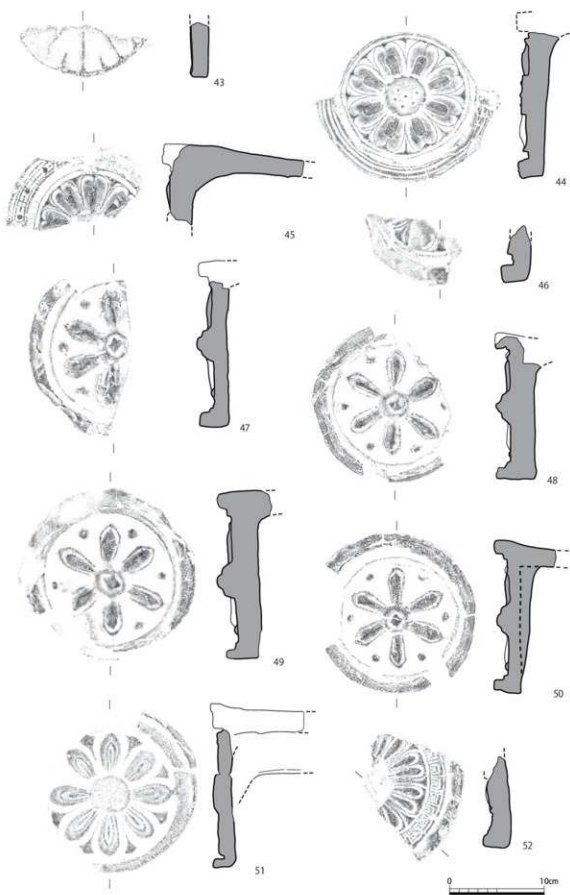


图14 出土軒丸瓦实测图及拓影(1:4)

切り込みを入れ、桜花状とする。焼成は甘く、赤褐色を呈する。調査3で瓦当面がほぼ完存する同文資料が出土している。44は重圈文縁単弁八葉蓮華文で、山田寺式である。この資料は近隣在住者が表採したもので、出土地点は詳らかではない。これまで知られる出土事例は金堂周辺に集まり、塔付近ではほとんど出土していない。45は重機掘削中に出土した単弁八葉蓮華文で、44の文様から派生した文様であり、外縁が重圈文に幅線と珠文を配したものとなる。46はSD44から出土した蓮華文だが、表面が剥離しているため文様の詳細は不明である。断面形状や遺存部分は44に近い。47～50は単弁六葉蓮華文である。中房には高さのある四角形の蓮子を1つ配し、各弁の間に珠文を配置する。47・48は重機掘削中に、49・50はSD3から出土した。51はSD3から出土した重弁八葉蓮華文である。中房は摩耗しており明瞭ではないものの、「*」状幅線文を配する。椋原廃寺から同範瓦が出土している。52はSD3から出土した雷文縁複弁八葉蓮華文である。小山廃寺式で、大宅廃寺から同範瓦が出土している。

53～55はSD3から出土した軒平瓦である。いずれも重弧文であるが、53が六重だと推定できるのに対し、54は四重、55もおそらく四重であろう。54は平瓦部まで遺存しており、凸面に正格子の叩き目、凹面に布目が残る。

56～60もすべてSD3出土資料である。56は通常の丸瓦を半載して面戸瓦としたものか。片側

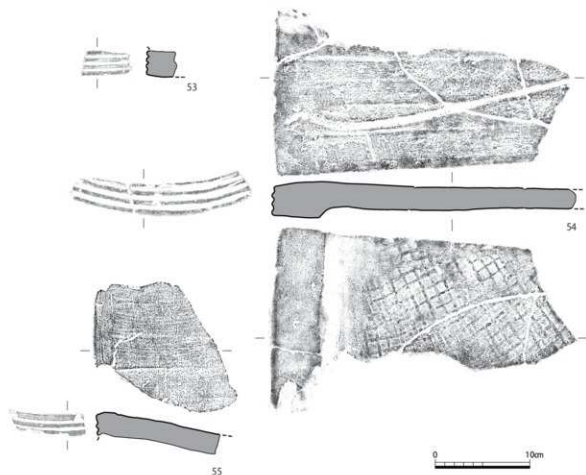


図15 出土軒平瓦実測図及び拓影（1：4）

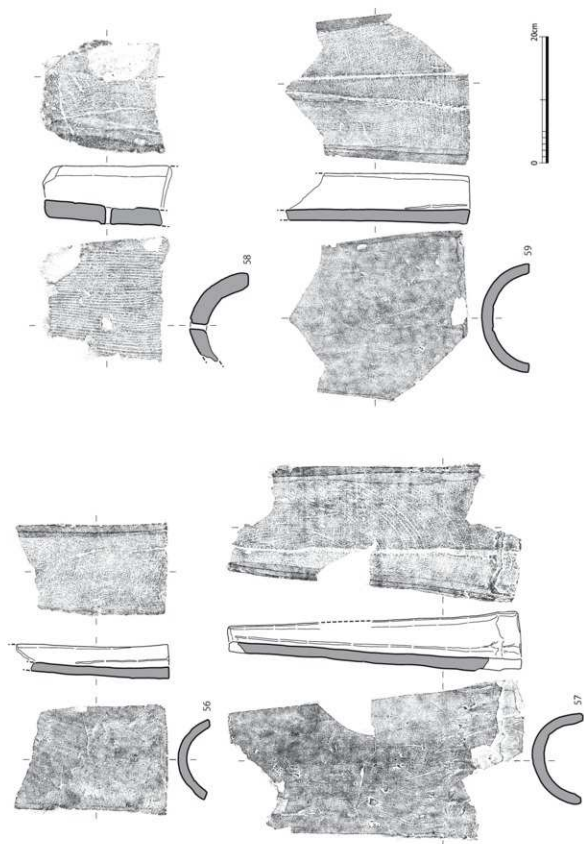


图16 出土瓦実測図及び拓影1（1：6）

は凹面の一部までナデ調整が及ぶが、もう一方は側面際まで布目が及ぶ。凸面も同じ側でナデ痕が看取でき、片側のみが丸瓦とするための調整が完遂されている。57は全長がわかる丸瓦だが、広端側の凹面・凸面両側に剥離痕があり、本来は軒丸瓦で瓦当部が剥落したものと判断できる。凹面には布目及び布の跡と合わせ痕、さらに粘土板を切り出した際の弧線が残る。58は丸瓦狭端部様の資料だが、凸面は平行叩きが顕著で、他の丸瓦よりも厚みがある。中央付近に孔が穿たれており、道具瓦であろう。59は広端部及び両側面が遺存する丸瓦であり、凹面には布目及び布の跡と合わせ痕が残る。60も広端部及び両側面が遺存する。

61～81は平瓦である。すべてSD3から出土した資料である。多様な叩き痕を持つ平瓦が出土している。大多数は凹面に杵板圧痕が確認でき、桶巻作りである。

61は凸面に格子叩き痕が残る。格子は1単位7～10mm四方の正格子で部分的に叩き痕が重複する。凹面には側端部付近に縦方向の指頭圧痕が一条残る。62も凸面に格子叩き痕が残る。格子1単位の大きさは5～7mmほどで61とほぼ同じだが、やや格子目の線が太い。63も格子叩きだが、格子目が斜交する。他の資料よりも叩きが深く及んでいる。64も斜格子の格子叩きで、叩き原体には斜格子に加えて縦方向の平行線も入る。65は格子叩きだが、格子1単位が2～5mm弱の細かいものである。66も同じく細かな格子叩きで、格子1単位はおおむね5mm以下である。両側端が残り、幅は30cmを超える。67も細かい格子叩きで、格子1単位は2～4mm程度である。側面近くのみ格子単位のやや大きい叩き板を用いている。全長が残る資料で、全長43cm程度である

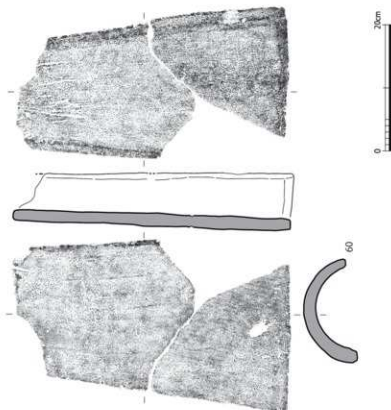


図17 出土丸瓦実測図及び拓影2（1：6）

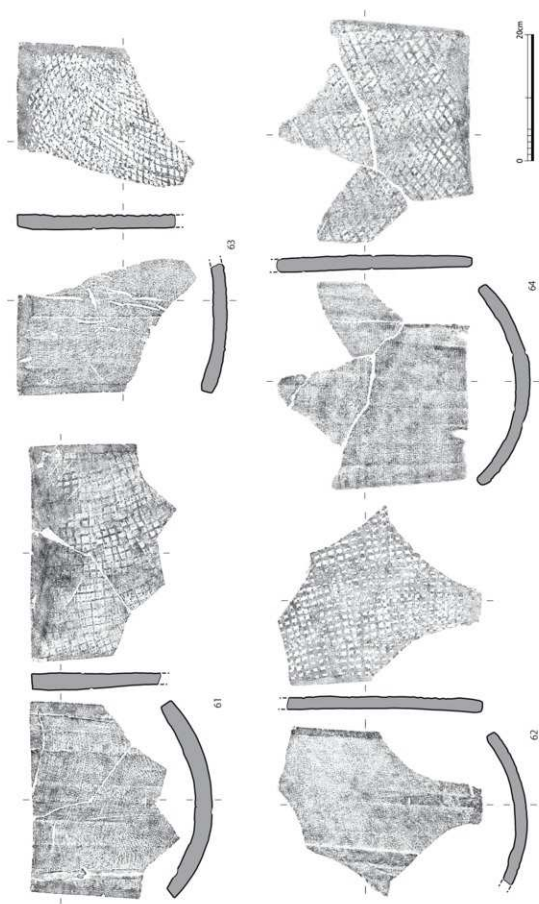


图18 出土平瓦实测图及び拓影1（1：6）

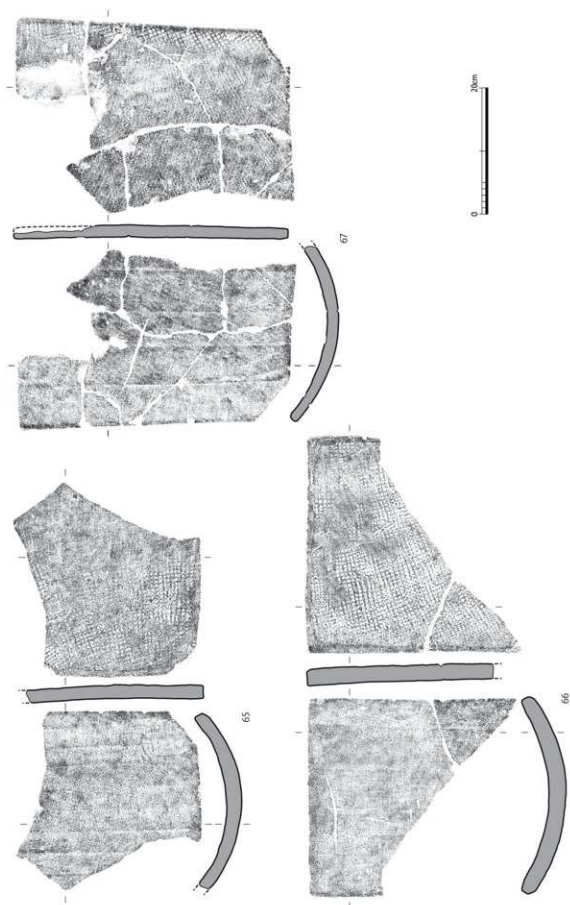


図19 出土平瓦実測図及び拓影2（1：6）

ことが分かる。

68は平行叩きで、条線1単位は幅4.5mm程度と細かい。69も平行叩きで、条線単位の幅は68とほぼ同じだが、原体は異なる。斜交方向で重複させた叩き痕も認める。70も平行叩きだが、条線1単位の幅は8～9mm程度で68・69よりも太い。

71～73は複合X字叩きである。71は格子叩きが一部に残り、格子叩きの後に複合X字叩きを施していることがわかる。72・73は原体が同じと考えられ、かつ71とは異なる。いずれも2辺が遺存し、72がやや厚い。

74～76はW字（鋸歯文）状叩きである。74は重複した叩き痕を認める。凹面には布目の上から施したナデ痕が複数条残っている。75は1単位2～3mm程度の細かな格子叩きの後に、74よりも細いW字状叩きを施している。76は狭端部及び両側面が遺存している。叩き痕は側面近くで重複する。

77は幾何学文の叩き痕を持つ。叩き痕は全て同じ方向を向く。狭端面には靱殻痕が残る。78は同心円と鋸歯文を組み合わせる日輪様の幾何学文叩きである。叩きは互いに重複し、広端側及び遺

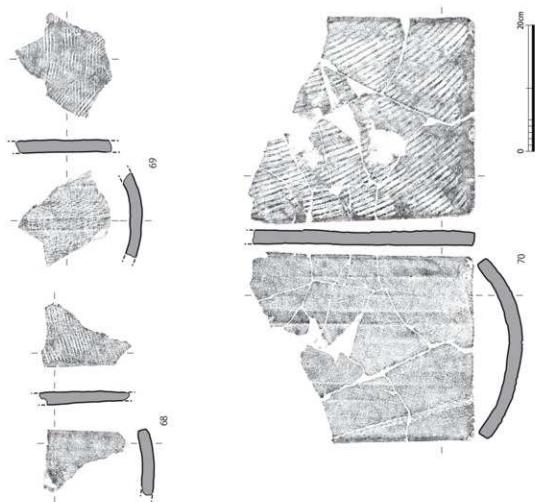


図20 出土平瓦実測図及び拓影3（1：6）

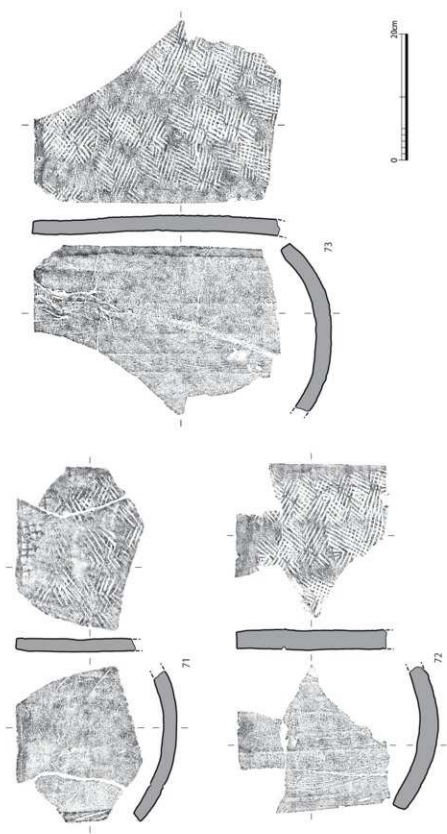


図21 出土平瓦実測図及び拓影 4 (1:6)

存していない方の側面側の叩きが後から施される。79は弧線と幅線を組み合わせた幾何学文叩きである。

80は縄叩き痕が残る。縄叩きの資料は一定数あるものの、他の叩きと比べて小破片が多い。81は凸面に縄叩き痕及び線描きがある。線描きは格子目を成すが、その意図は不明である。

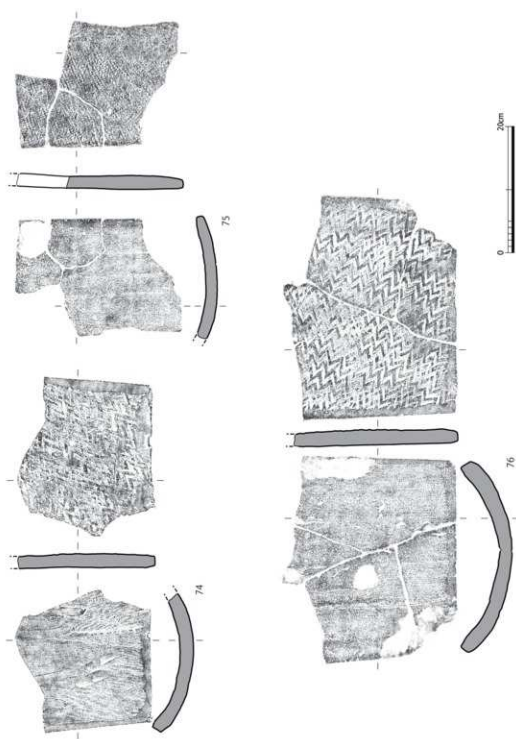


図22 出土平瓦実測図及び拓影5（1：6）

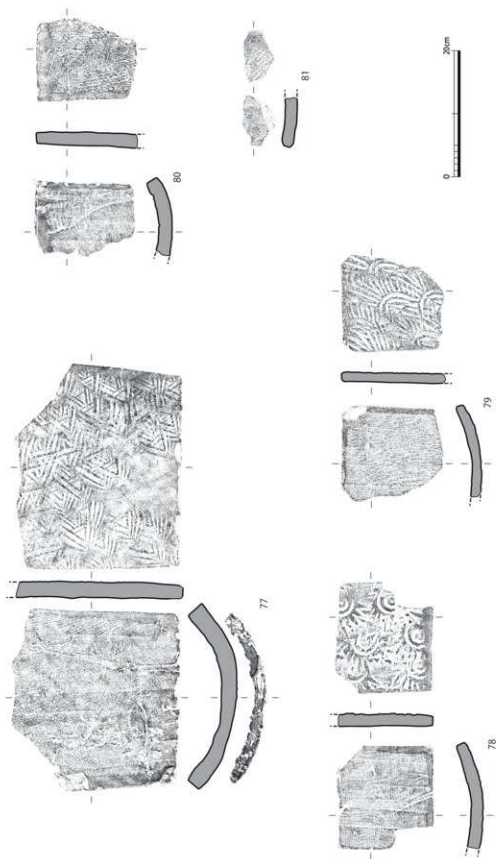


図23 出土平瓦実測図及び拓影6（1：4）

4. まとめ

(1) 出土瓦について

今回の調査では特にSD3から多量の瓦が出土した。とりわけ平瓦の出土量が膨大で、その中には従来から知られてきた特殊な叩き原体を用いたものも多く含まれている。北白川廃寺出土の平瓦をめぐっては、網伸也が東方基壇（金堂）周辺出土平瓦と塔跡周辺出土平瓦の叩きを分類し、それぞれの破片を計数することで、東方基壇の造営が塔の造営に若干先行することを明らかにした⁸³。この成果との比較材料とするため、今回の調査で出土した平瓦も網の手法を踏襲して破片を計数した。なお、網の論文には多少の問題点がある。平瓦の叩きを合わせて12種類に分類しているが、このうち「K-C型式」及び「T-B型式」について、拓本、模式図などが掲載されておらず、文章中で言及もないことから、どの叩きを該当させるのが判断できない。また、複数種類の叩きを同一個体に重複して施す例があることが示されているが、これを計数上どのように処理したのかは書かれておらず不明である。なお、叩きの分類について、網は「型式」という語を用いたが、1つの分類の中に相当程度の幅を認めることから、「型式」の語を用いることにためらいを覚える。以下、ここでは「型式」を「類」に置き換える。まずT-B類については、網の計数した6・7次調査出土2,909片のうち1点しか存在していなかったため、今回の計数では分類から省いた。どこにも分類できない資料は「その他」に計上している。K-C類については、網の計数で356片が計上されており、無視できるものではない。網は格子目叩きを「K型式」とし、「K-C型式」はこれを細分したうちのひとつである。今回出土した格子叩きのうち、網論文掲載の拓本になかった格子の1単位が5mm以下の細格子をK-C類に当てた。

紙幅の都合上、改めて分類図を示すことはしないが、今回の報告資料に対応させると、各分類は下記の通りとなる。

K-A類（正格子）：61・62	／	K-B類（斜格子）：63・64
【K-C類（細格子）】：65・66・67	／	H-A類（平行〈太〉）：70
H-B類（平行〈細〉）：68・69	／	T-A類（複合X字）：71・72・73
T-C類（W字状）：74・75・76	／	T-D類（幾何学文）：77・78・79
N-A類（縄叩き〈桶巻〉）：80	／	N-E類（縄叩き〈一枚造〉）
N類（縄叩き〈不明〉）	／	その他：81

複数種の叩きが1個体に重複する場合、便宜上以下のように計上ルールを定めた。K類とT類が重複した場合はT類として計上、H類とK類が重複した場合はH類として計上、H類とT類が重複した場合はT類として計上した。

SD3出土平瓦の破片数は全部で4,363片であった。分類ごとの点数と比率は表4の通りである。参考として網論文掲載の第「5」次調査⁸⁴（調査13・東方基壇）、第「6・7」次調査（調査4・9

／塔周辺」の破片数も表4にあげた。今回の出土資料はH類、T類を相当数含んでおり、これは東方基壇周辺で出土した平瓦とは明確に異なる。今次調査出土瓦は塔の造営と同時期に生産、持ち込まれたものであろう。塔周辺出土瓦の数値と比較した場合、今次調査ではK類の比率が高く、H類の比率が低く、T類の比率が高く、N類の比率が低い、という結果となった。今回の数値からどのような解釈を導くかは今後の課題とし、まずは数値の提示にとどめておく。出土した瓦が北白川廃寺内のどのような施設に由来するのか、どのような過程で埋没するに至ったのかを理解することがまずは重要であり、数字もその過程で意味を持つものにならう。なおSD2、SD44出土平瓦も同

表4 出土瓦破片数一覧

遺構		SD2	SD44	SD3	第「5」次 (註8文獻より)	第「6・7」次 (註8文獻より)
分類	遺構	SD2	SD44	SD3	第「5」次 (註8文獻より)	第「6・7」次 (註8文獻より)
	遺構	SD2	SD44	SD3	第「5」次 (註8文獻より)	第「6・7」次 (註8文獻より)
平瓦	丸瓦	50 【26.6%】	12 【18.8%】	1,034 【19.2%】		
	K-A	34 (24.6%)	5 (9.6%)	1,297 (29.7%)	63 (1.5%)	472 (16.2%)
	K-B	10 (7.2%)	0 (0.0%)	482 (11.0%)	5 (0.1%)	36 (1.2%)
	【K-C】	4 (2.9%)	2 (3.8%)	656 (15.0%)		356 (12.2%)
	H-A	4 (2.9%)	1 (1.9%)	93 (2.1%)		217 (7.5%)
	H-B	3 (2.2%)	1 (1.9%)	62 (1.4%)		470 (16.2%)
	H-C	2 (1.4%)	1 (1.9%)	1 (0.02%)		46 (1.6%)
	T-A	8 (5.8%)	4 (7.7%)	257 (5.9%)	4 (0.1%)	70 (2.4%)
	【T-B】					1 (0.1%)
	T-C	7 (5.1%)	6 (11.5%)	215 (4.9%)		21 (0.7%)
	T-D	34 (24.6%)	11 (21.2%)	232 (5.3%)		55 (1.9%)
	N-A	2 (1.4%)	9 (17.3%)	137 (3.1%)	1,252 (30.5%)	104 (3.6%)
	N-E	0 (0.0%)	1 (1.9%)	0 (0.0%)	799 (19.5%)	405 (13.9%)
	N	4 (2.9%)	2 (3.8%)	131 (3.0%)	1,228 (30.0%)	292 (10.0%)
	その他	0 (0.0%)	1 (1.9%)	40 (0.9%)		
	不明	26 (18.8%)	8 (15.4%)	760 (17.4%)	751 (18.3%)	364 (12.5%)
	平瓦計	138 (100.0%)	52 (100.0%)	4,363 (100.0%)	4,102 (100.0%)	2,909 (100.0%)

※ 数値は破片数及び遺構内における比率である。

※ 丸瓦の比率は総破片数に占めるもの、平瓦の比率は平瓦の破片数に占めるものである。

※ 【K-C】類は今回再定義したため、網論文の指すものとは一致しない可能性がある。

※ 各分類の比率は四捨五入しているため、比率の和は100にならない。

様に計数したため、表に提示する。また、丸瓦の破片数も数え、丸瓦・平瓦の総破片数に占める比率を出したため、合わせて示しておく。

(2) 西端の溝

今回の調査区内では合わせて3本の溝を検出した。検出位置、地形から北白川廃寺の西を限る溝だと解釈している。出土土器からその機能・埋没の時期及び順序については、SD2下層(7世紀中葉～後半)→SD3(7世紀末～8世紀初頭)→SD2上層(奈良時代末～平安時代初期)→SD44(平安時代前期)と考えた。ここで問題となるのはSD3から多量の瓦が出土したことである。北白川廃寺が存続中の8世紀前半に瓦を多量に廃棄していることになる。『続日本紀』に「山背國部内諸寺浮圖經年稍久、破壊処多、詔遣使咸加修理焉」(延暦十年四月十八日条)とあり、この年(791)に山背国内の寺院の塔を補修したことが記される。北白川廃寺の塔もこの時に修造されたと考えられているが、それ以前に多量の瓦が廃棄される事態が出来ていたのかもしれない。これも今回出土した瓦が北白川廃寺内のどのような施設で用いられていたのかによって、解釈が異なってくる。今回調査区は塔基壇検出地点から50m程度西に位置しており、ここに複数の施設を配置する余地は十分にある。今後の調査が待たれる。

北白川廃寺が発見された昭和9年から90年を経ても、北白川廃寺の伽藍はなお謎が多い。住宅街となった現在においては、小規模な調査を積み重ねていくことが解明への一番の近道である。

現地調査に際しては、下記の方々から御指導・御助言を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

網伸也、諫早直人、伊藤淳史、上原真人、笹川尚紀、千葉豊、中島正、菱田哲郎、堀内寛昭、向井佑介、吉井秀夫(所属・敬称略、五十音順)

(新田 和央)

註

- 1) 「Ⅵ 試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告』令和4年度、京都市文化市民局、2023年。
- 2) 梅原末治「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査報告』第五冊、京都府、1923年。
- 3) 梅原末治「京都市北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十六冊、京都府、1935年。
- 4) 網伸也「北白川廃寺の伽藍復元-最近の発掘調査成果による-」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会、1993年。
堀大輔『飛鳥・白鳳の聲-京都市の古代寺院-』京都市文化財ブックス第24集、2010年。
- 5) 宮本康治「須恵器」『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会、1992年。
宮本康治「須恵器の編年と技術的検討」『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会、1992年。
鈴木久史・西森正晃・清水早織「Ⅲ-2 木野墓窯跡(19A002)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告』

令和4年度』、京都市文化市民局、2020年。

- 6) 宮本康治「須恵器」『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会、1992年。

宮本康治「須恵器の編年と技術的検討」『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会、1992年。

- 7) 註6に同じ。

- 8) 網伸也「北白川廃寺の造営過程―北山背古代寺院の考古学的考察―」『古代』第97号、早稲田大学考古学会、1994年。

- 9) 報告書では第6次とされており、網論文とは回数に1つずつのズレが生じる。同様に第6・7次調査についても1次ずつズレている。

V 山科本願寺南殿跡

1. 調査の経緯と経過

調査地は、山科区音羽伊勢宿町32-53に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「山科本願寺南殿跡」に該当する。当地において個人住宅建設の計画がなされ、令和6年3月18日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該地は山科本願寺南殿跡の外郭内で内郭の南側に推定される地点にあたる。東隣では平成18年度に発掘調査が行われており、江戸時代以降の東西溝や土坑、山科本願寺南殿に関連する室町時代後期の溝や建物跡などを確認している。当課は、今回の調査地においても同等の遺構が展開している可能性が高いことから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、調査を実施することになった。調査は令和6年4月3日から4月25日まで行った。調査面積は30㎡である。

2. 遺跡の環境

(1) 立地と歴史的環境

山科盆地は京都盆地の東側に位置し、東・北・西の三方が山地に囲まれている。盆地北東部から中央部にかけて音羽川・四ノ宮川・安祥寺川が流れ、緩やかな複合扇状地を形成し、西側は沖積低

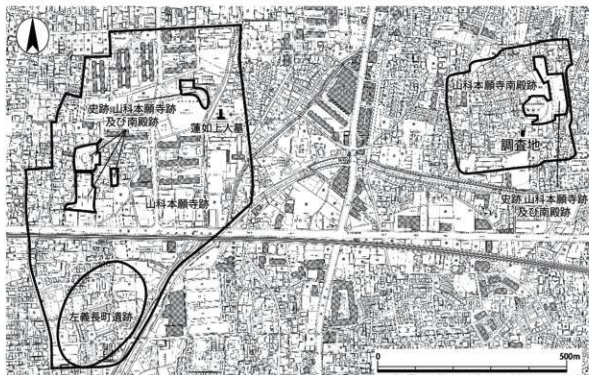


図1 調査位置図 (1:10,000)



図2 調査前風景（南西から）



図3 作業風景（南から）

地が広がる。山科本願寺南殿跡は、盆地東側の扇状地に位置する。

山科盆地は東海道や東山道が通るなど交通要所で、古くから土地利用がされてきた。

長禄元年（1457）に本願寺第八代宗主となった蓮如が文明3年（1471）に越前吉崎で布教活動を行い、畿内に戻った後も河内国出口を中心に布教をする。その後本願寺再興の地として山科を選定し、文明10年（1478）から山科本願寺の造営を開始する。山科本願寺は主要堂舎を擁する「御本寺」を中心にその周りに寺内町が形成され、それぞれが土塁や堀で囲まれた寺院である。延徳元年（1489）に寺務を息子の実如

に譲り、そこから東に約1 km（現在の音羽伊勢宿町周辺）の地に隠居場所として山科本願寺南殿を造営する。本願寺本体と同様に土塁と堀で囲まれ、中心域に築山や苑池などの庭園が築かれる。天文元年（1532）に山科本願寺とともに焼失し、その跡地には光称寺（現在の光照寺）が建てられ現在に至る。光照寺境内には現在でも土塁と堀、庭園遺構が残されている。また、南殿の様子を記した『御在世山水御亭図』（図5）の絵図には、持仏堂・山水亭と園池、台所・井戸などがある内郭、それを土塁と堀で囲むように外郭が描かれている。

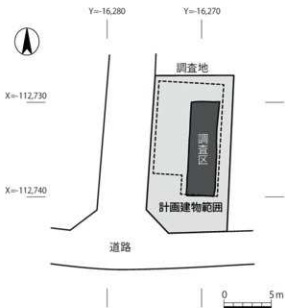


図4 調査区配置図（1：400）

（2）周辺の調査

山科本願寺南殿跡では、これまでに数多くの発掘調査などを実施している。図6及び表1には、遺跡範囲と、発掘調査及び本調査地近郊の試掘調査を示した。

光照寺の東側で行われた平成14年度調査（図6-1）では、山科本願寺南殿に関する土塁や堀などが確認され、現在国史跡に指定されている。ほかに調査地北西側で行われた平成27・28年度の

調査(図6-4・5)では、山科本願寺南殿の内郭に関連する堀や土塁などを検出するなど、山科本願寺南殿の様相が少しずつ明らかになってきた。

調査地東隣で行われた平成18年度調査(図6-2)で、室町時代後期の溝や建物跡、拳大の川原石を含む土坑などが確認され、山科本願寺南殿に関する遺構と考えられる。江戸時代以降の東西溝や土坑も検出し、溝は農業用の水路跡とされている。そのほかの発掘調査でも、室町時代から江戸時代の遺構・遺物などを確認している。また、調査地西側では令和2年度に試掘調査(図6-10)を実施しており、室町時代後期～江戸時代の土坑や柱穴などを検出している。

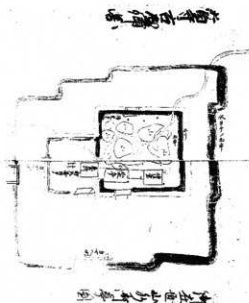


図5 『御在世山水御亭図』
(光願寺所蔵・上が北)



図6 周辺調査位置図(1:2,500)

表1 周辺調査一覧

調査番号	調査区分	調査概要	文献
1	発掘	室町時代後期の山科本願寺南殿跡に関連する堀・土塁など、江戸時代の土坑・溝などを確認。国史跡として指定。	出口勲「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局、2003年。
2	発掘	室町時代後期の溝・建物跡・土坑など、江戸時代以降の溝や土坑を確認。	平田泰「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局、2007年。
3	発掘	室町時代後期のピット・柱穴・土坑など、江戸時代のピット・土坑・溝などを確認。	布川豊治「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局、2014年。
4	発掘	室町時代～江戸時代の溝や礎石を確認。	赤松佳奈「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局、2016年。
5	発掘	平安時代末～鎌倉時代の柱穴、室町時代～江戸時代の上屋・堀を確認。	赤松佳奈「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局、2017年。
6	発掘	6次調査では室町時代の溝、7次調査では室町時代の溝・ピットや江戸時代以降の溝を確認。	黒須重希子・廣富亮太「山科本願寺南殿跡（6～8次）」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局、2020年。
7	発掘	室町時代の土坑、江戸時代以降の土坑や落込みなどを確認。	黒須重希子「山科本願寺南殿跡（第9次・第10次）」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和3年度』京都市文化市民局、2022年。
9	発掘	戦国時代～安土桃山時代の土坑・ピット、江戸時代前期の溝を確認。	新田和央「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和4年度』京都市文化市民局、2023年。
10	試掘	室町時代後期～江戸時代の土坑や柱穴を確認。	清水早織「山科本願寺南殿跡 No.19(20S648)」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和3年度』京都市文化市民局、2022年。

※調査番号は、図6と対応。

3. 調査成果

(1) 基本層序

現地表面は標高約58.4mとほぼ平坦で、南端は東西道路に向かって一段下がる。基本層序は盛土以下、-0.55mで明黄褐色シルトの耕作土、-0.65mで黒褐色粘質土及び黒褐色粘質土混じり黄褐色粘質土の整地層、-0.85mで灰黄褐色礫混じり粘質土及び褐色粘質土の基盤層となる。

整地層上面を第1面、基盤層上面を第2面として調査を実施した。遺構面は、それぞれ北から南に向かって緩やかに傾斜する。

(2) 遺構

第1面の整地層上面で溝やピット、第2面の基盤層上面で溝やピットなどを検出した。以下、主な遺構について説明していく。

1) 室町時代～江戸時代（第2面）

灰黄褐色礫混じり粘質土及び褐色粘質土の基盤層上面で、溝や土坑、ピット、集石を検出した。ピットは複数基確認したが、建物などの復元はできなかった。また、遺構から遺物はほとんど出土

【東壁】

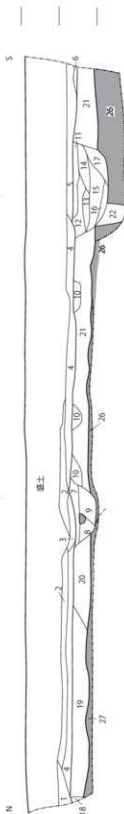
H=58.5m

H=58.0m

H=57.5m

X=112.734

X=112.738



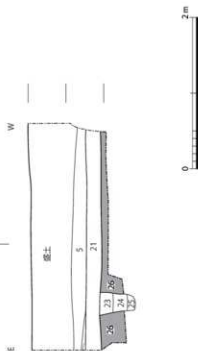
【南壁】

H=58.5m

H=58.0m

H=57.5m

Y=162.270



- 1 5Y4/1 灰色小礫～中礫混じり砂質土(礫少量を含む)
 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色微細混じり砂質土(礫少量を含む)
 3 2.5Y7/4 淡黄色砂質土
 4 2.5Y6/6 黄褐色シルト【耕作土】
 5 2.5Y4/1 灰色小礫混じり砂質土(ガラス片含む)
 6 10Y8/2 にぶい黄褐色砂質土
 7 10Y8/3 にぶい黄褐色砂質土
 8 2.5Y8/3 にぶい褐色砂質土
 9 7.5Y8/2 灰褐色微細混じり砂質土
 10 2.5Y6/4 にぶい黄色小礫混じり砂質土(礫少量含む)
 11 10Y8/3 にぶい黄褐色砂質土
 12 10Y8/4 にぶい黄褐色砂質土
 13 10Y8/1 褐色砂質土(礫少量含む)
 14 10Y8/2 灰褐色砂質土
 15 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土(礫まじり多い)
 16 2.5Y4/1 灰色小礫混じり砂質土
 17 5Y2/1 オリーブ褐色微細混じり砂質土
 18 2.5Y3/1 黄褐色小礫混じり砂質土(礫少量含む)【SD4】
 19 10Y8/3/1 黄褐色微細混じり砂質土
 20 10Y8/3/1 黄褐色粘質土
 21 10Y8/3/1 黄褐色粘質土混じり2.5Y5/6 黄褐色砂質土
 22 10Y8/3/1 黄褐色粘質土
 23 10Y8/3/1 黄褐色粘質土
 24 5Y2/1 オリーブ黄褐色粘質土(木の堀入り)
 25 10Y8/3 にぶい黄褐色粘質土
 26 10Y8/3/1 黄褐色微細混じり砂質土(礫まじり多い)
 27 10Y8/4 褐色粘質土(礫少量を含む、礫まじり多い)【礫多層】

図7 調査区断面図(1:50)

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代～江戸時代	溝、土坑、ピット、集石	
江戸時代以降	溝、ピット	

しなかったため明確な時期は不明であるが、周辺の調査などを踏まえると室町時代～江戸時代の遺構面とみられる。

SD35 調査区南東側で検出した溝である。東から南に向かって逆L字状に曲がる。検出長約2.4 m、幅0.3～0.4 m、深さ0.35～0.45 mで、両端が調査区外へのびている。底の標高は東側で約55.2 m、南側で約55.1 mと、南側に向かって緩やかに傾斜する。埋土は上層から褐灰色～暗褐色粘質土、オリブ黒色粘質土、にぶい黄橙色粘質土である。平成18年度調査の室町時代後期の溝とつながる可能性があり、山科本願寺南殿に関する溝と考えられる(図10)。

SX37(図9) 調査区南側で検出した集石である。長軸が約40 cm大1石と約20 cm大1石を密接するように据え、その北側には、10～20 cm大の石が4石置かれた状況を確認した。掘方は確認できなかった。用途などは不明である。

SX38(図9) 調査区北側で検出した集石である。東西約1.5 m、南北約2.1 mの不定形で、深さ約0.2 mである。5～20 cm大の石と、にぶい黄褐色礫混じり粘質土が入り混じっている状況を確認した。凹みを埋める整地とみられる。

SK21 調査区北東側で検出した土坑である。東西約0.7 m、南北約0.5 mの楕円形で、深さ約0.2 mである。約20 cm大の石が3石入っているのを確認した。埋土は黒褐色砂泥である。

SK24(図9) 調査区中央西側で検出した土坑である。東西約0.6 m、南北約0.8 mの楕円形で、深さ約0.2 mである。10～20 cm大の石と暗褐色礫混じり粘質土が入り混じっている状況を確認した。平安時代以前の土師器の細片が出土した。混入したものとみられる。

SK29 調査区南側で検出した土坑である。東西約0.3 m、南北約0.7 mの楕円形で、深さ約0.2 mである。南側が円形状に約0.4 m深くなり、柱穴の可能性も考えられる。

SP25(図9) 調査区中央西端で検出したピットである。東半のみの検出であるが約0.4 mの円形状とみられる。深さは約0.35 mで、埋土は暗灰黄色粘質土である。中央には埋土が灰黄褐色粘質土の径約0.2 mの穴を確認した。杭の痕跡と考えられる。

SP34 調査区南東側で検出したピットである。南半は第1面SD2に切られ、北半のみ残存していた。東西約0.5 m、南北0.3 m以上の半円形で深さ約0.2 mを検出した。埋土は黒褐色砂泥である。

SP36 調査区南西側で検出したピットである。第1面SD2により削平されていた。約0.4 mの円形で、検出面からの深さは約0.1 mである。埋土は黒褐色砂泥である。

2) 江戸時代以降(第1面)

黒褐色粘質土及び黒褐色粘質土混じり黄褐色粘質土の整地層上面で、溝やピットを検出した。江

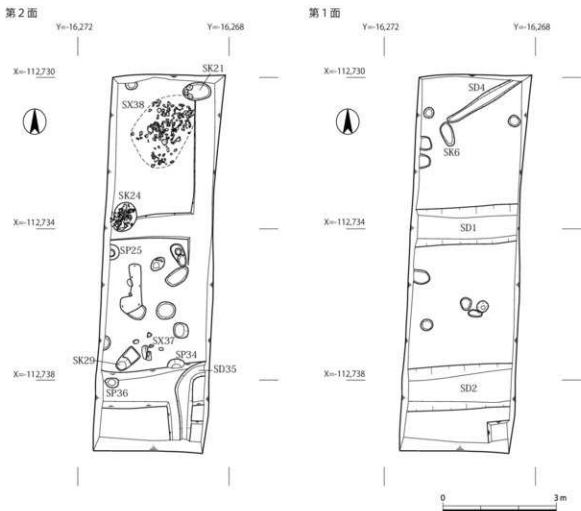


図8 調査区平面図（1：100）

戸時代以降の遺構面である。遺物は土師器や染付などが出土している。

SD1 調査区北側で検出した東西方向の溝である。検出長約2.6m、幅約1.0m、深さ約0.35mで、東西の調査区外へ続く。主軸は西で南に3°振り、底面は東から西に向かって緩やかに傾斜する。埋土は上層がにぶい黄褐色砂質土、下層がにぶい褐色砂質土や灰褐色礫混じり砂質土である。土師器や陶器、染付、瓦などが出土した。

SD2 調査区南側で検出した東西方向の溝である。検出長約2.7m、幅約1.2m、深さ約0.45mで、東西の調査区外へ続く。主軸は西で南に3°振り、底面は東から西に向かって緩やかに傾斜する。埋土は上層がにぶい黄褐色砂質土や灰黄褐色砂質土、下層がオリブ褐色粘質土や黄灰色粘質土などである。土師器や陶器が出土した。

SD4 調査区北東角で検出した北東から南西方向の溝である。検出長約2.2m、幅約0.3m、深さ約0.2mで、北東側は調査区外へのびる。埋土は黒褐色小礫混じり砂質土である。耕作に伴う溝の可能性がある。

SK6 調査区南側で検出した土坑である。東西約0.6m、幅約0.3m、深さ約0.1mである。埋土はオリブ褐色粘質土である。

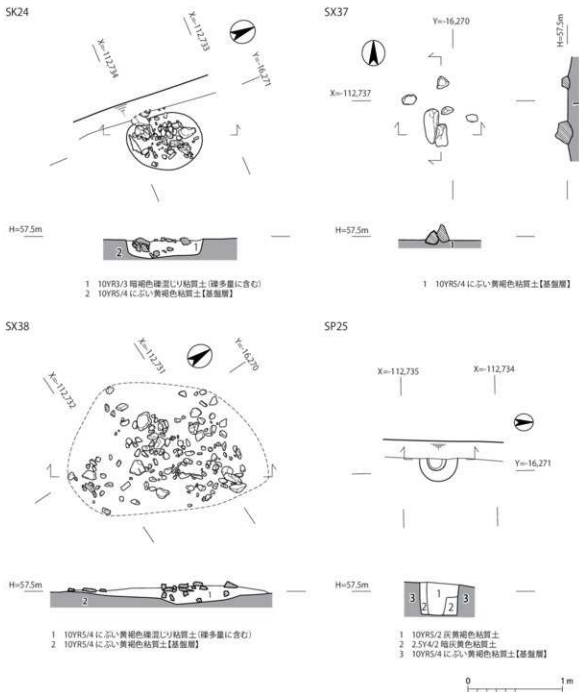


図9 第2面SK24・SX37・SX38・SP25 平面断面図 (1:40)

(3) 遺物

コンテナ1箱分の遺物が出土した。平安時代以前の土師器や須恵器、江戸時代の土師器、陶器、磁器、瓦などがある。第1面SD1では土師器皿や染付、棧瓦、第1面SD2では土師器や陶器など、江戸時代の遺物がほとんどであった。黒褐色粘質土の整地層の埋土からは、平安時代以前の土師器などを少量であるが確認することができた。しかし、遺物が全て細片であり、図化することができなかった。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 総数 (箱)	A ランク 箱数 (点数)	B ランク 箱数	C ランク 箱数
平安時代以前	土師器、須恵器	1箱			
江戸時代	土師器、緑釉陶器、焼締陶器、磁器、染付、瓦				
	合計	1箱	0箱 (0点)	0箱	1箱

4. まとめ

今回の調査では、第1面で江戸時代以降の溝やピット、第2面で室町時代～江戸時代の溝やピット、集石などを検出した。第1面のSD1・2及び第2面のSD35は、それぞれ東側の調査区外へと続く。東隣の平成18年度調査では、室町時代後期の南から北西にのびて西にL字状に曲がる溝(第2面SD12)、江戸時代以降の東西方向の溝(第1面SD7・8)を確認している。今回の調査と平成18年度調査の位置関係を図10に示した。

第2面SD35は、東延長上に平成18年度調査の第2面SD12があり、同一の溝とみられる。調査地が山科本願寺南殿跡復元案の外郭内及び内部の南側に位置し、現存する土塁や堀が西で南に約

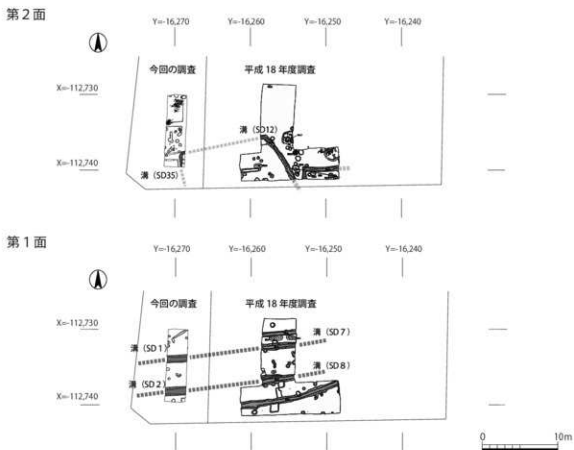


図10 平成18年度調査との位置関係 (1:500)

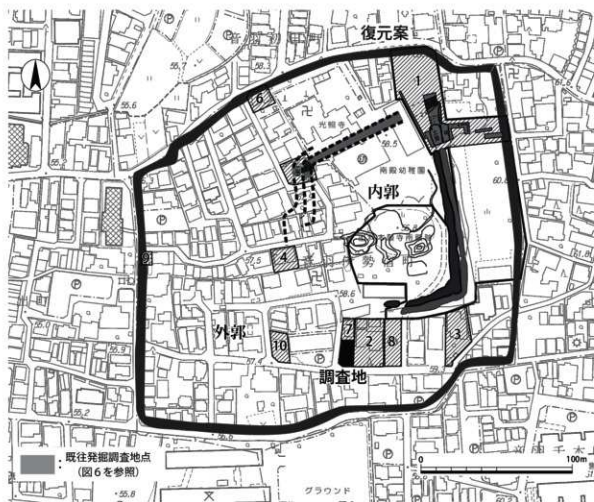


図11 山科本願寺南殿跡復元図¹⁾ (1:2,500)

10° 振り (図11)、溝も同様の傾きを持つことなどを踏まえると山科本願寺南殿に関する何らかの区画溝の可能性がある。第1面のSD1・2は、東延長上に平成18年度調査第1面のSD7・8があり、北東から南西に向かって緩やかに傾斜する溝が続いていることがわかり、西側の調査区外へと続くことも確認できた。そのほかに今回の調査では平安時代以前の遺物が少量ながら出土しており、この地において山科本願寺南殿が建立される以前から土地利用がされていたと考えられる。今後、山科本願寺南殿跡での調査が進むことによって、この周辺一帯の状況が明らかになることを期待したい。

(八軒かほり)

註

- 1) 新田和央「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和4年度』京都市文化市民局、2023年の図11を元に改変。

参考文献

山科本願寺・寺内町研究会編『戦国の寺・城・まち - 山科本願寺と寺内町 - 』法蔵館 1998年。

Ⅵ 石見城跡、大原野石見遺跡、 長岡京右京一条四坊十五町跡（右京第1283次）

1. 調査の経緯と経過

（1）調査に至る経緯

石見城跡は、西京区大原野石見町内に存在する中世の平城跡である（図1）。桂川・小畑川の流域には中世の在地土豪が築いたとされる城館の推定地が多数残されており、石見城跡もその一つとされている。在地土豪の一人であった野田泰忠が、応仁の乱の戦果を記した『野田彈正忠泰忠軍忠状』には、文明2年（1470）に「石見館」を焼いたとする記述があり、これが現在、埋蔵文化財包蔵地である石見城跡に比定されている¹⁾。当地には、城の土塁や堀を想起させるような凹凸が地表に現れており、早くから城館跡として目されていた²⁾。

平成16年（2004）、微高地の西側で道路建設に先立つ発掘調査が行われ、鎌倉時代から室町時代の遺構群が多数発見された。これらは東へ広がる様相をみせること、また検出された室町時代の建物の主軸が北東に位置する段丘崖のラインと重なることから、同時期の遺構群が連続して広がる可能性が示された〔埋文研2005〕。

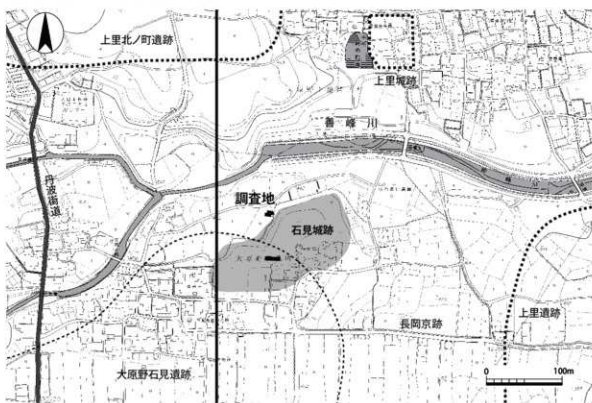


図1 調査位置図（1：5,000）

令和2年(2020)度、当課は石見町の現集落及びその周辺を対象として航空レーザー測量を行い、微地形の詳細把握を試みた。その結果、地表面の細かい凹凸が明確に映し出され、これらが人為的な造作である可能性が一層濃厚となった。このため、当課は文化庁及び京都府と協議を行い、5箇年に及ぶ遺跡保存を目的とした範囲確認調査を計画した。

令和3年(2021)度、土地所有者の協力を得て、発掘調査に着手した(第1次調査)。その結果、微高地の北西隅において、鎌倉時代・室町時代の堀跡を検出した。これにより、当該地に中世の城館跡が残存することが極めて濃厚となった。続く令和4年度には、微高地の縁辺部3箇所において発掘調査を行い、同じく鎌倉時代・室町時代の土塁と堀跡、居住域を確認した。これにより、段丘崖に面した一帯に城館とみられる遺構群が残されていること、また現存する地表面の凹凸がその遺構を投影するものであることが確認された。

続く令和5年度の調査では、石見城跡が段丘崖の下(北側)へも広がるか否かを確認すること、また集落と城館の境界を把握することを目的として発掘調査を実施した。本文では、この成果の概要を報告する³⁾。

(2) 調査の経過と調査方法

現地調査は、令和5年11月6日～12月15日のうち27日間実施した。作業は雑木と雑草の除去から着手し、調査区設定、重機掘削、人力掘削、記録保存、埋め戻しの順に進めた。

調査区は、計5箇所に設定した(1～5区 図2)。1区は、中山石見線道路建設予定地の東に設定した。現況はタケや雑木、雑草が茂る荒廃地である。調査の主たる目的は、平成16年度調査において発見された中世の集落跡がどの程度西へ広がるかを確認することである。このため、東西に長い調査区とした。調査区の規模は、南北長5.0m×東西幅20.0m、調査面積は100.0㎡である。

2区は、1区より北へ約60m隔てた地点に設定した。段丘崖下面の北東側にあたる。現況は雑草地であるが、以前は水田が営まれていた。調査目的は、遺跡の北東への広がりを確認することである。当初、南北長5.0m×東西幅8.0mの規模で掘削を開始したが、鎌倉時代遺構面において集石遺構が検出されたことにより、その範囲を確認するため西及び南方向へ拡張した(2-2区・2-3区)。その結果、調査面積は73.0㎡となった。

3～5区は、段丘崖下面の北側に設定した。調査目的は、遺跡の北方への広がりを把握することである。現在、段丘崖の裾に用水路がめぐるが、平成16年の調査ではこの水路と重なるように流れる鎌倉時代の溝が検出された。これが遺跡範囲の外周となる可能性を踏まえ、いずれも水路の主軸に対して垂直にのびる調査区を設定した。

3区は、はじめ南北長10.0m×東西幅1.5mの規模で設定したが(3-1区)、段丘崖下の様相をさらに確認するため、調査区を南へ延伸した(3-2区)。このため調査区はあわせて南北長13.0m、調査面積は19.5㎡となった。調査の結果、崖下面付近で大型溝を検出した。

4区は3区の西に並行して設定した調査区で、南北長10.0m×東西幅1.5m、調査面積は15.0㎡である。この調査区でも延伸を計画したが、段丘崖付近に農作業小屋が設けられていたため断念

し、改めて並行する位置に別調査区（5区）を設定した。5区の規模は、南北長4.5m×東西幅1.0m、調査面積は4.5㎡である。以上の経過により、最終調査面積は合計212.0㎡となった。

現地調査では、1区・2区で遺構面の平面検出を行った（図3）。また3～5区では断面観察を行った。遺構面では、全体写真撮影のほか検出遺構の個別撮影、平面図の作成、標高値の計測、遺構実測等、一連の記録作業を行った。また断面観察では土層堆積を分層して図化し、記録をとった。

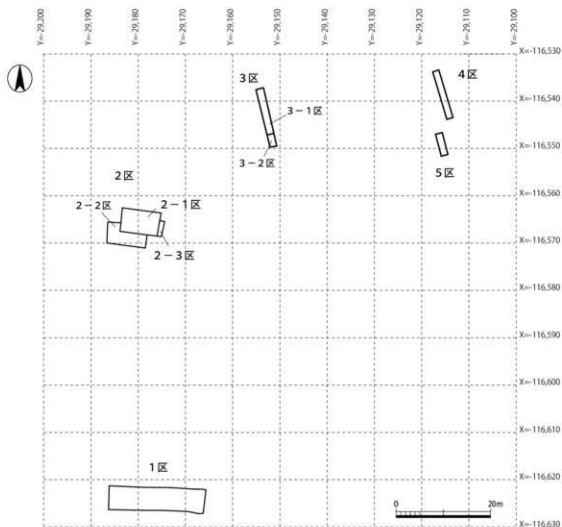


図2 調査区配置図（1：400）



図3 遺構面検出作業状況（西から）



図4 発掘体験実施状況（南西から）

出土遺物は、層序及び遺構ごとに収集し、登録した。なお、今回の調査を含む一連の範囲確認調査では、遺跡の保存を目的とするため遺構の掘削を最小限とした。このため、中世以前の遺構については半裁もしくは小規模なトレンチ掘削による断面観察に止めた。調査終了後は遺構面を土糞等で養生し、埋め戻しを行った。

調査期間中に現地では、11月19日に西京区主催のイベント「洛西・西山の遺跡発掘調査体験」を実施し、小学生の親子40組が参加した(図4)。また12月9日には近隣住民を対象として現地説明会を開催し、計50名の参加を得た。

調査後の基礎整理作業は、現地調査期間中の休工日に加え、令和5年12月18日～12月28日に実施した。出土遺物の洗浄、選別(抽出)、遺構図の精査、版組、トレースを行い、概報としての体裁を整えた。この一連の作業は本報告の刊行をもって終了した。

2. 遺跡の環境

(1) 周辺の調査成果

調査地周辺では、都市計画道路中山石見線の建設等に先立ち、試掘調査及び発掘調査が複数行われている(図5)。このうち、大原野石見遺跡発見の契機となった調査5(右京第746次)では、縄文時代晩期に遡る流路が確認され、突帯文土器の深鉢や小型石棒が出土した。また調査6(右京第772次)では、縄文時代晩期後半の土器棺墓3基、土坑墓4基が確認されている。

弥生時代の遺構は、同じく調査6において方形周溝墓や流路が検出されている。報告された出土土器は弥生時代後期に限られているが、石鐮や石包丁の出土から集落の始まりが弥生時代中期以前に遡ることは確実である。上里遺跡の居住域はさらに北東側で発見されており、当該地は墓域として使用されたと見られる。

古墳時代の遺構は、調査8・11で確認されている。調査11では古墳時代前期の流路が、調査8では同じく前期の土坑群が検出されており、土師器甕、高杯が埋納された状態で出土した。調査地の南に位置する芝古墳群のうち、唯一の前方後円墳である芝1号墳(調査10)は、最大長32.3mを測る墳丘に周溝を巡らせた構造で、6世紀に築造された首長墓のひとつと認識されている。

長岡京期の遺構は、調査5で一条条間南小路の側溝が、調査6で一条大路側溝と西三坊大路側溝及び宅地内の内溝が検出されているほか、掘立柱建物や井戸、櫓列等、都城に関連する遺構群が複数報告されている。このほか、調査5でも総柱建物を含む掘立柱建物を確認されている。

(2) 石見城跡の既往の調査

中世の遺構は現在の石見町集落付近に集中する。調査7では鎌倉時代～室町時代にかけて計3面の遺構面が確認されている。いずれも掘立柱建物や井戸、門等を備える屋敷跡で、時期ごとに建物の主軸を違えて配置されている。このうち、室町時代前期(14世紀後半～15世紀初頭)の遺構群が、今回の調査地である段丘崖の北辺ラインに近い方向軸をもつ。

令和3年度の範囲確認調査（第1次・調査11）では、GL-0.3mという浅い深度において鎌倉時代～室町時代の遺構面を確認した。最大幅5.5mを測る溝を検出し、これが段丘崖の北辺ラインに並行すること、また低地へ流出せず、段丘崖の上面で閉じることを確認した。段丘上端ラインを城館の外郭として成形したものとするならば、この溝はその内側に設けられた内堀として解釈できる。なおこの溝には新旧2時期があり、埋土や肩口からは13～16世紀所産の遺物が出土した。調査7で確認された建物群とは、ほぼ同時期の存続である。



図5 既往の調査位置図 (1:5,000)

表1 周辺調査一覧

No	調査番号	遺跡名		種類	住所	調査遺構・出土遺物	調査機関	文献
1	89NG 248	長岡京跡	1989/8/7 ～ 1989/8/11	発掘	西京区大原野 上里南ノ町 (上里小学校)	平安時代/流路 出土遺物/土師器、須恵器、緑釉陶器	(財)京都市 埋蔵文化財 研究所	埋文研 1994
2	92MK TC001 TC002	上里北ノ町 通跡	1993/1/6 ～ 1993/3/8	試掘 延長	西京区大原野 上里町 (大原野中 学校)	鎌倉時代/堀立柱建物、土坑、区画溝、横列、 ビツ群 出土遺物/土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、白磁、 陶磁器	(財)京都市 埋蔵文化財 研究所	埋文研 1995
3	01NG 238	長岡京跡 芝古墳群	2001/10/29 ～ 2002/1/25	試掘	西京区大原野 石見町 地内	1～7Tr/長岡京期の遺構を確認、本調査へ 8～15Tr/遺構検出なし	(財)京都市 埋蔵文化財 研究所	埋文研 2004
4	01NG 238	長岡京跡 芝古墳群	2002/1/24 ～ 2002/2/28	試掘	西京区大原野 石見町 地内	1Tr/近代遺跡により削平 2～4Tr/弥生時代、長岡京期、中世遺構を多数検出、 本調査へ	(財)京都市 埋蔵文化財 研究所	埋文研 2004
5	01NG 238	長岡京跡 石京 第746次	2002/8/8 ～ 2003/2/28	発掘	西京区大原野 石見町 地内	縄文晩期～布留式/流路 長岡京期/一条東側南小路、条坊側溝、土坑、溝、 横列、堀立柱建物 鎌倉時代/柱穴、土壇基、土坑、溝作溝 出土遺物/夾砂土土器、弥生土器、古式土師器、土師 器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶 器、瓦器、白磁、青磁、瓦、製瓦土器、土 製品、石器、鉄貨	(財)京都市 埋蔵文化財 研究所	埋文研 2003
6	01NG 238	長岡京跡 石京 第772次	2003/1/6 ～ 2003/8/6	発掘	西京区大原野 石見町 地内	縄文時代/土壇相墓、土坑墓 弥生時代/方形埴輪墓、流路 古墳時代/竪穴建物、溝、土坑 長岡京期/一条大路側溝、西三坊大路側溝、内溝、堀 立柱建物、土壇基、溝、井戸、横列 平安時代/堀立柱建物 鎌倉～室町時代/溝、横列 出土遺物/縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦 器、灰釉陶器、施釉陶器、白磁、青磁、瓦、 土製品、石器、鉄器、木器	(財)京都市 埋蔵文化財 研究所	埋文研 2003
7	01NG 238	長岡京跡 石京 第831次	2004/11/19 ～ 2005/2/9	発掘	西京区大原野 石見町 314 ほか	縄文時代/土坑 古墳時代/堀立柱建物、竪穴建物、溝 長岡京期/堀立柱建物 鎌倉時代～室町時代/第7宅跡(堀立柱建物、門、溝、 階段状遺構、土坑、土壇状遺構、井戸、堀) 出土遺物/縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土 器、陶磁器、石輪、石礫、磨石製品、木製 品、鉄製品	(財)京都市 埋蔵文化財 研究所	埋文研 2005
8	01NG 238	長岡京跡 石京 第879次	2006/6/29 ～ 2006/9/11	発掘	西京区大原野 石見町 地内	古墳時代/土壇埋納土坑 長岡京期/堀立柱建物、横列 鎌倉～室町時代/柱穴、土坑 江戸時代/堀立柱建物、井戸、石組土坑、区画溝、溝 作溝、土坑 出土遺物/弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、白磁、 青磁、焼締陶器、同色陶磁器、土製品、瓦、 鉄貨	(財)京都市 埋蔵文化財 研究所	埋文研 2007
9	01NG 238	堂ノ上 古墳	2014/10/22 ～ 2014/12/26	発掘	西京区大原野 上里南ノ町 地内	古墳時代/方墳、埴輪列、墓石 鎌倉時代/土坑 出土遺物/円筒埴輪、形象埴輪、瓦器	(公財)京都市 埋蔵文化財 研究所	埋文研 2015
10		芝1号墳	2013/12/02 ～ 2017/6/9	範囲 確認	西京区大原野 石見町 632-3	古墳時代/前方後円墳(横穴式石室、円溝、石室跡、 墓室) 出土遺物/埴輪、土師器、須恵器、鉄製品	京都市 文化財保護課	京都市 2018
11	21A 003 (第1次)	石見城跡 長岡京跡 石京 第1258次	2021/11/29 ～ 2021/12/23	範囲 確認	西京区大原野 石見町 330	古墳時代/土坑、溝、流路 鎌倉～室町時代/溝(堀)、焼土坑 江戸時代/土坑、溝、井戸、ビツ 出土遺物/土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、瓦質土 器、施釉陶器、焼締陶器、染付、鉄製品	京都市 文化財保護課	京都市 2023
12	22A 007 (第2次)	石見城跡 長岡京 石京 第1269次	2022/11/14 ～ 2022/12/21	範囲 確認	西京区大原野 石見町 324-1、 329、330	古墳時代/竪穴建物、土坑、溝、 鎌倉～室町時代/堀、土壇、溝、土坑、ビツ、流路 江戸時代/溝、井戸 出土遺物/土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、瓦質土 器、白磁、青磁、施釉陶器、焼締陶器、染 付、瓦、鉄貨	京都市 文化財保護課	京都市 2024
13	23A 002 (第3次)	石見城跡 長岡京跡 石京 第1283次	2023/11/6 ～ 2023/12/27	範囲 確認	西京区大原野 石見町 318-3、 319、335、 336-1	古墳時代/竪穴建物 長岡京期/柱穴、ビツ 鎌倉時代/柱穴、土坑、溝、ビツ、集石遺構 室町時代/柱穴、土坑、溝、ビツ、井戸、底込み 出土遺物/土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、瓦質土 器、白磁、青磁、施釉陶器、焼締陶器、染 付、埴輪、土製品、石製品、鉄製品、鉄貨	京都市 文化財保護課	本報告

令和4年度の範囲確認調査（第2次・調査12）では、段丘崖西辺の調査区において、室町時代のピットや溝を確認した。これらは鎌倉時代に埋没した流路の上位面而成立しており、土壌が安定した室町時代に居住域が拡大したことを追認する結果となった。また段丘崖の北辺に設けた調査区では、鎌倉時代・室町時代の堀と人為的に盛られた土塁を確認し、現存する地表面の凹凸が鎌倉時代・室町時代の遺構を反映するものであることが明らかとなった。また段丘崖の東辺でも堀や土塁の痕跡を確認した。

以上の成果により、段丘崖の上位には鎌倉時代～室町時代の居住域のほか、堀や土塁という城館を構成する特殊な遺構群が展開することが明らかとなった。

3. 調査成果

（1）基本層序

調査地のうち、段丘崖上位の地表面はT.P.46.0m程度、下位はT.P.43.5～44.3m程度で、概ね2m程度の落差がある（図6参照）。第1調査区は段丘崖上面に、第2～5調査区は段丘崖下面に属する。

1区 現地表面はほぼ平坦である。GL-0.05mで黄褐色礫混じりシルトの江戸時代堆積層（第1層）、-0.2mで褐色粗砂混じりシルトの鎌倉時代～室町時代包含層（第2層）、-0.5mでにぶい黄褐色微砂混じりシルトを主体とする古墳時代後期～長岡京期包含層（第3層）、-0.65mで褐色微砂混じりシルトを主体とする古墳時代前期包含層（第4層）、-0.85mで褐色細砂混じり粘土質シルトの地山を確認した。第1層は、調査区西半部にのみ存在し、東半部は削平されている。第2層の除去

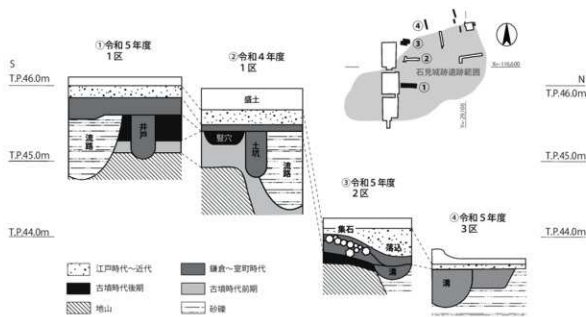


図6 基本層序模式図

面（GL-0.5m）において鎌倉時代～室町時代の遺構面（第1面）を検出した。

2区 現地表面は、段丘裾に近い南東角から河川敷である北西へ向かって緩やかに下がる。もっとも標高が高い調査区南東角では、GL-0.15mで灰黄褐色微砂混じりシルトやにぶい黄褐色細砂混じりシルトを主体とする江戸時代耕作土（第1層）、-0.3mで灰黄褐色砂礫～礫混じりシルトブロックと同色微砂混じりシルトブロックの互層（第1-2層）、-0.45mで灰黄褐色細砂混じりシルトを主体とする鎌倉時代包含層（第2層）、-0.5mで灰黄褐色粗砂混じりシルトを基盤とする鎌倉時代の集石遺構（第3層）、-0.45mで灰黄褐色細砂混じりシルトの古墳時代後期～長岡京期包含層（第4層）が堆積し、-0.6mでにぶい黄褐色礫混じりシルト～砂礫の地山に至る。第1-2層の除去面（GL-0.2～-0.4m）において室町時代の遺構面（第1面）を、第2層の除去面（GL-0.3～0.6m）において鎌倉時代の遺構面を検出した。

3区 段丘崖の北側低地に設定したが、その北には善峰川によって形成された自然堤防が横臥する。このため現地表面は、調査区の中央部が最も低い。GL-0.15mでにぶい黄褐色細砂混じりシルトに黄褐色細砂ブロックが混じる耕作土（1層）、-0.3mで黄褐色微砂ブロックが混じる黄褐色微砂混じりシルト（2層）、-0.5mで拳大の礫を含むオリーブ褐色砂礫（3層）、-0.95mで人頭大の礫を含むにぶい黄褐色砂礫（河川堆積）を確認した。このうち2層は、調査区北端で河川堆積を段状に削り込むことから、整地土として認識した。また、調査区南端（段丘崖裾）では、2層上面において成立する大型の溝状遺構を検出した（溝301）。

4区 現地表面は3区同様、南北端が高く、中央部が低い。GL-0.1mでにぶい黄褐色微砂混じりシルトと暗灰黄色シルトブロックが混合する近現代耕作土（1層）、-0.2mで黄褐色微砂混じりシルト

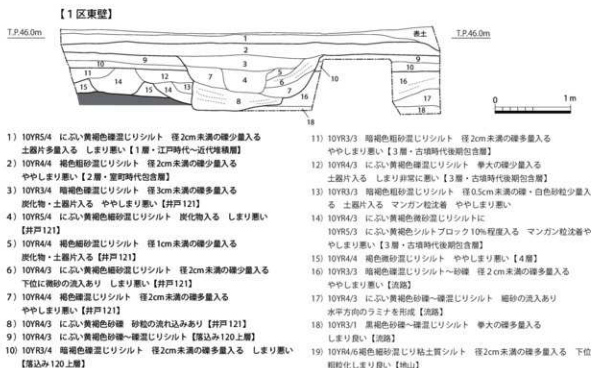
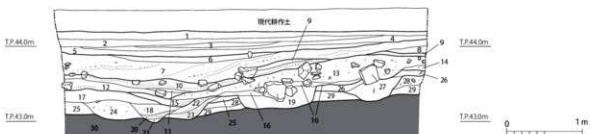


図7 1区東壁断面図（1：50）

トに同色微砂ブロックが混じる時期不明耕作土（2-1層）、-0.38mでい黄褐色細砂混じりシルトに黄褐色シルトブロックが混じる時期不明耕作土（2-2層）、-0.45mで黄褐色微砂混じりシルトに灰黄褐色シルトブロックが混じる室町時代耕作土（2-3層）、-0.55mでい黄褐色微砂混じりシルトの時期不明耕作土（3-1層）、0.7mで多量の礫が混じるにい黄褐色微砂混じりシルト（4層）、-0.82mで拳大の礫が多量に入るにい黄褐色砂礫の河川堆積に至る。

この調査区では、2-3層が室町時代の耕作土であり、その下層である3-1層がそれ以前に形成された耕作土であることを確認した。2-3層からは信楽焼甕の破片が出土した。また3-1層の下面では、足跡の踏み込みを検出した。このほか、調査区北端では、拳大の礫を多量に詰め込んだ近世暗渠を確認した。

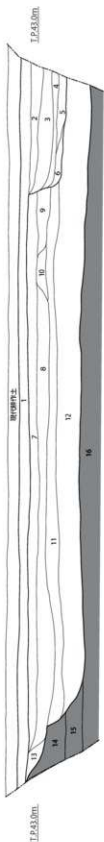
【2区東壁】



- 1) 10YR5/2 灰黄褐色細砂混じりシルト 径0.5cm未満の白色礫少量入る マンガン粒・鉄分沈着 上位に堆込みあり ややしり悪い【1層】
- 2) 10YR5/3 にい黄褐色細砂混じりシルトに 10YR5/1 褐灰色細砂ブロック30%程度入る 径0.5cm未満の礫少量入る 土師器・瓦器片少量入る マンガン粒少量に沈着 ややしり悪い【1層】
- 3) 10YR4/3 にい黄褐色細砂混じりシルトに 10YR5/1 褐灰色シルトブロック30%程度入る 径1cm未満の礫少量入る やや軟質 ややしり悪い【1層】
- 4) 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルトに 10YR5/1 褐灰色シルトブロック20%程度入る 径2cm未満の礫少量入る やや軟質 ややしり悪い 上位に鉄分沈着【1層】
- 5) 10YR5/4 にい黄褐色細砂混じりシルトに 10YR5/1 褐灰色細砂ブロック5%程度入る 径2cm未満の礫少量入る やや軟質 ややしり悪い【1層】
- 6) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり砂質シルトに 10YR4/1 褐灰色シルトブロック30%程度入る 拳大の礫微量入る マンガン粒沈着 瓦器片入る やや軟質 ややしり悪い
- 7) 10YR5/2 灰黄褐色砂礫〜礫混じりシルトブロックと 10YR4/2 灰黄褐色微砂混じりシルトブロックの互層 拳大の礫少量入る しり悪い
- 8) 10YR4/3 にい黄褐色粗砂混じり砂質シルトに 10YR4/1 褐灰色シルトブロック20%程度入る 径1cm未満の礫多量入る マンガン粒沈着 土師器片入る やや軟質 ややしり悪い
- 9) 10YR4/1 褐灰色細砂混じり粘土質シルトに 10YR4/1 褐灰色微砂ブロック20%程度入る 径2cm未満の礫少量入る マンガン粒沈着 軟質 ややしり悪い
- 10) 10YR5/2 灰黄褐色細砂混じりシルトに 10YR5/4 にい黄褐色微砂の流入あり 波状ラミナを形成 拳大の礫少量入る マンガン粒少量沈着 やや軟質
- 11) 10YR6/4 にい黄褐色微砂 波状ラミナを形成 マンガン粒少量沈着 やや軟質 10層に近似 やや細色化
- 12) 10YR6/1 褐灰色微砂混じり粘土〜粘土質シルト 微砂の流入あり 水平方向のラミナを形成 マンガン粒沈着 土師器片・瓦器片入る 上位に鉄分沈着 軟質
- 13) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルトに 10YR4/1 褐灰色シルトブロック30%程度入る 人頭大の礫多量入る 土師器片多量入る マンガン粒沈着 鉄分沈着 石積埋土
- 14) 10YR4/3 にい黄褐色細砂混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る マンガン粒沈着 瓦器片入る やや軟質 固くしる【鎌倉時代埴土】
- 15) 10YR4/1 褐灰色粗砂混じり砂質シルト 径1cm未満の礫少量入る 炭化物入る マンガン粒・鉄粒沈着 やや軟質 しり悪い
- 16) 10YR4/1 褐灰色粗砂混じり砂質シルト 径0.5cm未満の礫少量入る 鉄分沈着 やや軟質 しり悪い
- 17) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト 炭化物・土器破片入る マンガン粒沈着 やや軟質 ややしり悪い【鎌倉時代包含層】
- 18) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂〜砂質シルト 径2cm未満の礫少量入る マンガン粒・鉄分沈着 しり悪い
- 19) 10YR4/1 褐灰色粗砂混じり砂質シルト 径1cm未満の礫少量入る 土師器片入る やや軟質 しり悪い
- 20) 10YR4/1 褐灰色粗砂〜砂 径1cm未満の礫少量入る 鉄分水平方向に沈着 しり悪い
- 21) 10YR4/1 褐灰色粗砂 拳大の礫少量入る 鉄分水平方向に沈着 しり悪い
- 22) 10YR5/1 褐灰色粗砂〜粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 土師器片入る 締まり悪い 下方粗粒化 上位に鉄分沈着
- 23) 10YR5/1 褐灰色粗砂〜粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る しり悪い 下方粗粒化 上位に鉄分沈着
- 24) 10YR4/2 灰黄褐色微砂混じりシルト 径3cm未満の礫多量入る しり悪い
- 25) 10YR4/3 にい黄褐色粗砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック30%程度入る 径1cm未満の礫少量入る 炭化物・土器片入る鉄粒沈着 やや軟質 ややしり悪い【13C】
- 26) 10YR4/3 にい黄褐色微砂混じりシルトに 10YR4/1 褐灰色シルトブロック20%程度入る 径0.5cm未満の礫微量入る 炭化物・瓦器片入る マンガン粒沈着 やや軟質 ややしり悪い
- 27) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり砂質シルト 径1cm未満の礫微量入る 炭化物・瓦器片入る マンガン粒沈着 やや軟質 ややしり悪い
- 28) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト 径4cm未満の礫微量入る 鉄粒沈着 ややしり悪い やや軟質
- 29) 10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルトに 褐灰色シルトブロック20%程度入る 径1cm未満の礫微量入る マンガン粒・鉄粒沈着 ややしり悪い やや軟質
- 30) 10YR5/4 にい黄褐色微砂〜砂 径2cm未満の礫多量入る 鉄分沈着 しり悪い【埴土】

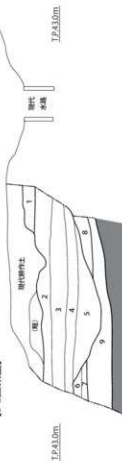
図8 2区東壁断面図（1：50）

【3-1区東壁】



- 1) 107RS/3 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトに 107RS/6 灰色黄色細砂質ブロック30%程度混入る マンガン混入る やや軟質 しまり悪い【層付土】
- 2) 107RS/3 に近い黄色黄色細砂質じり粘土質シルト 径1cm未満の礫少量混入る マンガン混入る 軟分沈層 やや軟質【層付土】
- 3) 107RS/4 灰色黄色細砂質じり粘土質シルト 礫少量混入る 灰化物入る 軟分沈層 やや軟質【層付土】
- 4) 107RS/3 灰色黄色細砂質 径2cm未満の礫少量混入る 軟分沈層 しまり悪い【層付土】
- 5) 107RS/3 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトに 107RS/6 灰色黄色細砂質ブロック30%程度混入る マンガン混入る やや軟質 しまり悪い【層付土】
- 6) 25V5/2 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトに 107RS/6 灰色黄色細砂質ブロック30%程度混入る マンガン混入る やや軟質 しまり悪い【層付土】
- 7) 25V5/3 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトに 107RS/6 灰色黄色細砂質ブロック30%程度混入る マンガン混入る やや軟質 しまり悪い【層付土】
- 8) 107RS/3 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトに 107RS/6 灰色黄色細砂質ブロック30%程度混入る マンガン混入る やや軟質 しまり悪い【層付土】
- 9) 25V5/3 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトに 107RS/6 灰色黄色細砂質ブロック30%程度混入る マンガン混入る やや軟質 しまり悪い【層付土】
- 10) 25V5/2 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトに 107RS/6 灰色黄色細砂質ブロック30%程度混入る マンガン混入る やや軟質 しまり悪い【層付土】
- 11) 25V4/4 オリーブ褐色砂質 礫少量混入る 灰化物入る 軟質 しまり悪い
- 12) 107RS/2 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトに 25V5/3 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトブロック10%程度混入る 径3cm未満の礫少量混入る やや軟質 しまり悪い
- 13) 25V4/4 オリーブ褐色砂質 礫少量混入る 灰化物入る 軟質 しまり悪い
- 14) 107RS/2 灰色黄色細砂質 礫少量混入る 灰化物入る 軟質 しまり悪い
- 15) 107RS/3 灰色黄色細砂質 礫少量混入る 灰化物入る 軟質 しまり悪い
- 16) 107RS/3 灰色黄色細砂質 礫少量混入る 灰化物入る 軟質 しまり悪い

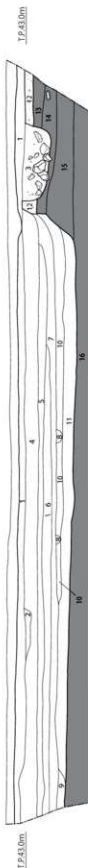
【3-2区東壁】



- 1) 107RS/2 灰色黄色細砂質じり粘土質シルト 灰化物入る 植物腐敗混入る やや軟質 しまり悪い
- 2) 107RS/3 に近い黄色黄色細砂質じり粘土質シルト 径1cm未満の礫少量混入る マンガン混入る 軟分沈層
- 3) 25V5/2 灰色黄色細砂質じり粘土質シルト 灰化物入る 軟分沈層 やや軟質 しまり悪い【層付土】
- 4) 107RS/2 灰色黄色細砂質じり粘土質シルト 径3cm未満の礫少量混入る 軟質 しまり悪い【層付土】
- 5) 107RS/4 灰色黄色細砂質じり粘土質シルトに 107RS/4 に近い黄色黄色細砂質ブロック10%程度混入る 径1cm未満の礫少量混入る 軟質 しまり悪い【層付土】
- 6) 107RS/3 灰色黄色細砂質 径2cm未満の礫少量混入る 軟分沈層 しまり悪い
- 7) 107RS/3 に近い黄色黄色細砂質じり粘土質シルトブロックと細砂ブロックの混入層 径1cm未満の礫少量混入る やや軟質 しまり悪い
- 8) 107RS/3 に近い黄色黄色細砂質じり粘土質シルト 軟質 しまり悪い
- 9) 25V4/4 オリーブ褐色砂質 礫少量混入る 灰化物入る 軟質 しまり悪い

図9 3区東壁断面図(1:50)

【4区西壁】



- [illegible]

【5区西壁】



- 1) 10.055/3 には、黄色色の黄緑色のシリルト 10cm 未満の少量入る。マンガン粉・鉄粉は混入し、しまり悪い。【新12地】
 2) 2.534/1 には、黄色色の黄緑色のシリルト 10cm 未満の少量入る。やしまり悪い。や軟質。【新12地】
 3) 10.055/4 には、黄色色の黄緑色のシリルト 10cm 未満の少量入る。やしまり悪い。や軟質。【新12地】
 4) 2.535/3 には、黄色色の黄緑色のシリルト 10cm 未満の少量入る。やしまり悪い。や軟質。【新12地】
 5) 2.534/4 には、黄色色の黄緑色のシリルト 10cm 未満の少量入る。やしまり悪い。や軟質。【新12地】
 6) 2.534/2 には、黄色色の黄緑色のシリルト 10cm 未満の少量入る。やしまり悪い。や軟質。【新12地】

图10 4区·5区西壁断面图(1:50)

5区 3区で検出した溝301の延長線上に設けた調査区である。地表面は段丘崖裾（用水路）付近が最も高く、北へ向かって緩やかに下がる。GL-0.1mで黄灰色細砂混じりシルト（1層）、-0.2mで黄褐色微砂混じり粘土質シルト（2-1層）、-0.34mで黄褐色微砂混じりシルト（2-2層）、-0.5mで黄灰色細砂混じり粘土質シルト（2-3層）、-0.65mで黄灰色砂礫（河川堆積）を確認した。調査区南端では、2層上面から切り込む溝状遺構を検出した（溝501）。

（2）遺構と遺物

1）1区（図11）

溝101 調査区西端で検出した溝である。検出長5.0m、最大幅1.5m、最大深度は0.6mを測る。掘方斜面には段があり、断面形状は逆凸形に近い。埋土は暗褐色細砂混じりシルトを主体とし、拳大の礫を含む。平成16年度調査区ではこれに連続すると見られる溝が検出されており、建物の周囲をめぐる排水溝や区画溝としての性格が示されている。埋土からは土師器皿・甕、備前焼掘鉢（図14-21・22）、焼締陶器甕、白磁碗、青磁碗（図14-2）等が出土した。室町時代の遺構である。

溝111 調査区東半部で検出した遺構である。検出長4.0m、最大幅0.7m、最大深度は0.1mで断面形状は皿形を呈する。埋土は暗褐色粗砂混じりシルトを主体とする。南端で土坑142に切られるため明確ではないが、西から続く東西溝（溝140）と接合してL字状となる可能性がある。その場合、建物周囲に廻らされる排水溝としての性格をもつものか。遺構内からは、須恵器甕、土師器皿の破片が出土した。室町時代の遺構である。

溝140 調査区南半部で検出した遺構である。検出長9.2m、検出最大幅は0.4mを測る。最大深度は0.1m、断面形状は丸みのある椀形を呈する。埋土は、暗褐色粗砂混じりシルトを主体とする。東端は溝111に接し、やや湾曲しながら西へのびる。西端は削平によって失われている。埋土から須恵器杯蓋、土師器皿、甕の破片が出土した。鎌倉～室町時代の遺構である。

土坑113 調査区中央部付近の北辺で検出した遺構である。断面形状はほぼ円形で、東西径は2.0mを測る。断面形状は中央を一段掘り込む逆凸形、最大深度は0.25mである。中央部には拳大～人頭大の石の集中が認められる。埋土にはぶい黄褐色粘土質シルトを主体とする。遺構の性格は不明である。須恵器甕、杯、長須壺、鉢、瓦器碗（図14-5）、青磁碗、土師器皿、甕が出土した。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
古墳時代後期	堅穴建物 160	
長岡京期・平安時代	ビット 116、125、126、211、柱穴 131、153、190、土坑 114	
鎌倉時代・室町時代	土坑 113、127、142、202、211～213、ビット 103、104、106、112、115、119、122、124、128～130、143～152、161、溝 101、111、117、140、177、210、落込み 120、201、井戸 121、石敷遺構 205、溝 219、220	
時期不明	溝 301、501、落込み 203	城館の外堀か

鎌倉～室町時代の遺構である。

土坑（井戸）121 調査区東辺で検出した遺構である。検出南北長は1.5m、検出東西幅は0.6m、調査区外へと続くが、平面形状は隅丸方形と推定される。断面形状は不定形、最大深度は0.7mを測る（図7参照）。埋土は上下層に大別でき、上層はにぶい黄褐色～褐色礫混じりシルト、下層はにぶい黄褐色砂礫が主体である。下層には砂粒の流れ込みが見えるものの、流水・滯水痕跡は認められない。遺構内からは土師器皿（図14-10）、須恵器甕、瓦質土器釜、瓦器椀（図14-6）、砥石（図14-27）が出土した。断面形状から井戸の可能性はある。室町時代の遺構である。

ビット群 調査区中央から東半部にかけて、ビットを複数検出した。柱あたりが認められることから、そのうちの多くが建物や柵列等の柱穴であると推定される。このうち、ビット145、130、112、122、143は、溝140と並列することから建物の柱列となる可能性がある。またビット119は、直径0.6mの掘り方とその中央に径0.3mの柱あたりをもつ遺構であるが、柱痕の外輪に沿って被熱痕跡が残ることから、火災により焼失した建物を構成する柱である可能性が高い。鎌倉時代～室町時代の遺構である。ビット143からは常滑焼甕の破片（図14-23）が出土した。

このほか、ビット153、131、190は、いびつながらも隅丸方形の平面形状をもつ遺構群で、一連の柱列となる可能性がある。出土遺物及び形状から長岡京期に遡る遺構と推定される。

2) 2区（図12・13）

計2面の遺構面を検出した。第1遺構面（室町時代）では、土坑と落込みを、第2遺構面（鎌倉時代）では土坑、溝、石敷遺構を確認した。

土坑202（図12） 第1遺構面の調査区北西角で検出した遺構である。平面形状は不定形で、検出南北長2.2m、検出東西幅2.0m以上を測る。平面形状は凹凸のある皿形で、最大深度は0.3mである。埋土はにぶい黄褐色粗砂混じりシルトや灰黄褐色細砂混じりシルトを主体とする。遺構の性格は不明であるが、遺物の出土量は豊富で、須恵器甕、土師器甕・皿、瓦器椀・皿、瓦質土器鍋（図15-45）等の破片が一定量出土した。

石敷遺構205（図13） 第2遺構面で検出した、集石遺構である。遺構面は段丘裾に近い調査区南東角が高く、北と西へ向かってなだらかに下がる。その斜面上に、拳大～人頭大の石が敷き詰められていた。石敷の主軸はほぼ東から西へのびた後、調査区西半部で鈍角気味に屈曲し、南へ折れて調査区外へと続く。西端も調査区外へと続いており、現代の用水路の下へ潜る様相を見せる。また屈曲部付近では北方向へ突出し、幅広となる。

石敷の規模は、東西検出長10.0m、最大幅は4.0m、最小幅は3.0mである。両脇には、意識的に石を並べたと見られる箇所が複数認められる。石敷の基盤層は、0.2～0.4m程度に盛り上げた灰黄褐色粗砂混じりシルトで、石はその上面から下半部を埋め込むように置かれている。調査区東壁に深掘トレンチを入れて断面観察をしたところ、下層（古墳時代後期包含層）に2条の溝を掘り込んで主軸とし（溝219、220）、ここに基底となるやや大きい石を入れ、その上に土や石を積んだ後、さらに表面に石を敷く構造であることが判明した。ただし、石敷の屈曲先である南壁では溝219、

220に続く遺構は確認できていない。

盛土下層の溝219は、最大幅1.0m、最大深度0.2m、埋土は褐灰色粗砂混じり砂質シルトを主体とする。溝220は、最大幅0.6m、最大深度0.2m、埋土は灰黄褐色細砂混じり砂質シルトである。溝220からは、瓦器椀の破片が出土した。また盛土内からは、瓦器皿（図15-34、35）、東播系須恵器鉢、土師器皿、瓦質土器甕、砥石（図15-54）が出土した。多くが13世紀の製品である。石敷の直上を覆う土（第1面落込み201埋土）に僅かながら瓦質土器甕や鍋の破片（14世紀）が含まれることから、この石敷遺構は、鎌倉時代に築かれた後、室町時代初頭頃より徐々に埋没が始まったと推定される。遺構の性格は不明であるが、旧善峰川に面した護岸施設等の可能性が考えられる。

溝210 調査区北東隅で検出した遺構で、石敷遺構205に切られる。南壁では確認できないため、石敷遺構205の下層で消滅するか、屈曲して流線を変えたと見られる。検出長2.5m、検出幅1.9m、最大深度0.4mを測る。埋土はにぶい黄褐色礫混じりシルト～砂礫を主体とし、随所に砂粒の流れ込みが確認できる。遺構内からは、白磁皿（図15-31）、瓦器椀（図15-41）、瓦質土器三足釜の脚（図15-42）等が出土した。鎌倉時代の遺構である。なお段丘座の傾きに沿って北へのびる様相を見せるが、第3調査区、第5調査区で確認した溝（301・501）と連続するか否かは不明である。

ビット211～213 調査区北西部で確認した遺構群である。いずれもやや歪な円形を呈しており、211は長径0.45m、212は長径0.4m、213は直径0.3mを測る。遺構深度は総じて浅く、5cm

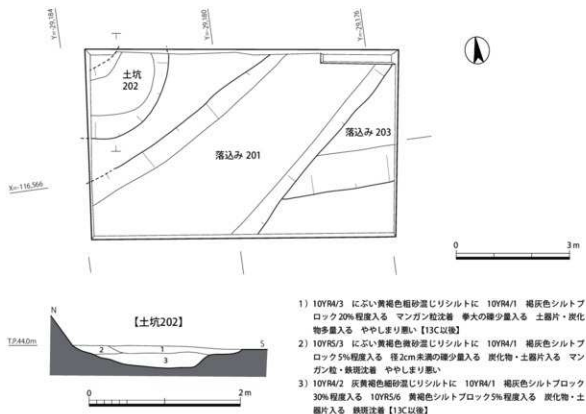
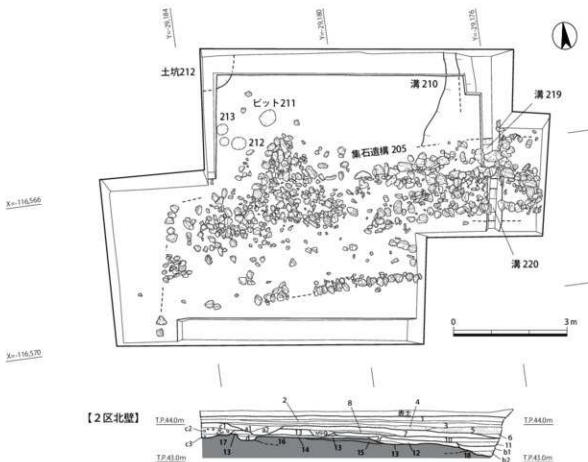


図12 2区第1面平面図（1：100）・遺構断面図（1：50）



- 1) 10YR5/2 灰黄褐色微砂並じリシルト 径0.5cm未満の白色礫少量入る
マンガン粒・鉄分沈着 上位に窪みあり ややしまり悪い【1層】
- 2) 10YR5/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルトに 10YR5/1 褐灰色細砂ブ
ロック30%程度入る 径0.5cm未満の礫少量入る 土師器・瓦断片少量
入る マンガン粒少量に沈着 ややしまり悪い【1層】
- 3) 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂並じリシルトに 10YR5/1 褐灰色細砂ブ
ロック5%程度入る 径2cm未満の礫少量入る やや軟質
ややしまり悪い【1層】
- 4) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルトに 10YR5/1 褐灰色細砂ブ
ロック5%程度入る 径3cm未満の礫少量入る マンガン粒少量沈着
やや軟質【1-2層】
- 5) 10YR5/2 灰黄褐色微砂並じリシルトブロックと 10YR4/2 灰黄褐
色微砂並じリシルトブロックの互層 礫少量入る しまり悪い【1-2層】
- 6) 10YR5/2 灰黄褐色微砂並じリシルトに 10YR6/4 にぶい黄褐色微砂の
流入あり 波状ラミナを形成 礫少量入る マンガン粒少量沈着
やや軟質【1-2層】
- 7) 10YR6/1 褐灰色微砂並じリシルトに粘土質シルト 微砂の流入あり 水平
方向のラミナを形成 マンガン粒沈着 土師器・瓦断片入る 上位に鉄
分沈着 軟質【2層】
- 8) 10YR5/2 灰黄褐色微砂並じリシルトに 10YR6/4 にぶい黄褐色微砂の
流入あり 波状ラミナを形成 礫少量入る マンガン粒少量沈着
やや軟質
- 9) 10YR5/2 灰黄褐色微砂並じリシルト 礫少量入る 黄へ落ちる流
砂あり 土断片入る ややしまり悪い
- 10) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂並じリシルト 炭化物・土器断片入る マンガン
粒沈着 やや軟質 ややしまり悪い【3層】
- 11) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂並じリシルトに 10YR4/2 灰黄褐色シルト
ブロック30%程度入る 径1cm未満の礫少量入る 炭化物・土断片入る
鉄粒沈着 やや軟質 ややしまり悪い【3層】
- 12) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルトに 10YR4/1 褐灰色細砂ブ
ロック10%程度入る 径2cm未満の礫少量入る 炭化物・土断片入る
- 13) 10YR4/4 褐色微砂並じリシルトに 10YR4/1 褐灰色細砂ブロック
30%程度入る 炭化物・土断片入る マンガン粒沈着 ややしまり悪い
【4層】
- 14) 10YR5/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルト 径0.5cm未満の礫微量入
る マンガン粒沈着 土断片入る【5層】
- 15) 10YR4/6 褐色微砂並じリシルト 径2cm未満の礫微量入る 鉄分沈着の
ため上位褐色化【地山】
- 16) 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂並じリシルト～砂礫 径2cm未満の礫多量入る
鉄分沈着 しまり良い【地山】
- 17) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルト 径4cm未満の礫多量入る【地
山】
- 18) 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂 径2cm未満の礫多量入る しまり良い【地
山】
- a1) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルト 径2cm未満の礫多量入る
土断片多量入る しまり悪い【土坑202】
- a2) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂並じリシルト 径0.5cm未満の礫少量入る
礫少量入る 土断片少量入る ややしまり悪い【土坑202】
- b1) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルト～砂礫 径2cm未満の礫多量入る
瓦断片入る 鉄粒沈着 ややしまり悪い【溝210】
- b2) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルト～砂礫 径2cm未満の礫多量入る
下位に粗砂の流入あり やや軟質 しまり悪い
- c1) 10YR5/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルト 径2cm未満の礫少量入る 土
断片入る マンガン粒・鉄分沈着 やや軟質 ややしまり悪い
- c2) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂並じリシルト 礫少量入る 土断片入る
やや軟質 しまり悪い
- c3) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂並じリシルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック
20%程度入る 土断片入る やや軟質 しまり悪い
- d) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂並じリシルトに 10YR4/1 褐灰色微砂並じ
リシルトブロック10%程度入る 径2cm未満の礫少量入る マンガン
粒沈着 ややしまり悪い

図13 2区第2面平面図・南壁断面図(1:100)

までにおさまる。埋土はすべてにぶい黄褐色細砂混じりシルトを主体とする。柱穴とは考えにくい
 が、同様の遺構が北壁にもかかることから、北の河川へ向かって続く杭列等の痕跡である可能性が
 ある。ピット211からは、瓦器椀（図15-40）、瓦質土器鍋（図15-44）等が出土した。ピット
 212、213からは、瓦器椀と土師器皿の破片が出土した。鎌倉時代に埋没した遺構群である。

3) 3区（図9）

調査区北端（段丘崖裾）では、2層上面より切り込む溝を検出した。

溝301 検出幅は4.2m以上、最大深度は0.8mを測る。溝底は現況の用水路より3m程度北にあ

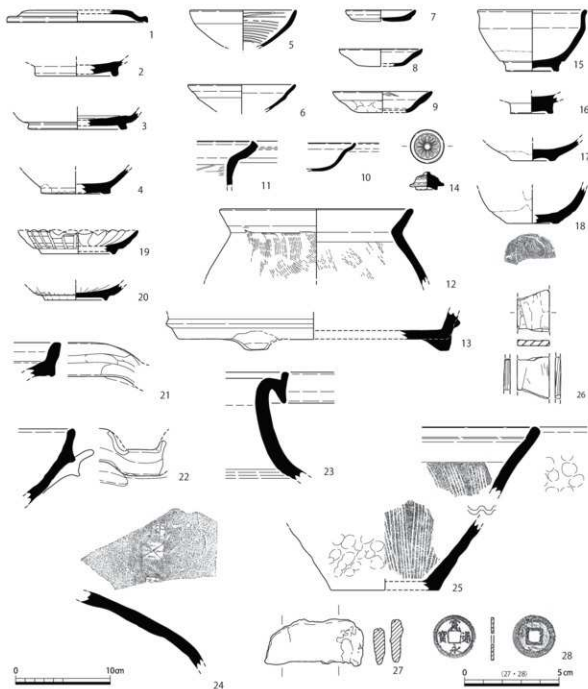


図14 出土遺物実測図1（1：2・1：4）

り、段丘ラインの裾をめぐるように東西へのびると推定される。排水溝としては規模が大きいことから、段丘上への進入を防ぐ目的で設けられた施設である可能性が考えられる。遺物の出土は確認できなかったため、成立時期は不明である。

4) 5区 (図10)

調査区南端では、2層上面から切り込む溝を検出した (溝501)。

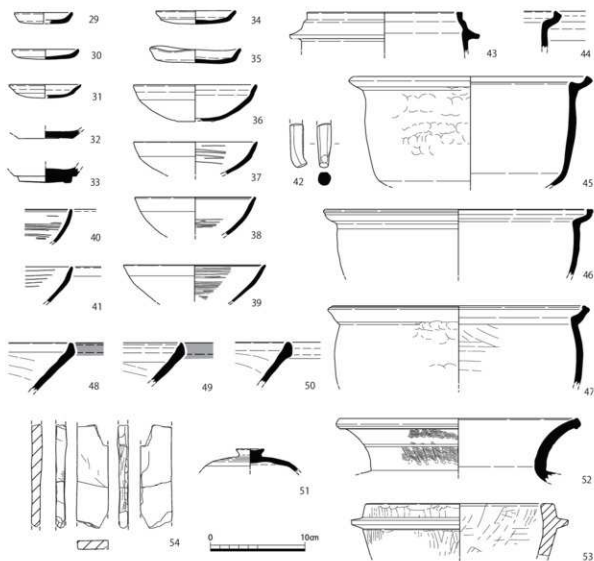


図15 出土遺物実測図2 (1:4)

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 総数 (箱)	A ランク 箱数 (点数)	B ランク 箱数	C ランク 箱数
古墳時代	土師器 (布留式)、須恵器、埴輪	5箱	須恵器7点、土師器9点	1箱	4箱
長岡京期・平安時代	緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、土師器		瓦器10点、瓦質土器7点		
鎌倉時代・室町時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、白磁、青磁、施釉陶器、磁石、石鋸、鉄釘		緑釉陶器1点、灰釉陶器1点 白磁3点、青磁1点 施釉陶器4点、焼締陶器5点		
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、白磁、染付、瓦、銭貨、鉄製品		石製品3点、鉄製品1点、銅製品1点		
	合計	5箱	1箱 (54点)	1箱	4箱

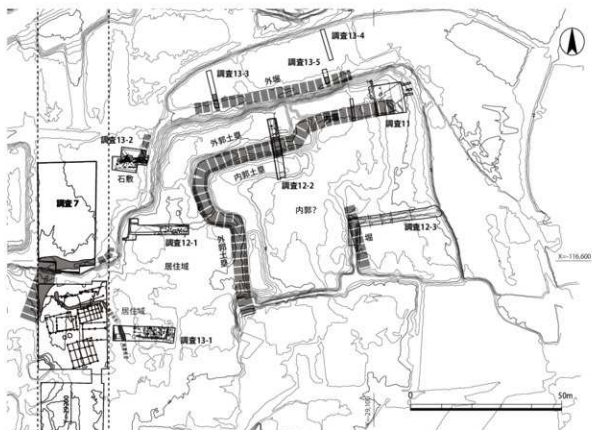


図16 石見城跡遺構復元図(1:1,250)

溝501 最大検出幅は2.35m、最大深度は0.7mを測る。断面形状は深い碗形を呈する。埋土は上下2層に大別でき、上層は黄褐色礫混じり砂質シルト、下層は暗灰黄色粗砂を主体とし、ともに拳大の礫を含む。特に下層はラミナの形成が顕著で、流水により埋没したことがわかる。位置関係から、第3調査区で検出した溝301に連続する遺構である可能性が高い。埋土から遺物の出土は確認できなかった。

4. まとめ

以上、令和5年度に実施し、令和6年に整理作業を行った石見城跡第3次範囲確認調査について、その概要を報告した。

今回の調査では、石見城跡を構成する遺構群の北方への広がりを確認すること、また既往の調査(図16調査7)で報告されていた居住域の広がりを把握することを主たる目的とした。調査の結果、段丘崖北側に設定した3区・5区(図16調査13-3、13-5)において、崖に沿ってのびる溝を検出した(溝301、501)。溝301は最大幅4.2m以上を測る大型遺構で、単なる農業用水路とは考えにくい規模である。この溝より北では顕著な遺構を確認できていないことも含めて、現時点では溝301、501が城館北側の外堀となる可能性を示しておきたい。

また居住域の範囲に関しては、1区(図16調査13-1)の東半部において建物の柱穴や土坑を検

出したことから、さらに東側へ広がることが予測される。調査12-1でも調査区東端で土坑やピットを確認していることを踏まえると、外郭土塁付近までは居住域が続くと考えられる。

なお石見城跡では、令和6年度にも引き続き発掘調査を実施しており、さらに新たな情報を得ている。今後も調査を重ねることにより、遺跡の解明が進むことを期待したい³⁾。

(黒須亜希子)

註

- 1)『野田彈正忠泰忠軍忠状』には、「上里・石見・井内館」と併記されており、「城」とは表記されていないが、本稿では周知の埋蔵文化財包蔵地の名勝に従い、「石見城」と呼称する。
- 2)山下正男『京都市内およびその近辺の中世城郭 - 復元図と関連資料 -』京都大学人文科学研究所 1986年
- 3)石見城跡に関する一連の範囲確認調査成果は、出土遺物の詳細報告をあわせて『石見城跡発掘調査総括報告書』（令和7年度刊行）に掲載予定。

引用文献

- 1) (財)京都市埋蔵文化財研究所 「38 長岡京右京一条四坊」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994年。
- 2) (財)京都市埋蔵文化財研究所 「10 上里遺跡」『平成14年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995年。
- 3) (財)京都市埋蔵文化財研究所 「4 長岡京右京一条四坊跡(1)」『平成13年度京都市埋蔵文化財調査概要』2004年。
- 4) (財)京都市埋蔵文化財研究所 「5 長岡京右京一条四坊跡(2)」『平成13年度京都市埋蔵文化財調査概要』2004年。
- 5) (財)京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-2、2003年。
- 6) (財)京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-3、2003年。
- 7) (財)京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京一条四坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-15、2005年。
- 8) (財)京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京一条四坊十四・十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-22、2007年。
- 9) (公財)京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京北辺四坊八町跡・上里北ノ町遺跡・堂ノ上古墳』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2014-12、2015年。
- 10) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 『芝古墳(芝1号墳)調査総括報告書』京都市文化市民局、2018年。
- 11) 京都市文化市民局 「Ⅹ長岡京右京一条四坊十町跡(第1258次)、石見城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和4年度』、2023年。
- 12) 京都市文化市民局 「Ⅹ長岡京右京一条四坊十町跡(第1269次)、石見城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和5年度』、2024年。

表4 出土遺物一覧(土器・陶磁器)

No	区	種類	器形	出土地点	口径	底径	残存高	最大厚	胎土	焼成	時期	備考
1	1	須恵器	杯蓋	ビツ116	(14.8)		1.8	0.5	○	×	8C	
2	1	青磁	椀	溝101		(6.4)	1.6	0.9	○	○	14C～	
3	1	須恵器	杯身	第1層		9.2	2.0	0.9	○	○	8C	
4	1	灰釉陶器	椀	表土		7.2	2.6	0.9	○	○	9C	
5	1	瓦器	椀	土坑113	(11.0)		3.9	0.4	○	△	13C	
6	1	瓦器	椀	井戸121	(11.2)		2.8	0.3	△	△	13C～14C	
7	1	土師器	皿	第1層	7.2		1.2	0.5	○	○	13C	
8	1	土師器	皿	溝120	8.6	5.0	1.9	0.5	○	△	15C	
9	1	土師器	皿	第1層	10.2		2.2	0.6	○	○	14C～15C	
10	1	土師器	皿	井戸121			3.0	0.3	△	△	14C	
11	1	土師器	鍋	第1層			4.6	0.8	○	○	13C～14C	
12	1	土師器	甕	第3層	(20.0)		8.0	0.9	△	○	8C	
13	1	瓦質土器	深鉢	第1層		28.4	4.0	0.9	○	○	15C	
14	1	土製品	蓋	第1層	3.6		1.9	1.5	○	○	近世	
15	1	施釉陶器	天目茶碗	第1層	11.0	5.3	6.5	0.7	○	○	14C	
16	1	施釉陶器	天目茶碗	第1層		4.4	2.0	1.6	○	○	15C～16C	
17	1	施釉陶器	椀	第1層		4.8	2.2	1.1	○	○	近世	瀬戸美濃
18	1	施釉陶器	椀	第1・2層		5.4	3.9	1.0	○	○	14C	瀬戸美濃
19	1	白磁	菊皿	第1層	12.4		2.6	6.5	○	○	16C末～17C	
20	1	白磁	菊皿	第1層		6.5	1.7	0.7	○	○	16C末～17C	
21	1	焼締陶器	播鉢	溝101			3.7	1.5	○	○	14C～15C	備前
22	1	焼締陶器	播鉢	溝101			3.8	1.2	△	○	14C前～15C	備前
23	1	焼締陶器	甕	ビツ143			11.3	1.4	△	○	14C	常滑
24	1	焼締陶器	広口壺	表土				1.3	○	○	13C後～14C前	常滑
25	1	焼締陶器	播鉢	第1層		11.4	7.4	1.6	×	○	15C～16C	信楽
29	2	土師器	皿	第2面	(6.0)		1.2	0.4	○	○	13C	
30	2	土師器	皿	溝203	6.8		1.0	0.4	○	○	13C	
31	2	土師器	皿	溝203	7.6		1.4	0.3	○	○	14C	
32	2	白磁	皿	溝210		5.8	0.9	1.3	○	○	12C前～13C中	
33	2	緑釉陶器	椀	第2面		5.6	2.2	1.5	○	○	9C	
34	2	瓦器	皿	石積205	(8.4)		1.4	0.4	○	○	13C	
35	2	瓦器	皿	石積205	9.5		1.9	0.4	○	○	13C	
36	2	瓦器	椀	石積205	(12.8)	(3.6)	3.9	0.4	○	○	13C	

No	区	種類	器形	出土地点	口径	底径	残存高	最大厚	胎土	焼成	時期	備考
37	2	瓦器	椀	第2面	(12.8)		3.5	0.5	○ △	13C		
38	2	瓦器	椀	第2面	(12.6)		4.0	0.4	○ ○	13C		
39	2	瓦器	椀	2～3層	10.8		3.9	0.3	○ △	13C初頭		
40	2	瓦器	椀	ビツ211			3.5	0.4	○ ○	12C末～13C初		
41	2	瓦器	椀	溝210			3.1	0.5	○ ○	13C		
42	2	瓦質土器	三足釜	溝210			4.7	1.5	○ ○	13C以後		
43	2	瓦質土器	羽釜	溝203	(15.2)		4.0	0.6	○ ○	14C		
44	2	瓦質土器	鍋	ビツ211			3.9	0.8	○ ○	13C末～14C初		
45	2	瓦質土器	鍋	土坑202	24.4		11.5	0.8	○ △	13C末～14C		
46	2	瓦質土器	鍋	第2面	(28.2)		7.0	0.7	○ ○	13C～14C初		
47	2	瓦質土器	鍋	2～3層	26.4		8.2	0.9	○ ○	14C		
48	2	須恵器	鉢	1・2層			5.0	0.7	○ ○	12C末～13C初	東播系	
49	2	須恵器	鉢	落込201			4.3	0.8	○ ○	12C末～13C初	東播系	
50	2	須恵器	鉢	2～3層			4.4	1.0	△ △	12C末～13C初	東播系	
51	2	須恵器	高杯蓋	第2面		3.0	2.5	1.3	△ ○	6C		
52	2	須恵器	甕	2～3層	(24.6)		6.6	0.7	△ ○	6C		

※ 口径・底径の（ ）は反転復原値を示す。

※ 胎土 ○……良好、△……やや粗い、×……粗い

※ 焼成 ○……良好、△……やや甘い、×……甘い・生焼け

表5 出土遺物一覧（石製品・金属製品）

図	区	種類	器形	出土地点	最大長	最大幅	残存高	最大厚	胎土	焼成	時期	備考
26	1	石製品	砥石	井戸121	4.4	3.4		0.7	-	-		
27	1	鉄製品	刀?	1層	5.2			0.7	-	-		
28	1	銅製品	銭	1層	2.3			0.1	-	-	近世	「寛永通宝」
53	2	石製品	鍋	2～3層	(17.0)			1.5	-	-	12C	滑石製
54	2	石製品	砥石	石積205	10.9	3.3		1.1	-	-		

参考文献

林屋辰三郎・村井康彦 編 『京都市の地名』日本歴史地名体系第27巻 平凡社 1979年

玉城玲子 「第7章第2節 一揆の時代」『長岡京市史』本文編1 長岡京市史編纂委員会 編 1996

京都府教育委員会 『京都府中世城跡調査報告書』第3冊—山城編1—

位置づけられている。

乙訓古墳群は、京都市・向日市・長岡京市・大山崎町の3市1町にまたがって桂川右岸・乙訓地域に広がり、古墳時代前期初頭から終末期まで首長墓が築造され続けた古墳群である。古墳時代を通して継続的に築造される古墳群は全国的に見ても希少な遺跡である²⁾。平成28年にその重要性が評価され、現在まで13基の古墳が国史跡に指定されている。本古墳群についても、乙訓古墳群の首長墓系譜における正確な位置付けをするための基礎資料の整備が急務であった。そのため、古墳の大半が国有林内にある1号墳を手始めに令和4年度から調査(1次調査)を開始した。本年度は2次調査となる。測量調査を含めると4次調査となる。

本年度は令和4年度の調査結果をふまえて、主に4つの課題を解決するために調査区を設定した。第1に墳丘規模を明らかにすること、第2に古墳築造時の造成面の東西規模を明らかにすること、第3に当古墳の築造時期に関する情報を得ること、第4に昨年度検出した前方部東側の墳輪列の規模と形状を把握することである。この課題の解決のために、主として前方部とその東側、昨年度の調査区である1区を広げる形で3区を設定した。さらに後円部西辺周辺に2区を拡張する形で4区を設定した。

調査は令和6年2月1日～3月15日に実施した。調査面積は95㎡である。



図2 作業状況(南西から)



図3 墓石・墳輪列養生風景(南東から)



図4 3区埋め戻し完了状況(南東から)



図5 4区埋め戻し完了状況(西から)

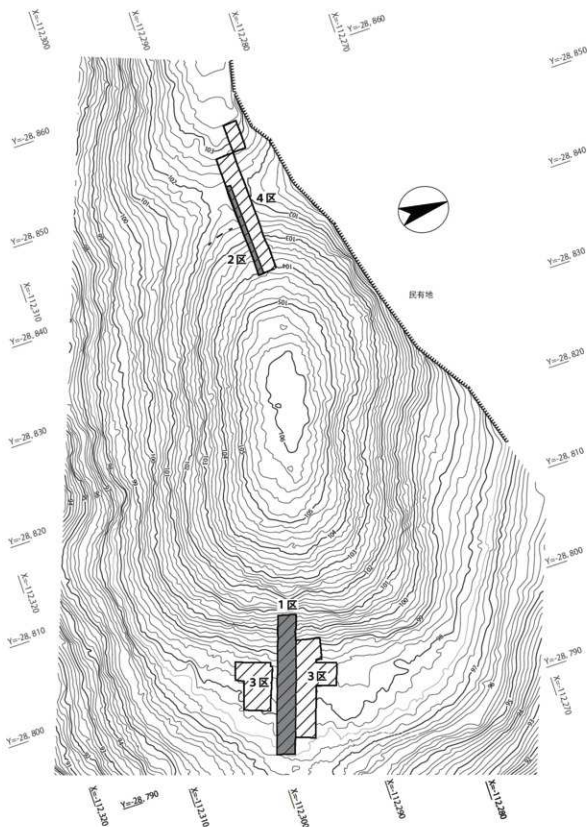


図6 調査区配置図(1:400)

2. 遺跡の環境

(1) 地理と歴史的環境

山田桜谷古墳群は旧葛野郡下山田村にあり、桂川流域と小畑川流域を分ける向日丘陵の北半部に位置する。同古墳群の北側、下山田村の中央には、向日丘陵を横断して丹波と山城を最短で結ぶことで知られる尾根道の唐櫃越が通っており、古墳時代もこの尾根道が主要経路として使用されたと考えられている。唐櫃越の北側には西側の山地から桂川へ向かって流れる西芳寺川があり、その西芳寺川流域には古墳時代後期の西方寺川古墳群や西芳寺古墳群が形成されている。鎌倉時代には山田桜谷古墳群の西方、唐櫃越沿いに法華山寺（峰ヶ堂）が創建されている。交通の要衝であったため、建武3年（1336）には大森氏や革嶋氏の軍勢が同寺に入り、明徳の乱では山名高義や小林義繁が陣を敷き（明徳2年【1391】）、その後も西園衆が天文3年（1534）に籠るなど、山城として度々利用された³¹。城の主郭には石材などが点在しており、横六式石室をもつ古墳があった可能性も指摘されている。本古墳群の北西隣接地には山田谷山古墳群がある。中近世の石仏などが点在し、14世紀の遺物などが確認されていることから、少なくとも14世紀以降に墓地として使用されていることがわかる。また、本古墳群の北側には山田桜谷共有墓地があり、中世以降の石塔等が散在している。当古墳の周辺は、重要な交通路であるとともに現在に至るまで墓域として使われていることがわかる。

山田桜谷古墳群を含む乙訓古墳群の首長墓は、北から「山田・榎原グループ」・「向日グループ」・「長岡グループ」の3つに区分されている⁴¹。山田桜谷1号墳は「山田・榎原グループ」に含まれており、現存する古墳の中で最北端に位置する。「山田・榎原グループ」の古墳は前期に一本松塚古墳や百々池古墳に始まり、次いで天皇ノ杜古墳が築造される。中期には山田桜谷2号墳、巡礼塚古墳と続き、その直後に山田桜谷1号墳が築造されたと考えられている。後期になると、穀塚古墳、清水塚古墳、天鼓の森古墳といった順番で築造されている³²。

乙訓古墳群の前期首長墓は丘陵頂部で地形改変のしやすい地点に立地している。それに対して古墳時代中・後期の古墳の立地は丘陵より下位の低位段丘面から氾濫原にかけて存在するものが大半である。本古墳は中期に築造されたと考えられているが、他の大半の中期古墳と異なり、丘陵のやせ尾根の上に位置しており、特徴の一つとして見ることができる。

「山田・榎原グループ」の多くの古墳は大正時代以降の土地開発によって著しく削平を受けており、様相が不明な点も多いが、山田桜谷古墳群は大半が国有林内に遺存することから大規模な開発を免れており、改変が少ないと考えられている。山田桜谷1号墳の現状は、後円部側で一部削平を受けているものの、墳丘の遺存状況は良好である。

(2) 過去の調査（表1）

山田桜谷古墳群は昭和61年に（財）京都府埋蔵文化財研究所が踏査中に発見した。採集した埴輪や須恵器から1号墳は5世紀後葉で、2号墳は5世紀中頃と想定されている。昭和63年には、

表1 関連調査一覧

調査年度	調査機関	調査成果	文献
昭和60年	(財)京都市埋蔵文化財研究所	踏査により山田桜谷1号・2号墳を発見。	6
平成元年	京都大学考古学研究室	25cm単位の平板測量を実施。	7
平成30年	京都市文化財保護課	西京区の松尾～山田地域における赤色立体地図を作成。 北・東側に直線地形を確認。	8
令和2年	京都市文化財保護課	三次元航空測量を実施し、平成元年から大幅な地形変更がないことを確認。	9
令和4年	京都市文化財保護課	前方部側で葺石・埴輪列、傾斜変換点、後円部側で墳丘・埴輪裾を確認。	10
令和5年	京都市文化財保護課	本報告	

京都大学考古学研究会が1号墳の測量調査を実施し、全長46mの前方後円墳であると推定した。また、測量調査中に桜谷共有墓地造営時に地形改変を受けた崖の壁面で葺石や地山を確認しており、葺石を伴う古墳と想定されている。平成元年には、同研究室が山田桜谷2号墳の測量調査を実施し、前方後円墳の可能性を示しつつも、くびれ部等の等高線が曖昧であることから、円墳の可能性もあることが示されている。平成30年には京都市文化財保護課が赤色立体地図を作成し、山田桜谷1号墳の南東から東側にかけて直線地形があることを確認し、古墳造営時における造成痕跡の可能性を示した。令和2年には、山田桜谷1号墳・山田桜谷2号墳の詳細測量図を作成し、平成元年の測量図と大きな変化がないことから、古墳に大きな改変がないことを確認した。

令和4年度には、山田桜谷1号墳において、赤色立体地図と詳細測量図を基にして、初の発掘調査を実施し、埴丘・葺石・埴輪列といった外表施設や傾斜変換点などの古墳造成に関わる変化点などを確認した。

3. 調査成果 (図7～13・表2、図版16～18)

今年度は先述のとおり、主に4つの課題を解決するために調査を実施した結果、当古墳の埴丘長46.5m、造成面の東西規模約61m、埴輪から見た古墳の時期は中期後葉、前方部東側の埴輪列は方形に整えられた土壇状遺構上面に据えられており、長径4.4m、短径4.0mの円形であることがわかった。今回検出した遺構は、前方部葺石、石組遺構、土坑、化粧土、埴輪列、土壇状遺構、傾斜変換点、後円部裾、堀切等であり、以下に検出した遺構の詳細を述べる。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
古墳時代	3区：埴丘、葺石、化粧土、円形埴輪列、土壇状遺構、土坑、 傾斜変換点・平坦面 4区：埴丘・堀切・傾斜変換点・平坦面	
平安時代	3区：石組遺構	

(1) 3区(図7～11)

1) 基本層序(図8)

Y=-28,803地点付近(墳丘東斜面)の層序は、表土以下、GL-0.05mでにぶい黄褐色泥砂(1層)、-0.2mで明褐色粘質土の流土(12層)、-0.4mで橙色～灰白色粘質土の墳丘盛土(36層)、-0.5mで灰白色シルトの地山(38層)となる。

Y=-28,800地点(埴輪列付近)の層序は、表土以下、GL-0.04mでにぶい黄褐色泥砂の流土(1層)、-0.5mで橙色細砂(φ3～5cmの礫含む)の化粧土(20層)、-0.55mでにぶい黄橙色細砂～粘質土の土壇状遺構の埋土(27層)、-0.6mで、同じく同遺構の埋土であるにぶい黄橙色泥砂(29層)があり、-0.75mでにぶい黄色砂礫(47層)の地山となる。

2) 遺構

前方形基石(図7・10) 調査区の西端、Y=-28,799～Y=-28,803付近で検出した。1区と合わせ、標高98.4～99.9m、東西2.5m、南北4.6m以上ある。石材の大きさは0.14～0.32mで、チャート、砂岩、珪質頁岩、頁岩～珪質頁岩が使用されている。最も多く使用された材質は砂岩で、その次に珪質頁岩・チャートと続く。これらの石は西方寺川以南の低位段丘から持ち込まれたものと想定できる¹¹⁾。

基石最下段の石の長辺は0.25～0.36mで、上部にある石より一回り大きめの石が使用されている。基底石と考えられる。また、基石の基底石から上部に至る傾斜角度は25°である。また、基底石1～4と基底石5～9の石の頂点のレベルを確認したところ、5～9については石の頂点のレベルがおおよそ標高98.50mとなる一方で、基底石1～4は98.64m～98.70mと緩やかにレベルが北から南へ向かって上がっている。また、基底石同士の間隔は0.1～0.2mほどであるが、基底石4と5の間には約1.0mほどの空間があることから、一部基底石が抜け落ちていると考えられる。

石組遺構(図9) 調査区北端付近、前方形基石基底石の東側で検出した。後述する土抗の中央分で「コ」字状に配石されている。東西50cm、南北40cmあり、北側で3石(石3～5)、東側に1石(石2)、南側に1石(石1)が置かれている。石材は石1が珪質頁岩、石2がチャート、石3が砂岩、石4が頁岩・粘板岩、石5が砂岩である。石の大きさは0.1～0.2mである。石材は基石に用いられた石と同じものである。

周辺に同様の石材が点在しており、石は積みまっていたものが崩れたものと考えられることから、当初の形態や性格は不明である。なお、周辺で墳丘の流土内から基石状石製品や平安時代前期の灰釉陶器及び緑釉陶器の椀が出土した。

土抗(図9) 石組遺構の下位、基石基底石に沿った東側にある東西0.76m、南北1.56mの楕円形状の土坑である。埋土内はほぼ埴輪片である。上位の埴輪片は、部分的ではあるが、埴輪の外面向上を向いている。これらの破片を除去すると、下位の埴輪片は内面を上に向けて敷かれている。上位の埴輪片が外側を上、下位の埴輪片が内側を上に向けているので、元々は土抗内に円筒埴輪



図7 3区平面図 (1:100)

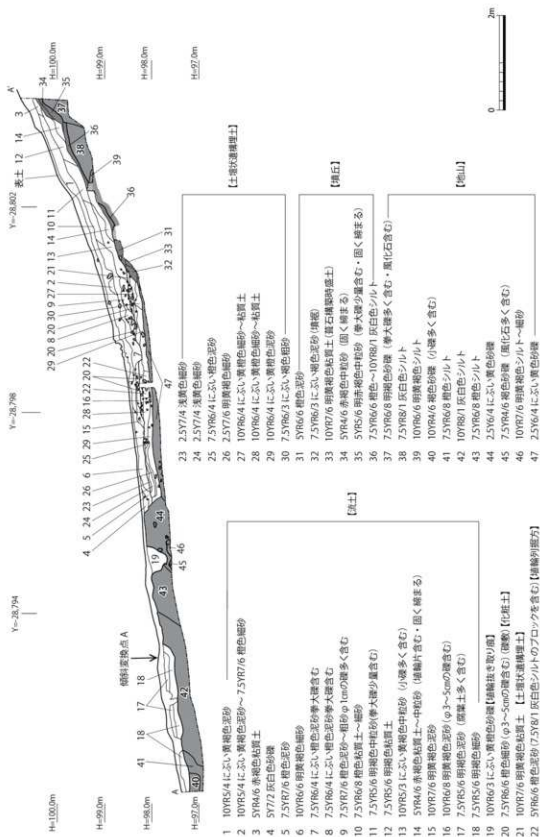


図8 3区北壁断面図 (1:80)

などが横位にして置かれた状態であったと考えられる。

円形埴輪列 (図7・11) 調査区中央部、礫敷き化粧土の上面で検出した埴輪列である。東半は削平を受け、樹立する埴輪は遺存しておらず、わずかに布掘りの掘方が残る。西半で樹立する埴輪は12基 (埴輪8～18・20) 確認した。1区で確認した埴輪と合わせると樹立した埴輪は19基、延長約5.0mある。埴輪個々の底部径は18～20cmに収まる。ほとんど同じ大きさであるものの、埴輪11については径が21cmでやや大きい。埴輪17は径が24cmである。

また、埴輪内の埋土はほとんどが、にぶい黄褐色泥砂であるのに対して、埴輪11の埋土は赤褐色泥砂であり、色調に赤みがあり他の埴輪と異なる。さらに埴輪内から出土した埴輪片には赤彩が施される埴輪片が残存する。埴輪19は形象埴輪で人物埴輪の顔部分である。樹立する円筒埴輪の内側、埴輪18の北東0.4mに位置し、顔面が下を向いた状態で出土していたため、原位置は保っていない。

今回確認した埴輪列の東半は失われており、埴輪列の正確な規模は不明であるものの、埴輪1から埴輪20までの埴輪の配列と埴輪20から東側に並ぶ埴輪の掘方跡をもとに、南北 (長径) 4.4 m、東西 (短径) 4.0 mの円形埴輪列に復元できる。

土壇状遺構 (図8・11) 1・3区で確認した遺構である。前述の円形埴輪列は、この遺構の上に樹立されていることを確認した。3区南端で長径0.24 mほどの石2石が心々間で0.75 m離れて東西に並んでいる。西壁土層断面の観察結果から、この石列の延長上で土層境界 (図11-9・10層) が存在することを確認した。さらに、この石列から約0.6 m西側でも長径0.24～0.3 mの2石が心々間で1.1 m離れて東西に並んでおり、その延長上で明褐色泥砂 (図11-8層) の化粧土が上記9層の上面に貼られていることも確認した。3区北側では化粧土を明瞭に確認できないものの、X=112,296.300付近まで土壇状盛土が広がっており、南北約6.0 m、東西5.0 m以上に及ぶ方形土壇と考えることができる。

また、土壇状遺構の埋土 (図8-21・27・30層) は墳丘裾埋土 (図8-32・33層) の上位に被さっていることが確認できる。このことから前方部の墳丘完成以降に造られたものと考えられる。北及び南の様相は不明であるが、東側は地山を削り残し、西側は前方部前面を土留めの様に用いて、その間に盛土して構築している。

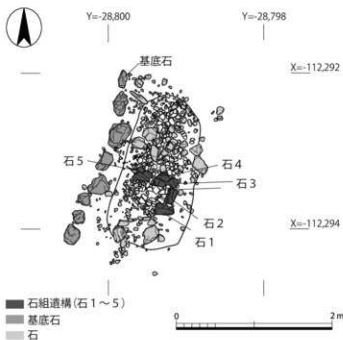


図9 石組遺構・土坑平面図 (1:50)

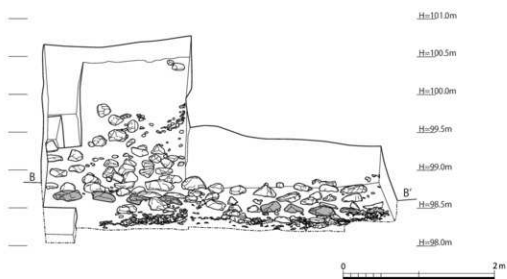
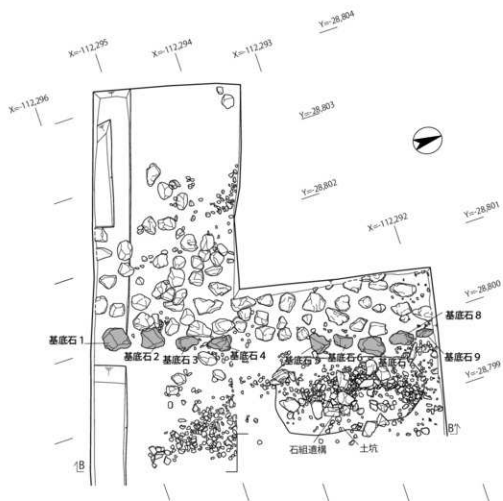


图10 葬石平面图(上)·立面图(下)(1:50)

傾斜変換点A・平坦面B（図7・8） 調査区東側で検出した傾斜変換点とその変換点より東側に造られた平坦面である。1区と3区を合わせると、検出長は4mあり、さらに調査区の南北へ続く。

Y=-28,793付近を傾斜変換点Aとして地山を0.2m削り込んで平坦面Bが造られている。平坦面B上に堆積した土は2層あり、上層が腐葉土を含む明褐色泥砂（図8-17層）、下層が明褐色細砂（図8-18層）である。1区の調査では、傾斜変換点Aの際で径0.3mのピットを確認したが、今回の調査ではピットと思われるものは確認できなかった。傾斜変換点Aは、航空レーザー測量で作成した赤色立体図に見られる直線地形と合致している。

なお、1区の平坦面Bの埋土からは埴輪片が多量に出土したものの、今回は埴輪片の出土は少量であった。

（2）4区（図12・13）

1）基本層序（図13）

Y=-28,842m付近では、表土以下、GL-0.1mでふい赤褐色砂礫（風化石多量に含む）の地山（20層）である。Y=-28,853付近ではGL-0.1mで黄褐色砂礫（こぶし大礫・風化石多く含む）（31層）である。

2）遺構

後円部墳丘（図12・13） 墳丘は地山を削り込んで成形しているが、Y=-28,843.100で傾斜変換点Cがあり、そこからY=-28,844.800地点まで傾斜角が緩やかになっている。次に、Y=-28,844.600付近で傾斜変換点Dと平坦面Eを確認した。平坦面Eは傾斜変換点から西へ3.2m続くことから、現時点ではこの地点が後円部の裾と判断した。

墳丘裾部に堆積した流土から埴輪片が出土したものの、前方部に設けた1・3区と比較すると出土量は少ない。

また、調査区東端のY=-28,839.200付近で人頭大程度の石を2石確認した。標高は104.1mである。石1は長径0.24m、石2は長径0.2m以上で、調査区北側へ続く。石の大きさは1・3区で確認した葺石の大きさと類似するが、確認した数が2石にとどまることから石の性格については現段階では判断しがたい。また、調査区外の北側で、連続する石の頭が表土上面で見えていることから、この石群は北側へ続く想定できる。

堀切（図12・13） 調査区西側で検出した北西から延びる丘陵尾根を開削した東西幅5.4mの溝状遺構である。西端はY=-28,852.780付近、東端はY=-28,847.350付近である。深さは最も深い場所で0.4mである。堀切の埋土は大きく上層・下層に分けられるが詳細には10層に区分できる。9～17層はふい黄橙色粗砂～細砂の比較的固く締まる土である一方、18層はふい褐色泥砂で締りが悪い土となる。さらに、9～17層は埴輪片がまばらに含まれるが、18層からは普通円筒埴輪の底部片・口縁部片・胴部片を含む埴輪片が多量に出土した。

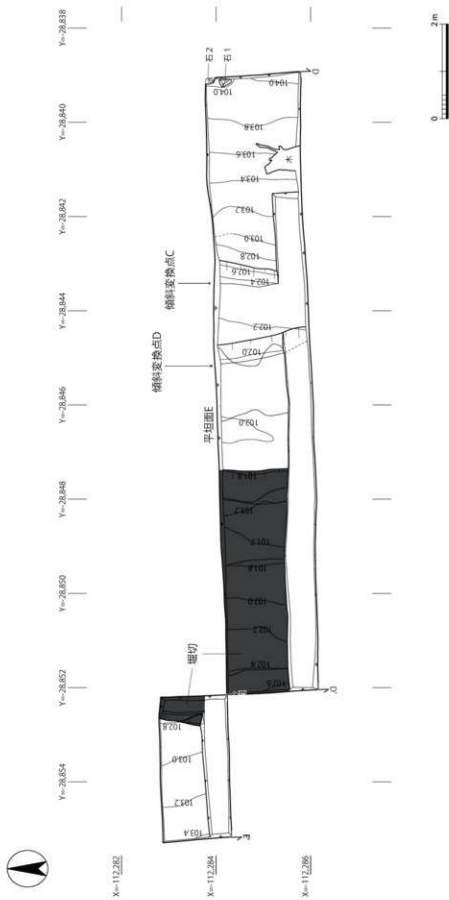


图 12 4区平面图 (1 : 80)

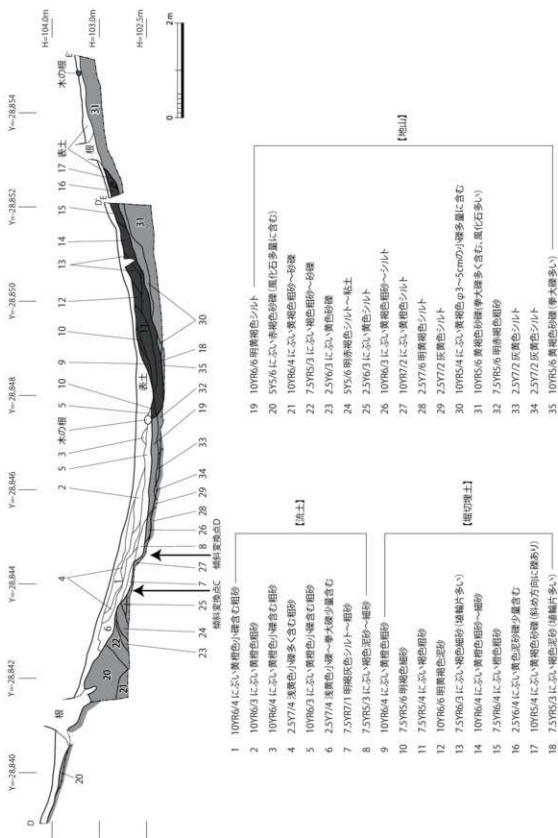


図 13 4区南壁断面図 (1 : 60)

(3) 遺物 (表3、図14～17、図版19・20)

コンテナ10箱分出土した。出土遺物は埴輪、土師器、須恵器、鉄製品、石製品などである。

出土量の大半が埴輪であるが、平安・中世に下るものも少量出土した。

埴輪は円筒埴輪と器材埴輪、形象埴輪が出土した。大半が普通円筒埴輪で、3・4区ともにそのほとんどが流土内から出土した。器財埴輪は3区で、形象埴輪は3区の円形埴輪列付近で出土した。形象埴輪の種類は豊富であるが、破片のため部位が不明なものも多い。

土器類 1～8は3区の流土内から、9は4区の流土内から出土した。

1・2は土師器の口縁部である。1は9期の時期と考えられる。2は1Aと考えられる。3は灰釉陶器である。高台は蛇の目高台で、内面に自然降下軸がかかる。9世紀の製品である。4は緑釉陶器である。10世紀前半のものである。5は土師器の羽釜である。口縁端部が摩耗しており、形状は不明瞭である。

金属製品 6は鉛玉で径2.6cmである。8は鉄製品であり、刀子の先端部分と考えられる。残存長3.8cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmである。9は鉄釘である。釘の頭部は屈曲し、先端部分は欠損している。残存長6.0cm、頭部の最大幅1.4cm、最少幅1.0cm、胴部は0.5cm角である。

石製品 7は碁石状石製品である。径3.0cmの円形を呈しており、厚さ0.6cmの扁平な石である。表面は緩やかに丸く、裏面は平坦である。

円筒埴輪 10～16が口縁部、17～23が胴部、24～29が底部である。そのうち10～14、17～21、24～26が3区、15・16・22・23・27～29は4区から出土した。

口縁部の形状は、口縁端部のみ外反するもの(10)と口縁が外傾するもの(11～13・15・16)、直立するもの(14)に区分できる。突帯が残存する埴輪(15・17～24)の断面形状はほとんどが台形を呈する(15・17・19～21)が、三角形を呈するものもみられる(18・23・24)。

口縁部径は15と16が復元でき、15は26.0cm、16は25.4cmである。底部径が復元できるのは26のみで、18.4cmである。

なお、現地保存を行った埴輪列の埴輪(埴輪8～18・20)については底部径が埴輪8が18cm、

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 総数(箱)	Aランク 箱数(点数)	Bランク 箱数	Cランク 箱数
古墳時代	須恵器、円筒埴輪、形象埴輪、 器財埴輪		円筒埴輪20点、 器財埴輪3点、形象埴輪21点		
奈良時代～平安時代	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、石製品		土師器1点、灰釉陶器1点、 緑釉陶器1点、碁石状石製品1点		
室町時代以降	土師器、鉄製品など		土師器2点、鉛玉1点、 鉄製品2点		
	合計	11箱	2箱(53点)	4箱	5箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理に伴い、A・Bランク遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

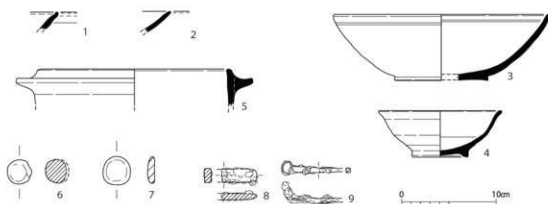


図14 出土遺物実測図（土器・石製品・金属類）（1：4）

埴輪9は19cm、埴輪10は19cm、埴輪11は21cm、埴輪12は20cm、埴輪13は20.5cm、埴輪14が20cm、埴輪15が20cm、埴輪16が18cm、埴輪17が24cm、埴輪18が20cm、埴輪20が20cm、である。突帯間隔が確認できるものは22と23で、22が11cmで、23が12cmである。

焼成は全て穴窯焼成と見られ、軟質と硬質（須恵質）に区分できる。出土したほとんどが軟質のもので全体の98%を占める。12～14、19、26～28が硬質で、それ以外は軟質のものである。色調は軟質が10YR7/6明黄褐色～7.5YR7/6橙色で、硬質は2.5Y6/2灰黄色が主体となる。調整痕は硬質のものは明瞭に見られるが、軟質のものは焼成不良のものや摩耗しているものも混在する。調整痕が明瞭なものに限り図化した。

調整は、整形後に外面はタテハケ、ナナメハケが施される。方向は左上がりである。内面調整は口縁部から第一突帯にかけてナナメハケを施す。胴部に関しては、ナデ・ユビオサエを施す。ナナメハケが残るものもある。底部については内外面ともにユビオサエの痕跡が残る。なお、26については底面に格子状の痕跡が残る。27～29についても底面に線状の痕跡が残る。

ハケ目については、ハケの条線は17・19・21・28が（4本/cm）、10～16・20・22～27が（5本/cm）、18・29が（6本/cm）が認められる。少なくとも3個体の原体が確認できる。

内面はナデで調整をする。いずれの埴輪からも断続ナデの痕跡は認められない。時期は古墳時代中期後葉と考えられる。

器財埴輪 30は朝顔形埴輪の頸部である。胴部はくの字状に屈曲し、上部は外側に開く。突帯の形状は三角形を呈する。ハケ目は外面がタテ方向のハケ目で、内面は横方向のハケ目を施す。31・32は突帯部分の破片である。31は外面にわずかにタテ方向のハケ目があるが、内面は摩耗する。

形象埴輪 33～53まで形象埴輪である。すべて3区円形埴輪列付近から出土した。

33・35は、人物埴輪である。33は、縦7.1cm、横9.0cmである。顔面の下半部から首にかけて残存する。顔面の上半部・後面は損失している。鼻・耳に剥離痕が認められるものの、形状は不明であることから、性別の判断は難しい。口は横1.4cm、縦0.4cmで半月状に開く。34は径1.4cmの円形の飾りを2つ貼りつける。35はくの字に曲がる部分に径1cmの平坦なボタン状の飾りを2つ

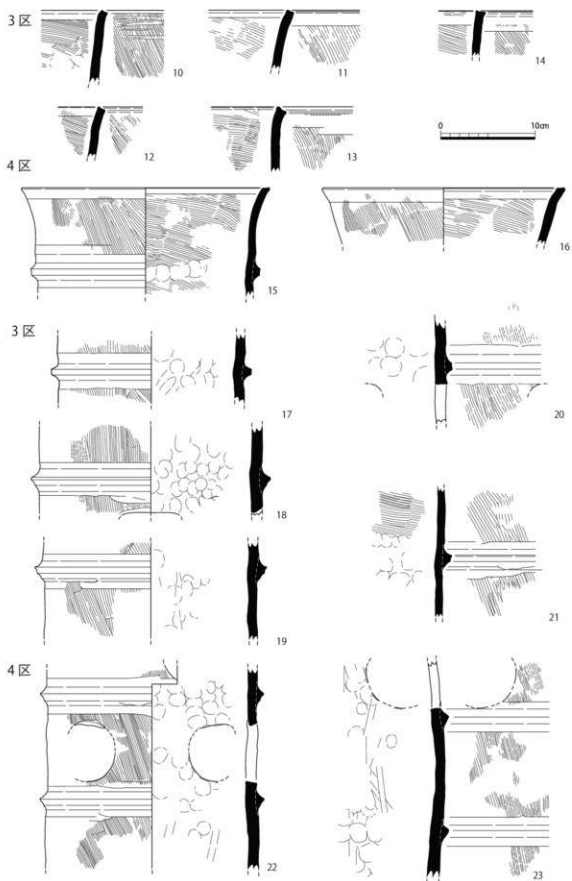


图15 出土埴輪実測図（円筒埴輪口縁部・胴部）（1：4）

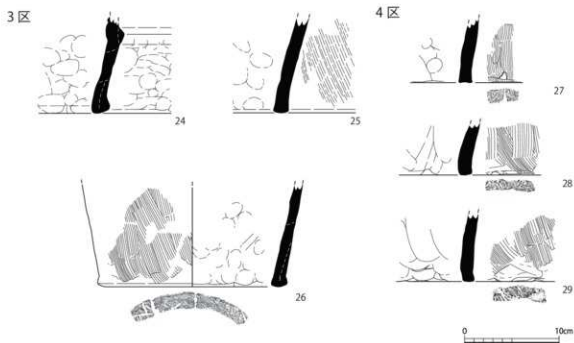


図16 出土埴輪実測図(円筒埴輪底部)(1:4)

貼りつけ、2条の線刻がめぐる。首飾りをつけた頸部～肩部にかかる人物埴輪と考えられる。

36は、鈴形の埴輪である。円形の中央に1条の線を入れている。剥離痕があることから、別個体に付属する飾りの鈴と考えられる。

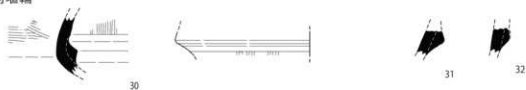
37は径6.0cmの筒状の埴輪である。上部はまっすぐ立ち上がるが、下部はわずかに外側に開く。獣脚の可能性が考えられる。

38～43は、家形埴輪の可能性ある。38・39はほぼ平坦で明瞭な曲面がない。外面にハケ目を施す。内面は摩耗しており、調整は不明である。壁の破片と考えられる。40・41は上屋根の一部と考えられる。42は外面にハケ目と赤彩が施される。43は縦9.1cm、横4.8cmである。下部の粘土に方形2.2cmほどで扁平状に粘土を貼り付ける。家の部材の可能性が考えられる。

44～53は、欠片であることから部位の断定が難しい。

44は、1cm単位の格子状の線刻を施す。断面は「く」の字状に屈曲する。45は縦5.4cm、横3.9cmで、湾曲する。46は縦3.6cm、横3.5cmである。小片であるが、わずかに上に屈曲する。47は縦3.2cm、横4.0cmを計る。ボタン状の粘土を貼り付けている。48は縦4.7cm、横4.2cmである。3本の条線を施す。条線がない部分はナデで粘土を押しつぶしている。49は上部が湾曲する。正面には細い粘土で円形に貼り付ける。下半部のみに粘土が残っているが、上半部は剥離痕跡が円形状に残る。50はL字状に湾曲する形状である。上部に別粘土を貼り付け、段状に仕上げる。51はゆるやかに湾曲し突帯状の粘土を貼り付けている。外面の大半が剥離している。52は縦3.2cm、横2.6cmで湾曲する。53は縦8.5cm、横3.6cmである。外面の下半部は剥離している。52・53ともに内面に剥離痕跡がなく、筒状の可能性が考えられる。

器財埴輪



形象埴輪

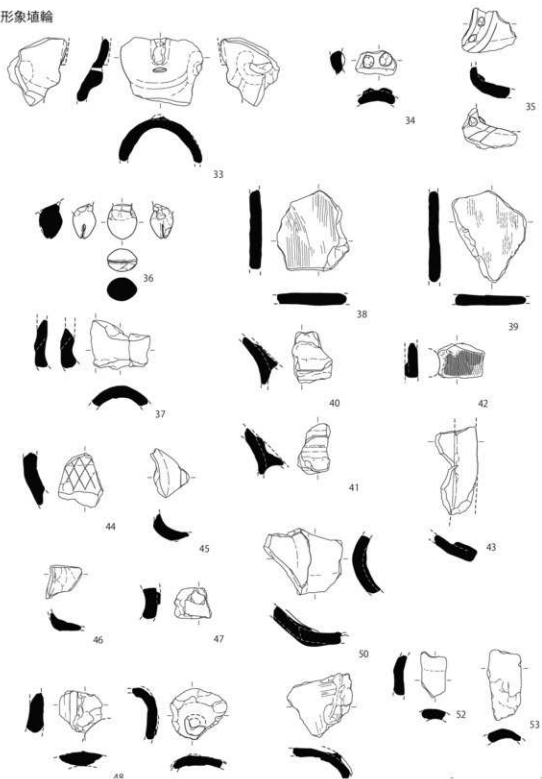


图17 出土埴輪実測図（器材埴輪・形象埴輪）（1：4）

4. まとめ (図18)

今回の調査で、1号墳の墳丘長、古墳築造時の造成面の東西規模、埴輪からみた古墳の築造時期、さらに前方部東側の土壇状遺構と円形埴輪列の規模及び構造を明らかにすることができた。

墳丘長については、前方部側の1・3区で葺石基底部を、2・4区で後円部裾を確認したことにより、当古墳の墳丘長は46.5mであることがわかった。

造成面については、1・3区の東端付近で検出した傾斜変換点Aが前方部葺石基底部から東へ8.2mの地点にあり、赤色立体地図に認められる前方部東側の直線地形と合致すること、同様に4区の堀切西端が赤色立体地図に認められる後円部西方の周溝状地形西端と合致することから、造成面の東西規模は約61mであることがわかった。造成面西端を限る堀切は、後円部墳丘裾から2.8m、西側から掘り込まれ、東西幅は5.4m、深さは0.4mある。

埴輪から見た古墳の時期については、前方部、後円部とも樹立したものはなく、墳丘からの流出土中から出土したものと、前方部前面の円形埴輪列とその周辺で出土したものである。いずれも古墳時代中期後葉のものであった。

前方部東側の埴輪列については、層序からみると、前方部構築以降に方形に整えられた土壇状遺構上面に据えられており、長径4.4m、短径4.0mの円形であることがわかった。土壇状遺構は墳丘裾から傾斜変換点までの南北幅約6.0m、東西幅約8.2mの規模と考えられる。

前方部葺石については、頂部のレベルが北から南へ向かって約20cm緩やかに高くなっており、主軸想定付近及び中央に近い部分を高く設置する意図があったことが指摘できよう。

円形埴輪列周辺で複数の形象埴輪が出土していることも同埴輪列の性格を考える上で重要である。形象埴輪はほとんどが小破片で種類に分からないものが多い。人物埴輪(33)については、京都市内での出土例は伏見区の鳥羽遺跡で出土した巫女形埴輪に次ぎ2例目となる。また、本古墳では分布調査の際に獣脚と考えられる埴輪片が出土していることから、欠片ではあるものの今回出土した形象埴輪が動物埴輪である可能性も十分考えられる。

また今回の調査で9～10世紀代の灰釉陶器と緑釉陶器が1点ずつ出土した。平安時代以降の遺物が出土したのは初めてとなる。古墳築造後も古墳周辺で人の出入りがあった痕跡と言える。本古墳の北西に位置する山田桜谷古墓群の分布調査を京都大学が実施した際にも、9世紀の灰釉陶器の納骨壺と10世紀頃と想定されている須恵器片が確認されている¹⁹⁾。今回確認した遺物の時期とほぼ同時期であることから、平安時代に山田桜谷1号墳とその周辺において人の出入りがあったことが言えるだろう。平安時代の遺物出土地点に近接して確認できた「コ」字状の石組遺構は、この時期の活動を見る上で重要である。

これまでの測量調査と2回の発掘調査を通じて、いくつかの解決すべき課題が出てきている。詳細測量図では前方部の北東角、南東角ともに不明瞭で、くびれ部も明確な形状がわからない状態である。さらに後円部から前方部にかけて墳頂が平坦で連続しており、両部の境が墳頂でも不明瞭である。段築の有無も確認できておらず、主体部の規模・形状とも推測すらできない状態である。近

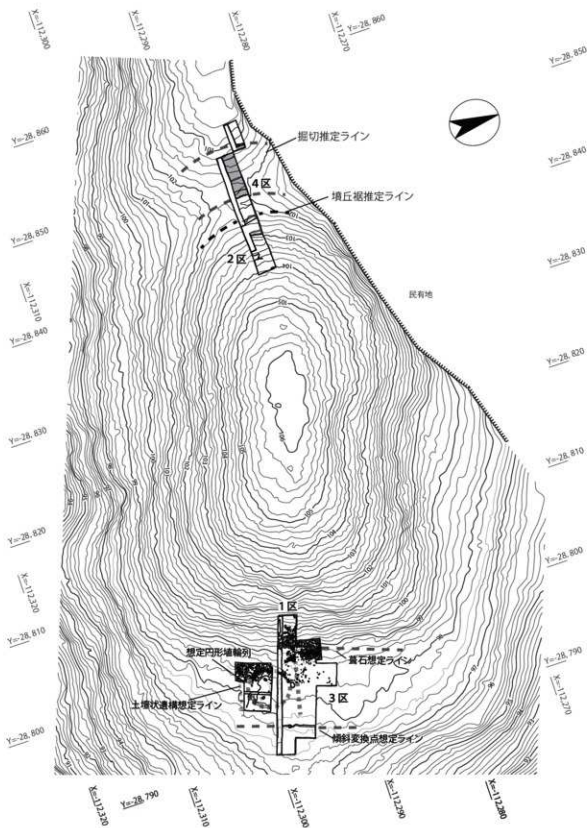


図18 山田桜谷1号墳現状復原図（1：400）

接する法華山寺の城塞化に伴い当古墳が改変を受けている可能性を含め、これらの課題解決のために引き続き調査が必要である。

(清水早織)

謝辞

今回の調査及び整理作業において土地の所有者である林野庁をはじめとされた多くの方々にご協力・ご指導を賜った。末筆ですが、ここに感謝の意を表します。

京都府教育委員会、京都府林務事務所、(公財)京都市埋蔵文化財研究所、(公財)向日市埋蔵文化財センター

(以下、五十音順 所属敬称略)

一瀬和夫、宇野隆志、梅本康広、河内一浩、木許 守、國下多美樹、小泉裕司、高橋克壽、辻康男、中居和志、中島皆夫、長友朋子、橋本清一、東影 悠、福島克彦、丸川義広、和田晴吾

註・引用文献

- 1) 『乙訓古墳群調査報告書』京都府教育委員会、2015年。
- 2) 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学編22、1988年。
- 3) 『史料 京都の歴史15 西京区』平凡社、1994年。
- 4) 宇野隆志『平安京以前—古墳が造られた時代—』(京都市文化財ブックス第26集)京都市文化市民局、2012年。
- 5) 註1文献の総括から。
- 6) 丸川義広・上村和直「山田桜谷古墳群」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1988年。
- 7) 標 智仁ほか「山田桜谷1号墳測量調査報告」『第41とれんち』京都大学考古学研究会、1989年。
- 8) 清水早織・新田和央「IV - 6 山田桜谷古墳群 (18A006)」『京都市内詳細分布調査報告書 平成30年度』京都市文化市民局、2019年。
- 9) 清水早織「VI - 6 山田桜谷古墳群 (20A011)」『京都市内詳細分布調査報告書 令和3年度』京都市文化市民局、2022年。
- 10) 清水早織「IX山田桜谷古墳群」『京都市内遺跡発掘調査報告令和5年度』京都市文化市民局、2024年。
- 11) 橋本清一先生に現地にて石材鑑定していただき、ご教示を賜った。
- 12) 『墳輪の分類と編年』墳輪検討会シンポジウム2022資料集、墳輪検討会、2022年。
- 13) 溝上宏美ほか「山田中近世墓地調査報告」『第46とれんち』京都大学考古学研究会、1995年。

